

# 翁方綱『蘇齋筆記』訳註 (五)

西林 昭一

## 要 旨

『跡見学園女子大学紀要』二十四号所載の拙稿「翁方綱『蘇齋筆記』訳註(四)」を承け、  
本号では巻十五（碑刻・楷法）二四条を訳註するものである。

## 凡 例

- ※ 各条には通し番号を附す。ただし、巻ごとに改めて「一」からおこす。
- ※ 原文には句読点を施し、訓下し文をそえ、語釈等を註記する。
- ※ 原文は正活字体で表記する。ただし底本の筆写にかかる別字は、一々を註記しない。
- ※ 訓下し文は、わが国での常用漢字を用い、また現代かなづかいとする。その際、書名には『』、  
作品名には任意にへんを附し、引用文は「」で括弧する。なお現代通行文において、かな書きを  
慣用とする漢字は、おおむねこれに従う。なお語幹のルビは、最少限にとどめて附す。
- ※ 註記は、各条の訓下し文の後に附す。その際、書法に関する用語および人名・作品を主として簡  
記し、その他の語は最少限にとどめる。なお註記中の引用文は、校勘にわたるものは原漢文、そ  
の他は訓下し文とするが、訓下し文では、できるだけ多く原漢字をとどめるものとする。

蘇齋筆記 卷第十五

〔一〕周岐陽石鼓<sup>(539)</sup>。唐初歐陽虞褚共推古妙。而山谷謂右軍書法出於石鼓<sup>(540)</sup>。此所謂右軍歐陽虞褚云者。雖未見其論著之詞。而石鼓篆法。爲書學之所祖。則實不可易也。不知篆法。無以得作隸之原。不究篆隸。無以得正楷之原耳。

周の岐陽の石鼓は、唐初 歐陽・虞・褚、共に推して古妙とす。しかして山谷謂う「右軍の書法は、石鼓に出ず」と。ここにいわゆる 右軍・歐陽・虞・褚と云うものは、未だその論著に見ざるの詞と雖ども、しかも石鼓の篆法は、書学の祖とするところとなすなれば、則ち實に易<sup>やす</sup>にすべからざるなり。篆法を知らざれば、もって隸を作すの原<sup>みなもと</sup>を得るなく、篆隸を究めざれば、もって正楷の原を得るなきのみ。

(539) 岐陽石鼓 註(1)前出

(540) 山谷謂右軍書法出於石鼓 山谷は北宋の黃庭堅(一〇四五—一一〇五)の号。字は魯直、別号は涪翁。江西省分寧(今の修水)の人。治平三年(一〇六六)の進士で、神宗・哲宗・徽宗の三朝に諸官を歴て、吏部員外郎に至った。その間、秘書省校書郎のとき、『神宗實錄』の編集に当たったが、実録中に新法党を非難したかどにより、哲宗の紹聖元年(一一〇九四)四川省へ左遷された。徽宗即位の大赦により、荆南(湖北省)にもどされたが、再び宜州(広西省)、永州(湖南省)へ左遷され、官途に不遇のまま歿した。南宋の度宗朝に入って、文節と諡された。

文章に工みでまた詩に長じた。初め蘇軾の門に入り、秦觀・張耒・晁補之と「蘇門四学士」とよばれた。その詩は奇崛放縱で江南詩派の宗とされ、蘇軾とともに「蘇・黄」と称せられた。その書は、蘇軾・米芾・蔡襄とともに

宋の四大家の一人にあげられ、楷・行書を能くし、ことに草書にすぐれた。その学書の経歴については、自ら「予、草書を学ぶこと三十余年なり。初め周越を以て師と爲す。故に二十年抖擻せるも、俗氣脱せず。晩に蘇才翁・子美(舜元・舜欽)の書を得て之を觀、乃ち古人の筆意を得たり。其の後、又に張長史(旭)・懷素・高閑の墨蹟を得て、乃ち筆法の妙を窺う」といい「山谷題跋」卷七「書草老杜詩後与黃斌老」その大概が知られ、また学書にはたえず研鑽を重ねたことが『山谷題跋』によって窺われる。たとえば「余、黔南に在りしとき、未だ甚しくは書字の綿弱なるを覚えず。戎州に移るに及び、旧書を見るに多く憎む可し。大概、十字中三四差や可なる耳。今方めて古人の沈著痛快の語を悟る」という(同書卷四「書右軍文賦後」)。禅学に造詣が深かったかれは、書法においても頓悟する面をうかがわせる。たとえば「紹聖甲戌(一一〇九四)黃龍山中に在りて、忽ち草書三昧を得たり。前に作る所は大だ芒角を露すを覚ゆ」といい(同書「書自作草後」)、また、「山谷、黔中にあるの時の字は、多く意に隨いて曲折し、意は到るも筆は到らず。鑿道に来るに及べる舟中、長年邊漿せる羣丁棹を撥するを觀て、乃ち少しく進むを覚ゆ。意の到る所、輒ち能く筆を用う」という(同書卷九「跋唐道人編餘草稿」)。しかし一方では用筆・執筆法についても格別の注意をはらっている。たとえば「凡そ書を学ぶには先ず用筆を学ばんことを欲す。用筆の法は、双鉤回腕、掌虚指実ならんことを欲す。無名指を以て筆に倚すれば、則ち力有り」という(同書卷五「跋与張載熙書卷尾」)のがそれで、蘇軾とは異り、ほとんど書の専家に等しい言辞が多くみられる。

いま手近でみられる墨跡の影印本に『中国法書選』47黃庭堅集がある。詩文集に『黃山谷文集』全七十卷がある。伝は『宋史』卷四四四、『宋史新編』卷一七一、『皇朝名臣言行統録』卷一、『元祐党人伝』卷四、『皇宋書録』卷中、『書史会要』卷六、『宋人軼事彙編』卷一二、倉田淳之助「黃山谷の性格」(『吉川博士退休記念中国文学論集』)、中田勇次郎「黃山谷の書と書論」、杉村邦彦「米芾と黃庭堅」(『書論』11)、大野修作「黃庭堅の書論」(『書論』15)、同「黃庭堅集」(『中国法書ガイド』47)その他がある。

(541) 右軍書法出石鼓 この句の直接する典拠未詳。註(12)参照。

〔二〕寶泉述書賦(542)注。据吏部侍郎蘇勗(543)所記。以岐陽石鼓。爲史籀(544)之迹。又以三體石經(545)爲蔡邕(546)書。今考蔡邕書石經(547)。是隸書非三體。蓋寶所見是魏正始所刻石經。既言四紙非其全刻。是誤傳爲漢石經耳。蘇勗在唐初。已稱石鼓爲籀書。則其沿傳不知始於何時。蓋唐世考證之學。已不能精審矣。

寶泉『述書賦』の注に、吏部侍郎・蘇勗の記するところに据りて、岐陽の石鼓をもつて、史籀の迹となし、又(ま)に三體石經をもつて蔡邕の書となす。今、蔡邕の書せる石經を考うるに、是れ隸書にして三體にあらず。蓋し寶泉の見るところは是れ魏の正始に刻するところの石經にして、すでに「四紙」と言うなれば、その全刻にあざらん。是れ誤伝して漢石經となすのみ。蘇勗は唐初に在りて、すでに石鼓を稱して籀の書となすなれば、則ちその沿伝は何れの時に始まれるかを知らず。蓋し唐世の考證の学は、すでに精審なるあたわず。

〔542〕述書賦注 ここは『述書賦』巻上の冒頭部「篆則周史籀、云々」部の註をさす。

〔943〕蘇勗 註(2)前出。

〔544〕史籀 註(5)前出。

〔545〕三體石經 註(130)前出。

〔546〕蔡邕 註(91)前出。

〔547〕蔡邕書石經 いわゆる熹平石經。註(252)前出。

〔三〕三國志劉劭傳末附韋誕(548)。條下詳注同時書人。而鍾繇(549)傳無之。唐寶泉述書賦(550)。於魏舉五人。有鍾會(551)而無鍾繇。

『三國志』劉劭傳の末に韋誕を附し、条下には詳しく同時の書人を注す。しかれども鍾繇の伝これなし。唐の寶泉の『述書賦』には、魏において五人を挙ぐ。鍾会あれども鍾繇なきなり。

〔548〕劉劭傳末附韋誕 『三國志』魏書卷二一の註をいう。註(99)前出。

〔549〕鍾繇 註(189)前出。

〔590〕述書賦於魏舉五人 『述書賦』巻上にいう韋誕字は仲將、虞松字は叔茂、司馬師字は子元、その弟の昭字は子上、鍾会字は士季の五人をさす。

〔551〕鍾会 鍾会(二二五—二六四)字は士季、河南省潁川長社の人。鍾繇の子である。魏(二六〇—二六四)の末、鎮西將軍、都督関中諸軍事として蜀を平定し、軍功によって司徒に進んだ。が、謀反をはかり、衛瑾らに誅された。その書は、本伝の裴松之の註に引く郭頒『魏晉世語』に「会、善く人の書を效う」というほか、庾肩吾『書品』は「上之上」におき「士季の元常(鍾繇)を範とするは、猶お子敬(王献之)の逸少(王羲之)を粟くるがごとし。而して功拙兼ね効い、真草皆に成る」と評し、張懷瓘『書斷』巻中には「妙品」に入れ、「父の風有るも、稍や筋骨を備え、善く行草を兼ね、尤も隸書に工みなり。遂に逸致飄然、凌雲の志有り」という。ただしその書は伝存していない。著に『道論』ほかがある。伝は『三國志』魏書卷二八、『世說新語』。

〔四〕漢碑尙多傳世。而魏晉六朝罕見者。以其時禁私立碑也(552)。周石鼓秦刻石。皆不著書名。周石鼓之爲史籀(553)。固後人之詞無其實。据秦刻石之爲李斯(554)。亦不能盡以概岱越諸刻。況秦篆之傳。特以其篆。非以其人也。上蔡牽犬之子(555)。不使列藝林之上。亦奚傷哉。至若漢碑。雖蔡中郎(556)以石經著聞。然其時尙有馬日碑堂(557)谿典諸人。諸經筆勢亦非一人之書。杜詩秦有李斯漢蔡邕(558)。特渾舉之詞耳。是漢魏以前有石蹟。而不著書人也。仇補仇靖朱登孫興。皆見本

碑。而罕知者。故社云作者絶不問也。若晉以後山陰二王。及蕭阮(552)羊薄之徒。以書名者。乃不聞有所書之碑刻。是晉宋南朝有書家。而無其石蹟也。

漢碑は尚お多く世に伝う。而れども魏晉六朝は見るもの罕なり。その時私立の碑を禁ずるをもつてなり。周の石鼓 秦の刻石は、皆に書せる名を著わさず。周石鼓の史籀となすは、固より後人の詞にしてその実なし。秦の刻石の李斯となすに据りても、亦た尽くはもつて岱・越の諸刻を概するあたわず。況んや秦篆の伝う、特だその篆をもつてするのみにして、その人をもつてするにあらざるをや。上蔡牽犬の子は、芸林の上に列せしめざるも、亦た奚ぞ傷まんや。漢碑の若きに至りては、蔡中郎石経をもつて著聞すと雖も、然れどもその時 尚お馬日碑・堂谿典の諸人あり。諸経の筆勢も、亦た一人の書にあらざ。杜詩に「秦に李斯あり漢には蔡邕」とは、特だ渾拳の詞なるのみ、是れ漢魏以前に石蹟あるも、書人を著わさざるなり。仇繡・仇靖・宋登・孫興は、皆に本碑に見ゆるも、知る者は罕なり。故に社は「作者絶えて問わず」と云うなり。 晋以後の山陰の二王、及び蕭・阮・羊・薄の徒の若き、書名をもつてする者も、乃ち書するところの碑刻あるを聞かず。是れ晋・宋・南朝に書家あれども、その石蹟なきなり。

(552) 禁私立碑 魏および晋宋における立碑の禁については、「[五]」の註で後述する。

(553) 史籀 註(5)前出。

(554) 李斯 註(56)前出。

(555) 岱越諸刻 岱は岱嶽をさし泰山の異称。越は国名で、夏の少康が封ぜられた会稽をさすか、あるいは句踐が都を瑯邪に遷したそこをさすか不詳。い

ずれにしろここは、いわゆる秦刻石七種をさす。

(556) 上蔡牽犬之子 上蔡は河南省汝南県の北の地名で、ここは李斯の籍貫。「牽犬の子」とは、『史記』卷八七李斯伝冒頭に「年少の時、郡の小吏と為る。吏舎 厠中の鼠、不潔を食い、人犬に近づき、数しば之に驚恐するを見る。斯、倉に入り、倉中の鼠 積粟を食い、大廡の下に居り、人犬の憂を見ざるを觀る。是に於て李斯 歎じて曰く、人の賢不肖は譬えば鼠の如し矣。自ら処る所に在る耳と。乃ち荀卿に従い、帝王の術を学ぶ。云々」を頭においていう。

(557) 蔡中郎 蔡邕をさす。註(61)前出。

(558) 馬日碑堂谿典諸人 馬日碑は馬日碑の錯写。ここは『後漢書』卷六。蔡邕伝に「熹平四年、乃ち五官中郎将堂谿典、光禄大夫楊賜、諫議大夫馬日碑、議郎張馴・韓說、太史令单颺等と、六经文字を正定せんことを奏求す。靈帝之を許す。邕乃ち自ら碑に書し、工をして鐫刻せ使め、太学の門外に立つ。是に於て後儒晚学は、咸な取りて正す焉。云々」とあるのに拠る。

馬日碑(？)一九四年)字は翁叔、陝西省扶風の人。経学者馬融の族子で、馬融の学業を伝えた。その才学によって官に入り、東觀に在って蔡邕・楊彪・韓説らと中書の五经を典校した。官は太尉・太傅に至った。伝は『三輔決録』。石経に関与する馬日碑については、右に引く蔡邕伝の註に『洛陽記』を引き「太学は洛城の南開陽門外に在り。講堂は長さ十丈、広さ二丈。堂前に石経四部あり。本碑は六十四枚、西行し『尚書』『周易』『公羊伝』の十六碑 存し、十二碑は毀る。南行の『礼記』十五碑は悉く崩壊す。東行の『論語』三碑は、二碑 毀る。『礼記』の碑上には、諫議大夫馬日碑、議郎蔡邕の名あり」という。堂谿典(複姓。一に唐谿典に作る。『風俗通』姓氏篇参照。生卒不詳)字は伯井、河南省潁川(今の禹県)の人。西鄂長、五官中郎将に官した。いま石経の残石の一『公羊伝・哀公十四年』中に「谿典」の二字がみえる(徐森玉『漢石経集存』参照)。ただし残石のため文意がつかめず、書者名とは断定できない。なお(嵩山開母廟石闕)の西闕北面にある、いま残存一八行、行五字の八分書(請雨銘)は、初録の趙明誠『金石録』卷一六以来、ほとんどの金石書は(堂谿典請雨銘)と標目し、書者を堂谿典にあてて、翁方綱はその『兩漢金石記』卷九で詳考し、文中の「典大君、諱

協、字季度、自為郡主簿、作闕銘文」の「典大君、諱協」と堂谿典との関連について疑問をのこしている。このことについて方朔は『枕經堂題跋』卷三で論究し、「大君」は父をさし、即ち堂谿協、字は季度が「請雨銘」ならびに「開母廟石闕銘」の書者であると結論する。方朔の説に理があると思う。

(559) 秦有李斯漢蔡邕 この句は下文双註の「作者絶不問」（正しくは「中間作者絶不問」と同じく「杜少陵集」卷一八「李潮八分小篆歌」中の句である）。

(560) 渾拳 ここでは、まとめて例挙する意であろうが、用例を見かけない。

(561) 仇紳仇靖朱登孫興 仇紳・仇靖は註(207)、朱登は(205)、孫興は(208)にそれぞれ前出。

(562) 蕭阮羊薄 蕭は宋の蕭思話および梁の蕭子雲がともに書人として名がある。阮は梁の阮研、羊は宋の羊欣、薄は宋の薄紹之をさす。蕭はどちらを指すか明確でないが、張懷瓘『書断』卷中には、蕭子雲が阮研と前後しておかれ、『書後品』では阮研と並べて月旦され、また本書卷一四「四」に「蕭子雲書列子」を挙げているので、子雲とみておく。

蕭子雲（四八七〜五四九年）字は景喬、江蘇省南蘭陵の人。齊の文獻王・嶷の子で、建武年間（四九四〜九七）新浦県侯に封ぜられた。梁の武帝に仕え、侍中、国子祭酒に官した（蕭祭酒と呼ばれるのはこれによる）が、侯景の乱で晋陵の顯靈寺にかくれ、僧房で餓死した。書は各体を善くしたが、とくに草書と楷書は当時に典範とされた。『南史』の本伝に「（前略）其の書迹は、雅に武帝の重んずる所と為る」といい、梁の袁昂『古今書評』に「上林の春花の如し。遠近瞻望するに、処として発せざるはなし」と婉麗な書風を称揚しているが、唐太宗の「王羲之伝賛」には「丈夫の気無く、行々春蚓を繁するが若く、字々秋蛇を結せるが如し」と非るのをはじめ、李嗣真『書後品』、張懷瓘『書断』など、唐代の評価は当代に比べて低い。ただし子雲の創始にかかるという小篆の飛白体は、張懷瓘は「妍妙至極、与に比肩し難し、云々」と称揚し、『法書要録』卷三に、崔備と李約の「壁書飛白蕭字記」の二篇、また張詠の「蕭齋記」を載せ、それぞれ賛美している。刻帖に『淳化閣帖』卷四「列子天瑞篇」、『玉煙堂帖』卷二「出師表」がある。伝は『梁書』卷三五、『南史』卷四二、『宣和書譜』卷一七、『書史会要』卷四

ほか。

阮研（生卒年不詳）字は文幾、河南省陳留の人。官は交州刺史に至った。書は楷・行・草書をよくした。庾肩吾『書品』に「阮研は今に居りて古を觀、尽く衆妙の門を窺う。復た王（羲之）を師とし鍾（繇）を祖とすと雖も、終に別構の一体を成す」として、「上之下」に品等し、袁昂『古今書評』には「貴胄品次を失するが如く、復た英賢を排突せず」と評している。張懷瓘『書断』卷中には、「其の行草は大王（王羲之）に出するも、甚だ精熟なり」といい、また「時に称す、蕭（子雲）陶（弘景）等は、各おの右軍の一体を得たりと。而れども此の公筋力最も優る。云々」といつている。刻帖に『淳化閣帖』卷四「得書帖」がある。伝は『書断』卷中、『宣和書譜』卷一七。

羊欣は註(472)、薄紹之は註(473)前出。

〔五〕晋宋禁碑。据宋書禮志<sup>(563)</sup>。云漢以後天下送死奢靡。多作石室石獸碑銘等物。建安十年。魏武帝以天下雕幣。下令不得厚葬。又禁立碑。魏甘露二年。大將軍參軍太原王倫卒。倫兄俊作表德論云。祇畏王典不得爲銘。乃撰錄行事。就刊于墓之陰。云爾。此則碑禁尙嚴。此後復弛替。晉武帝咸寧四年。又詔禁立碑。至元帝大興元年。有司奏。故驃騎府主簿故恩。營葬舊君願榮求立碑。詔特聽立。自是後禁又漸頽。大臣長吏。人皆私立。義熙中。尙書祠部郎中裴松之。又議禁斷。於是至今。又裴松之傳。亦詳載其上表禁立碑語。按此則南朝禁碑。自魏晉至梁陳。凡三百餘年。是以北魏北齋尙多石刻。而晉宋齊梁無之。故以二王及蕭阮羊薄諸人。無一字刻石者。<sup>(564)</sup>  
周孝侯碑後人妄託

晋・宋は碑を禁ず。『宋書』の礼志に据れば、云う「漢以後、天下死を送るや奢靡にして、多くは石室・石獸・碑銘等の物を作る。建安十年、

魏武帝は天下彫弊せるをもって、令を下して厚葬を得ざらしめ、又立碑を禁ず。魏の甘露二年、大將軍參軍・太原の王倫卒す。倫の兄俊は表徳論を作りて云う、王典を祇しみ畏れ銘を為るを得ず。乃ち行事を撰録し、就いて墓の陰に刊す、とるか云う。これ則ち碑の禁尚お厳たり。

この後復た弛み替る。晋武帝の咸寧四年、又詔して立碑を禁ず。元帝の大興元年、有司奏す、故の驃騎府主簿故恩あり、旧君の顧栄を營葬し、立碑を求むと。詔あり特に立つを聴す。是れより後禁は又漸く頽れ、大臣・長吏、人ごとに皆に私立す。義熙中、尚書祠部郎中・裴松之、又議して禁断す。是れ於り今に至る」と。又裴松之の伝にも、亦た詳しくその上表せる立碑を禁ずるの語を載す。これを按ずるに則ち南朝の禁碑は、魏晋より梁・陳に至るまで凡て三百余年なり。是をもつて北魏・北斉は尚お石刻多けれども、晋・宋・齊・梁はこれなし。故に以つてに二王及び蕭・阮・羊・薄の諸人、一字として刻石せるものなし。

周孝侯碑は後人妄りに託するものなり。

(563) 宋書礼志 以下「漢以後……於是至今」は、『宋書』卷一五志第五礼二を引くが、中間四六字を省略している。

(564) 其上表禁立碑語 『宋書』卷六四裴松之本伝に「(前略)松之は世の私碑を立つること事実に乗くこと有るを以て、表を上り之を陳べて曰く」とあって、以下に二一四字の上表文を載せている。

(565) 周孝侯碑 未詳。後考に俟つ。

〔六〕 晋宋齊梁陳無碑。而北魏北齊有之。然造象石刻及諸碑志。多乖六書之字體也。竇泉述書賦。<sup>(566)</sup>却詳於晋宋齊梁。而北朝止有文深孝逸仲寶。<sup>(567)</sup>

乃若唐初虞歐。遙企山陰而永興於蕭阮諸人。必嘗親得其脈。今不可考矣。率更則師劉仲寶。<sup>(573)</sup>今不見仲寶之蹟。若汝帖所摹姚秦像銘。<sup>(574)</sup>及樊孝謙乾明孔廟碑。<sup>(576)</sup>可知其大畧耳。

晋・宋・齊・梁・陳には碑なきも、北魏・北斉にはこれあり。然れども造象石刻、及び諸碑志は、多く六書の字体に乖けるなり。竇泉『述書賦』は、却つて晋・宋・齊・梁に詳しくして、北朝は止だ文深・孝逸・仲寶あるのみ。乃ち唐初の虞・欧の若きは、遙かに山陰を企む。しかし永興は蕭・阮諸人に於て、必らずかつて親らその脈を得たるも、今考うべからず。率更は則ち劉仲寶を師とせるも、今仲寶の蹟を見ず。『汝帖』摹するところの「姚秦像銘」、及び樊孝謙の「乾明孔廟碑」の若きありて、その大略を知るべきのみ。

(566) 竇泉述書賦 註(514)前出。

(567) 文深 趙文深(生卒年不詳)をさす。本名は文淵。唐諱を避けて正史は文深と記す。字は徳本、河南省南陽(『述書賦』註には甘肅省天水)の人。

北周の書学博士で、善書をもって時に名があつた。『周書』本伝には、少年時代から楷隸を学び、一一歳にして魏帝に書を献じて賞讃されたという。また「文深、雅より鍾・王の則有り、筆勢 観る可し。当時の碑榜は、唯だ文深及び冀備のみ」とあり、ことに宮殿樓閣の題額の書は、梁から北周に仕えた書人の王褒にも推重され、また天和元年(五六六)、廟寝が成つて題榜した功績に対し、武帝は邑二百戸を増し趙興郡主に除した、ということの特筆している。なお北周の貴頭の者は、王羲之の子孫である王褒の書を学び、趙文淵の書は顧られなくなった。趙文淵もすんで王褒に效つたがものにならず、却つて世人に誹られたという。この逸話は『顔氏家訓』雜芸篇にもみえ

る。趙文淵の書碑に（西嶽華山神廟碑）（碑石は約二八〇×一一〇cm。陽刻の篆書二行の題額があり、本文二〇行、滿行五五字）が、陝西省華陰縣の西嶽廟内に現存する。碑文の末に「万紐于瑾、此の文を造り、趙文淵字は徳本、勅を奉じて書す」とある。書体は八分に抛ろうとしているが、ときに篆体を雑え、また楷書風の結体もある。北周の書として宋代以来もっとも有名であるが、明の郭宗昌『金石史』巻上に「文淵、周の書字博士為り。書跡は雅より当時の重んずる所と為る。而れども（華嶽碑）の字は、尽く古法に倣き、浅陋鄙野にして、一見して嘔せんと欲す」と貶している。新出土史料などから比定するとき、形骸化した書法を墨守するいわば守旧派の書風で、書法と感覚がアンバランスなため、嘔吐を催すといわれるような奇妙な様式に墮している。伝は『周書』巻四七、『北史』巻八二。

(568) 孝逸 北朝末の趙孝逸（生卒不詳）をさす。河南省湯陰の人。のち隋に仕えて四門助教となった。伝は『述書賦』とその註でしかしられない。『述書賦』巻中は趙文淵と並記して「文深・孝逸、独り前蹤を慕う。子敬（王献之）を師とするに至り、登龍せんと欲するが如し。宋齊の面貌有るも、孔（琳之）薄（紹之）の心胸無し」といふ。寶蒙の註には「深く右軍を師とし、大令に逸効し、甚だ功業有り。梁を平ぐの後、王褒 国に入るに当り、朝を挙げて貴胄は皆に褒に師とす。唯だ此の二人のみは、独り二王の法を負う。俱に隋に入り、二王の迹を臨し、人間 往々にして貨と為す耳」とある。

(569) 仲宝 北齊の劉珉（生卒年不詳）の字。江蘇省彭城の人。三公郎中に官し、睢陽太守となった。『述書賦』巻中には「肅条たる北齊に、浩翰たる仲宝あり。劣克凡正、法を備え草を緊くす。遐かに右軍を思い、欵尔として道に繇り、千変を究め、而して一を得、薄俗に乗じ、而して老に居る。海嶽高深にして、青孤島を分つが如し」といふ。李嗣真『書後品』は中之中に品等し「顛波 叡に赴き、狂澗 流れを争うに比す」と評し、『宣和書譜』巻一六には、草・隸を善くすといったあと「遠く右軍を追い、頗る其の法を得。落筆の佳処は、往々にして古人を凌轢す。草書を作るに至りて益ます勝れ、乃ち復た世に名あり。云々」と評している。ただし書跡は伝わらない。

- (570) 山陰 王羲之をさす。註(454)前出。
- (571) 永興 虞世南をさす。註(453)前出。

(572) 蕭阮 蕭子雲と阮研。註(562)前出。

(573) 率更則師劉仲宝 率更は歐陽詢をさす。ここは『述書賦』巻下、歐陽詢の寶蒙註（前略）書は北齊の三公郎中・劉珉に出す」に拠る。

(574) 汝帖 註(18)前出。

(575) 姚秦象銘 『汝帖』八「北朝胡晉十二書」中の一。未見。程文榮『南邨帖考』第二冊二三葉ウに全文を引き、「正書。四行、三十七字」と註している。

(576) 樊孝謙乾明孔廟碑 孝謙は樊遜（生卒不詳）の字。典籍に精通し、文章家として當時に名があった。東魏の天保中（五五〇〜五五九）、勅命により秘府の書籍を刊定したという。北齊に入って員外散騎侍郎に至った。伝は『北齊書』巻四五、『北史』巻八三にみえるが、書人としての記録はなく、歴代の書論にも名をみない。

乾明孔廟碑は、次章〔七〕に「乾明二年」と明記されているが、いま金石書に検索しえない。ちなみに、翁方綱『復初齋文集』巻二八「記偽絳帖」に「（前略）第九卷の齊の樊退・温子昇の書は、則ち汝帖に本づく。（中略）樊退は是れ樊遜の誤なり。遜、字は孝謙、詳しくは北史の文苑伝に見ゆ。当に標題して北齊員外郎・樊遜書すと云うべきに、此れ既に遜を誤って退と為す。云々」といふ、また同書「跋汝帖」に「（前略）世に行う所の偽絳帖・星鳳樓の諸帖は、皆に南齊の樊退に作る。南齊には固より其の人無き也。此れは是れ北齊の樊孝謙書せる乾明元年の孔廟碑内の数字なり。此の碑、極めて古雅なるも、今は泐損して読む可からず。予、旧拓本有り。始めて之を証明するを得たり。云々」といふ。これは翁方綱自蔵の旧拓本によつての説であるが、ここに乾明元年（鄭述祖の（乾明元年孔廟碑）は、顧炎武『金石文字記』巻二以下数種の記録があり、『金石萃編』巻三三には碑文を録す」とし、「〔七〕に乾明二年とする当否についても、後考に俟ちたい。

〔七〕由篆變爲隸。則漢時器銘碑刻。皆得尋其原委。由隸變爲楷。今所見惟北齊乾明二年樊孝謙書孔廟碑。存僅百餘字。而上下原委之脈具焉。何義門謂。許長史舊館壇碑。是歐陽率更體源所自出。此碑拓本。聞四明

范氏天一(579)閣有之。屢託友訪借鈎摹。登其閣遍覓不得。云。何時失去矣。未知何時得一見之。以愚所見樊孝謙乾明碑。實開率更法也。丁道護(580)啓法寺碑(581)。海内亦止一拓本。義門所藏者。在一顧(582)姆所珍秘。懸價千金。臨川李都諫宗瀚(583)。以五百金得之。持來求跋。在予齋亦數月。其書畧有開褚河南之意。微近似龍藏寺碑(584)。龍藏碑稍圓熟。啓法稍清挺。然啓法碑近於坦(585)迤。豈能以晉法許之。常醜(587)奴墓志。實開褚法之先。自當勝啓法碑也。

篆より変じて隸となる。則ち漢の時の器銘・碑刻は、皆にその原委を尋ぬるを得。隸より変じて楷となるは、今見るところは惟だ北斉乾明二年の樊孝謙書せる〈孔廟碑〉のみ。僅かに百余字を存せるも、上下原委の脈は具わる。何義門謂う「許長史の〈旧館壇碑〉は、是れ欧陽率更の体源の自りて出ずるところなり」と。この碑の拓本、四明の范氏の天一閣にこれあるを聞き、屢(586)しば友に託して訪ね借り鈎摹せしむ。その閣に登り遍く覓むも得ずして、云う、何れの時にか失去すと。いまだ何れの時にかこれを一見するを得るかを知らず。以(587)えらく、愚見るところの〈樊孝謙乾明碑〉、実に率更の法を開くなり。丁道護の〈啓法寺碑〉は、海内亦た止だ一拓本のみ。義門の蔵するところのもの、一顧(582)姆に在りて珍秘せらる。値を懸くこと千金、臨川の李都諫宗瀚、五百金をもってこれを得、持ち来りて跋を求む。予の齋に在ること亦た数月なり。その書は略ほ褚河南の意を開くあり。微(583)かに〈龍藏寺碑〉に近似す。〈龍藏寺碑〉は稍や円熟なり。〈啓法〉は稍や清挺たり。然れども〈啓法碑〉は坦迤に近し。豈によく晋法をもってこれを許さんや。〈常醜

奴墓志〉は、実に褚法の先を開き、自ら当に〈啓法碑〉に勝るなり。

(577) 何義門 義門は何焯の敬称。註(410)前出。なお以下の一七字は、『義門文集』ほかにも見えない。あるいは〈許長史旧館壇碑〉拓本に附された題跋の語か。

(578) 許長史旧館壇碑 別名〈上清真人壇碑〉(『古刻叢鈔』)〈茅山許長史旧館碑〉(『金石文字跋尾』卷三)などともいう。梁の天監一七年(五一八)の建立であるが、亡佚。著録の初見は、歐陽棐『集古録目』卷三。撰文は梁の陶弘景で、前題に「弟子華陽隱居丹揚陶弘景謹造」とあり、その傍に「此の一行は隱居(陶弘景)手自ら其の文を書す」とあるが、この書者は不明であること、晋の許長史の故居の壇塔が句曲山中にあることからその頌徳文を記したこと、また「天靈聖明」の碑額を有するが意味不明であることなどを記している。陳思『宝刻叢編』卷一五には『諸道石刻録』を引き「陶弘景撰、孫文範書。天監十七年立つ。玉晨觀に在り」と録している。ところが闕名氏『宝刻類編』卷一には、陶弘景の「撰并びに書。普通二年正月記す」としていて、書者、立碑年についてのちがいがあ。ちなみに『宝刻叢編』卷一五にはまた〈唐重立許長史旧觀壇碑〉を目し、『諸道石刻録』を引いて「梁の陶隱居、撰并びに書す。普通二年正月記す。唐の斐行矩、重立す」と録している。清代に初めて著録した顧炎武『金石文字記』卷二は「陶弘景、正書。天監十七年」とする。これは『宝刻叢編』に、書者不明とした首題傍書の一行「隱居、手自ら其の文を書す」を信とするものであるが、これ以後の著録は、みな陶弘景の書としている。ところでこの碑について、最も詳細に記録するのは、中華民国成立問もないころの編纂になる『江蘇通志稿』金石で、全撮本に拠って碑文を録し、案語を加えている。碑文中、許長史とは東晋の許穆で、太学博士起家し、升平(三五七、六一一年)の末、護軍長史に除せられ、太和中(三六六―七一)給事中に遷り、太元元年(三七六)七二歳で歿したとある。この案語中、諸書にみない説を摘記すれば、旧拓の剪装本と双鈎の全撮本で推校するところ、原碑は二六行、行五六字であること、碑陰が「唐の大歴十三年、劉明素、重ねて(碑文に)洗刻を加う」と称しているが、碑陰の内容は不明であることなどをいう。



(579) 四明范氏天一閣 四明は浙江省鄞県にある山名であるが、ここでは地名。范氏は明の范欽（一五〇六—一八五年）、字は堯卿、号は東明をさす。嘉靖一年（一五三二）の進士で、官は兵部侍郎に至ったが、金石拓本や旧鈔本など多数を収集し、天一閣を築いて蔵棄した。范欽の歿後、子孫はこの蔵書閣を固く閉して守り伝えたので、清朝中期まで、散佚を免かれた。嘉慶八年（一八〇三、〇四）に、阮元が范氏にこの目録を作らせたのが『天一閣書目』四卷、附『天一閣碑目』一卷、『天一閣統增』一卷である。このうち『碑目』一卷は、周一元の碑目を時代順に挙げ、年月・撰者・字様を記したもので、『統增』一卷はその補遺である。翁方綱は『碑目』でこれを知ったのであろう。ちなみに前註(578)引用の『江蘇通志稿』の末に「余、得る所の長洲の顧湘舟沅の（許長史旧館壇碑）鈎本は、聞くならく、鄞県の范氏天一閣の拓本従り出ずるものに係ると。湘舟は曾て之を石に刻すも、庚申の兵燹に石も亦た毀る。又金陵の蔡氏墨緣堂も亦た之を刻す」といつている。

(580) 丁道護 生歿年不明。譙國（安徽省亳縣）の人。隋の文帝のとき、襄州祭酒従事に官した。歐陽脩『六一題跋』卷五に、蔡襄の語を録して「隋唐の交、書を善くする者衆きも、皆に一法に出ず。道護の得る所、最も多し」といふ。黄伯思『東觀餘論』は、その書を評して「古ならず今ならず。適媚にして法有り」といひ、陳思『書小史』に「正書を善くす」と記している。

(581) 啓法寺碑 周彪の撰、丁道護の書。碑石は湖北省襄陽に建てられていたが、北宋末ころには亡佚し、いまは大西行礼氏蔵棄の剪装孤拓本が伝わるのみである。手近の影印に『書跡名品叢刊』本がある。この本には末に「魏国公」の印記があり、南宋の賈似道のものだという。印記中の主なものに明末清初の孫承沢、清の何焯、陸恭、翁方綱、李宗翰があり、内題は何焯、題簽は翁方綱、題跋に陸恭、翁方綱（四跋）、李宗翰がある。この本はいわゆる李宗翰の『臨川四宝』の一で、かれが購得したのは、嘉慶一七年（一七九二）である。なお『臨川四宝』は清末に羅振玉が舶載し、孔子廟堂碑、孟法師師、善才寺碑は三井聴冰閣に、この一本は大西行礼氏に帰した。金石書の初見は、歐陽脩『集古録跋尾』卷五であるが、この碑評については、前註の蔡襄が初見で、のち元の趙孟堅『論書』に「（前略）右軍の篆・畫・蘭亭は、最も真に一々牆壁有る者にして、右軍の一撮直下是れ也。李瑋が家の開皇帖

は、行書の祖、此に於て最も昭々たり。化度及び魯公（顔真卿）の離堆は此の法を得、左右陰陽、明麗を極む。丁道護の啓法寺碑は、筆、右方直下し、最も此の法を具う。学ぶ者は当に垂情すべし。云々」といつて、王羲之の書法にみる正しい間架結構と用筆法をそなえていることを示唆している。ちなみに「右方直下」の解釈として、翁方綱は『復初齋文集』卷二「跋啓法寺碑二首」の後段に独得の解釈を示しているが、ここと直接しないので省略する。孤拓本に記す陸恭の嘉慶三年（一七九八）の跋には「其の用筆を審するに、淬厲にして仍お渾璞に帰し、六朝の餘習を洗い、欧・虞の先声を聞く。云々」と評し、また翁方綱の嘉慶一七年（一八一二）の第一跋には「唐以前の正書、此の如き者、世、已に有ること罕なり。蔡君謨（襄）歐陽永叔（脩）、已に之を嘆美す。況んや今日を乎」といつて、その『復初齋文集』卷二「跋啓法寺碑二首」に「（前略）其の碑字は既に剪装を経、中ごろ脱失多し。而して此の碑の名を得たるは、則ち丁道護の書なるを以て也。然れども予を以て平心之を論ずれば、南朝の碑は既に絶はだ少く、惟だ北魏北齊以来の碑志のみ流伝する者多し。而れども字体は蕪雜にして、訛失する所多し。隋時此の碑及び龍藏寺碑の若きに至りては、皆に唐賢の法を聞くに足る者なり。然れども隋碑の常醜奴墓誌の如きは、書人の名を著さず。而も其の書は此の碑の上に在り。丁道護、書名有るに因りて、遂に以て古今独絶の奇と為すを得ざる也。即ち其の中の館の字の如きは、書して館と為す。此れ則ち隋時已に俗書の漸を開けり矣。孤兔を狘兔に作るも亦た、六朝の餘習なり。云々」と詳評している。

(582) 顧姆 姆は德行があり子弟を教うる教養をそなえた寡婦をいうようである（『儀礼』土昏礼の註疏参照）が、また『正字通』に「今、俗に弟の妻、夫の嫂を謂いて姆と曰う」といつ。ただここでは「一顧姆」とあるが、なお特定できない。なお孤拓本の翁方綱第一跋に「吳中の金石旧拓秘本は、多く謹庭（陸恭）の松下清齋に在り。惟だ此の本のみは、謹庭の一親眷の処に在り。極めて珍秘し、肯て軽がるしくは以て人に示さず。今竟に春湖（李宗翰）の得る所となる。云々」とあり、「一顧姆」とは、陸恭の親族のひとりか。

(583) 李宗翰 一七六九—一八三一年。字は公博、春湖、北溟と号した。江西省臨川の人。乾隆五八年（一七九三）の進士で、起家の官は編集。学士を経

て、道光八年（一八二八）工部左侍郎となり、累進して浙江学政に至った。金石碑版收藏家として当時にも名があり、湖東樓を築いて収儲した。中でも前註にも挙げた四拓は天下の孤本で、『臨川四宝』とよばれた。詩をよくし、『樹湖酬唱詩略』がある。その書は初め趙孟頫・董其昌を学び、のち漢隸、晋帖、隋唐碑を学び、江西地方では陳希祖と並称され、世人はその片紙をも宝としたという。伝は『清史稿』卷三五四、『国朝書人輯略』卷七。

なお李宗翰が啓法寺碑を購得した事情は、註(581)前引の翁方綱第一跋および『復初齋文集』卷二一「跋啓法寺碑二首」にもみえる。なお下文に、「李宗翰が翁方綱に跋を求めた」ことについては、翁の第一跋に「去年（嘉慶一六年）春、吳門の陸謹庭は、予の為に一本を鈎摹し、已に其の概を見る矣。此の拓本は即ち義門の蔵する所の者なるも、今、臨川の李春湖宗丞に歸し、持ち来りて題識を為さんことを属す」とある。また下文に、翁が「孤拓本を数ヶ月その書齋にとどめた」というのは、孤拓本の嘉慶二〇年の第三跋に「此の碑、借りて小齋に至る。晨夕 諦賞し、又、に兩月有余を経、其の微を備折す。自蔵と何ぞ異らん。乙亥五月廿九日、將に帖を歸さんとするの時。方綱 又、に識す」と感懐を述べている。

(584) 褚河南 褚遂良をさす。註(231)前出。

(585) 龍藏寺碑 隋の開皇六年（五八六）立碑。いま河北省正定県の隆興寺内に在る。碑文は二一〇×九〇cm。楷書三行で「恒州刺史鄂国公為国勸造龍藏寺碑」の題額をそなえ、碑文は三〇行、満行で五〇字。鄂国公の王孝儒が主唱して龍藏寺を建立したことをいう記念碑で、碑陰にはこの挙に参画した人名・官銜等を八段に入れている。この碑の書者に関しては、歐陽脩『集古録跋尾』卷五に、碑末に「齊・開府長兼行参軍、九門・張行礼之」 $\square$ とある張行礼を撰者とし「書人の氏名を著さず」という。が、張行礼の下の「之」およびその下になお欠字があるところから、王澐『虚舟題跋』卷五「隋龍藏寺碑」に「撰為るか書たるか、皆に知る可からず」というのが実情である。なお撰書が「開皇六年十二月五日題写」と明記されているのに、なお「齊」と記していることにも、顧炎武『金石文字記』卷二ほかに意見をみるが、要は隋に仕えず北周時の官銜を記したまでのものであろう。なお顧炎武は碑文の誤字の具体例を挙げ、「疑うらく、後人摹刻の誤ならん」といっているが、

当時における文字の訛誤の実例は枚挙に遑なく、後人摹刻説は当たらない。

この書風に関して、すでに『集古録跋尾』に「字画 遒勁にして、歐・虞の体有り」と指摘し、『虚舟題跋』もこれを承けて「書法 遒勁にして、六朝 儉陋の習氣無し。蓋し天 將に唐室文明の治を開かんとするの故に、其の風氣、漸く正に歸するならん。云々」という。包世臣は極褒して『安吳論書』の「論書十二絶句」に「中正中和の龍藏寺、擅場 或いは出す永禪師。山陰の面目 梨棗に迷わざる、誰か見ん匡廬の霧霽るの時を」と詠じ、自註して「隋の龍藏寺は、魏の李仲璇・敬頭偽兩碑に出で、而して純淨を加う。左規右矩は千文に近くして、雅健は之に過ぐ。書平に謂う、右軍の字勢は雄強なりと。此れ其れ庶幾か。閣帖刻する所の若如きは、絶えて雄強の妙を見ず。即ち定武蘭亭も未だ称わざる也」という。楊守敬『平碑記』卷二は「(前略) 国朝の包慎伯(世臣)、尤も極めて之を重んじ、定めて智永の書と為す。余 按ずるに永師名 謹嚴を貴ぶも、此れは瘦勁にして寛博たり。故に自から同じからず。第に碑証無くんばあらざる也。此の碑を細玩するに、正平 冲和の処は永興(虞世南)に似、婉麗 適媚の処は河南(褚遂良)に似るも、亦た信本(歐陽詞)の險峭の態無し」と評し、智永に似るといふ包説を斥けるものの「虞・褚の先声を聞く」(『学書適言』)と評している。

(586) 啓法碑近於坦迤 坦迤は平らかにづく意であるが、ここでは貶詞。すなわち註(581)に引用の「跋啓法寺碑二首」に統いて「然れども行筆の清勁は、則ち北朝の諸碑に超出す。是れ即ち伝うるに足る者耳。若し書家の前後の流派を通論すれば、則ち隸の後を承け楷の先を開く。魏・齊・周由り以来、遞いに之を推論せば、此の碑は漸く平正に歸し、而して亦た漸く坦迤に即く」とい、また「啓法寺碑二首」の後段中にも「其の円熟坦迤は、已に多宝塔の後勁に落つるが似し。然れども其の清挺高秀は、実に已に化度の上游に拠る。云々」ということによつて、うかがわれる。なお上句「啓法稍清挺」の清挺は用例の乏しい語であるが、本註前引中に「清勁」とあるのに近い。

(587) 常醜奴墓誌 詳名はへ榮沢令常醜奴暨妻宗氏墓誌。隋の大業三年(六〇七)。明代中期の出土らしく、陝西省興平県の崇寧寺の壁間に嵌めていた(趙函『石墨鐘華』卷一参照)が、乾隆時代には亡くなっていた(朱楓『雍州金石記餘』参照)。誌石は拓本で四二・七×四二・七cm。二七行、満行二七

字。ただし欠損も多く、上海博物館蔵拓本（『中国美術全集』書法篆刻編3、部分掲載）で六五九字を存すという。拓本の流伝は極めて少なく、清代の金石書——例えば『金石萃編』——でも未収のものが多い。影印に有正書局本があるという（『増補校碑隨筆』）が、未見。縮印では『漢魏南北朝墓誌集釈』図四二五がある。金石書中、書法について言及するのは翁方綱のみで、その『復初齋文集』巻二「跋隋榮沢令常府君墓誌」に「（前略）此の本、尚お甚しくは洶蝕せず。惟だ字画太はだ浅細なる耳。然れども結体は遒整、齊・魏・梁・周の習無し。而して虞・欧・褚・薛の派を開く。唐楷を評する者は、当に是れを以て大輅椎輪と為すべし矣。云々」といい、また註（581）前引の翁方綱の文中にもみえるところ、啓法寺碑より上位において称揚している。ちなみに上海博物館蔵拓本にも、翁方綱の跋があるという。

〔八〕右軍正楷。世所罕傳。褚河南品右軍正書。止樂毅黃庭東方贊三種。今則皆久失其眞矣。惟樂毅論。元祐秘閣所刻。尚存梁唐舊摹之影。中和渾古。非以圓爲體也。至南宋一再摹。遂破觚爲圈。近人見餘清齋所刻。輒以爲眞蹟誤也。歐陽率更褚河南。承羊薄之脈。未嘗專趨圓也。惟虞永興書。克嗣山陰。世傳廟堂碑。乃宋初王節度倩何人所摹。竟破觚爲圈。全用彎圓取勢。而右軍之法盡失矣。得見廟堂碑唐石本。乃知永興之擬遠高秀。初非以圓筆結局。蓋晉法之能存古意。盡壞於王節度之重摹虞書。又何怪南宋人之誤摹樂毅論。虞永興之上溯山陰。必嘗親見蕭阮羊薄以上諸家手蹟。今無自而考求其脈。學虞者最近。無如陸柬之。嘗見陸書蘭亭詩游相所藏宋本。初非用圓筆也。於後則唐人多師褚法。固非純用圓筆。卽至宋蘇米。亦以圓神非以結體也。吳傅朋更不專取圓矣。今之高談米法董法者。不論眞行。惟以圓美爲能事。其弊漸將流於軟熟。乖方矩之義。貽學問心術之害。故因究言晉唐隸楷。而綜說之。

右軍の正楷は、世 罕に伝うるところなり。褚河南 右軍の正書を品すや、止だ樂毅・黃庭・東方贊の三種のみ。今は則ち皆に久しくその眞を失う。惟だ樂毅論 元祐秘閣刻するところのみ、尚お梁・唐の旧摹の影を存し、中和 渾古にして、円をもって体をなすにあらざるなり。南宋に至りて一再摹され、遂に觚を破りて圈となす。近人 餘清齋帖刻するところを見て、輒ちもって眞蹟となすは誤りなり。歐陽率更・褚河南は、羊・薄の脈を承け、いまだかつて専ら円に趨かざるなり。惟だ虞永興の書のみ、克く山陰を嗣ぐ。世に伝うる「廟堂碑」は、乃ち宋初の王節度 何れの人かを倩いて摹するところにして、竟に觚を破りて円となし、全て彎円を用いて勢を取る。しかうして右軍の法はことごとく失す。「廟堂碑」の唐石本を見るを得て、乃ち永興の擬遠 高秀は、初めより円筆をもって結局するにあらざるを知る。蓋し晋法の能く古意を存するものも、尽く王節度の重摹せる虞書に壞さる。又は何ぞ南宋人の誤り摹せる樂毅論を怪しまんや。虞永興の上は山陰に溯るに、必ずかつて親しく蕭・羊・阮・薄以上の諸家の手蹟を見るも、今自りてその脈を考求するなし。虞を学ぶ者の最も近きは、陸柬之に如くはなし。かつて陸の書せる「蘭亭詩」にして游相 蔵するところの宋本を見るに、初めより円筆を用うるにあらざるなり。後に於ては則ち唐人 多く褚法を師とす。固より純ら円筆を用うるにあらず。即ち宋の蘇・米に至りても、亦た円神をもって、以って結体するにあらざるなり。吳傅朋はさらに専らには円を取らず。今の米法・董法を高談する者、眞・行を論するなく、惟だ円美をもって能事となす。その弊は漸將して軟熟に流れ、方矩の義

に垂き、学問心術の書を貽す。故に因って究に晋・唐の隸楷を言いて、これを綜説す。

(588) 正楷 註(180)前出。

(589) 褚河南品右軍正書 褚遂良撰『右軍書目』(張彦遠『法書要録』卷三所収)に「第一、梁毅論。第二、黃庭經。第三、東方朔贊。第四、周公東征・年月日朔小字・尚想黃綺・墓田丙舍。第五、羲之死罪前因李叔夷・瑯邪臨沂・義之頓首頓首一日相省・行三一之法・尚書宣示孫權所求・臣言瑯邪新廟・晋公侈」と品等するのをさす。ただしここでは、第三までを頭においていう。

(590) 梁毅黃庭東方贊 梁毅論は註(362)、黃庭經は註(363)、東方朔画贊は註(364)前出。

(591) 元祐秘閣 『元祐秘閣統帖』一〇巻をさす。註(368)前出。

(592) 破觚為圜 手を加えて以前の狀態より良くすること。註(376)前出。

(593) 餘清齋帖所刻 「餘清齋帖」二四巻は註(378)前出。梁毅論はその巻二所収。

(594) 王節度 王彦超をさし、その所刻の「孔子廟堂碑」は陝西本ともいう。註(138)前出。

(595) 用彎円取勢 彎円は右肩転折の個所を、するっとまる味をとることをいう。註(457)前出。なお『蘇齋題跋』巻下「双鉤唐揚廟堂碑字」に、「又に右肩の円滑に失す」という円滑も同義で、ともに貶詞である。

(596) 廟堂碑唐石本 「孔子廟堂碑」の原刻本をさす。註(138)参照。

(597) 擬遠高秀 擬遠は性情や風采がおごそかで上品なさまをいう人物評語で、例えば『南史』巻一八蕭思話伝に「風神擬遠、通達にして識鑒有り」。高秀は志行のすぐれたことをいう人物評語で、例えば『後漢書』列女伝序に「才の尤も高秀なる者を搜し次す。必ずしも専ら一操に任ぜざる而已」というのがそれ。ここでは「孔子廟堂碑」唐拓本の書品をいう評語であるが、翁方綱独自の見解である。ただ『復初齋文集』巻二「跋廟堂碑城武本三首」の前段に、この唐拓本を評して「古雅淵穆」ともいっている。

(598) 陸東之 註(47)前出。

(599) 陸書蘭亭詩游相所藏宋本 游相とは、南宋の游似(？)一二五〇年、

字は景仁、諡は清獻。四川省南充県の人。理宗朝に丞相となったことで、この称を用いることもある。遊似は嘉定(一一二〇八)一二二(進士で、淳祐中(一二四一)五二)、丞相に拜せられ、樞密使を兼ねた。伝は『宋史』巻四一七。游似の書の経歴は不明であるが、かれが所蔵したいわゆる『游相本淳化閣帖』(中華民国一三年、商務院書館影印本。翁方綱題籤)や、その翻刻になるという「游相本蘭亭序」がある。なおここにいる「游相所藏宋本」の「五言蘭亭詩」は、『中国美術全集』書法篆刻集3に、状態の良い部分影印がみられる。

(600) 蘇米 蘇軾、註(492)前出、および米芾、註(71)前出をさす。

(601) 円神 『周易』繫辭伝上の「書の徳は、円にして神、卦の徳は方以て知」の註に「円なる者は運り而して窮らず、方なる者は止り而して分有り。著は円を以て神を象り、卦は方を以て知を象る也」というのを典拠としようが、ここでは完璧さというほどの意か。

(602) 呉傅朋 南宋の呉説をさす。註(497)前出。

(603) 董明の董其昌をさす。註(380)前出。

(604) 漸将 徐々に重なることをいう。『漢書』五行志に「襄公の時、天下諸侯の大夫、皆に國權を執るも、君制する能わず。漸将日に甚しく、善悪明かならず、誅罰行われず」の用例による。

〔九〕 瘞鶴銘<sup>(605)</sup> 裴以石旌事云云三行。或因馬子嚴題語有補刻三行之説。遂指此三行。爲宋人補刻。<sup>(606)</sup> 張力臣汪退谷作考。皆沿此説誤也。予有辯説詳具附考卷内。并書此辯説之概。寄勒於焦山寺壁矣。<sup>(607)</sup> 此銘筆勢多用篆法

瘞鶴銘は裴に「石旌事、云々」の三行をもって、あるいは馬子嚴の題語に「三行を補刻す」の説あるに因り、遂にこの三行を指して、宋人の補刻となす。張力臣・汪退谷考を作すや、皆にこの説に沿うは誤りなり。予に弁説ありて詳しく考を卷内に具え附す。并せてこの弁説の概

を書し、寄せて焦山の寺壁に勒す。この銘の筆勢は多く篆法を用う。

(605) 瘞鶴銘 註(432)前出。

(606) 石旌事云々三行 いま鎮江市焦山の碑林内「瘞鶴銘亭」に嵌置されている残石五塊中、その左下方の三行で、張昭『瘞鶴銘弁』の絵図によれば「故立石旌事。篆銘不朽。詞曰／＼之遺也。廼裏以玄黃之幣。藏乎茲／亭。甲午歲化於朱方。天其」に当る。

(607) 馬子敵題語 文は汪士鋐『瘞鶴銘考』、『金石萃編』卷二六に引く。

(608) 指此三行為宋人補刻 註(606)引の「立石旌事、云々」の絵図に傍註し、「此れ宋人の補刻三行、三十四字。即ち卍石の背上に在り」という。

(609) 張力臣 力臣は張昭(一六二四?)の字。号は亟齋、江蘇省淮安の人。一生を書画の売芸で過した。画は花鳥、書は各体を能くした。貧窮のうち、金石を考究し、顧炎武に認められ、その『広韻』・『音楽五書』を写定した。伝は『漢字師承記』卷一、『国朝先正事略』卷二七、『国朝画識』卷三ほか。

張昭が瘞鶴銘残石の詳細な絵図を作成し論考したのは、康熙一〇年(一六六七)である。この『瘞鶴銘弁』(『昭代叢書』乙集卷三七)は、実地調書と古記録を参考にして、原状の復元を計ったもので、のちに汪士鋐・翁方綱が補訂しているもの、瘞鶴銘研究の基本書として重要な著作である。

(610) 汪退谷 退谷は汪士鋐(一六五八—一七二三)の号。初名は僕、字は文升、別号は若々、秋泉、松南居士、江蘇省長州の人。曾祖の起鳳以来の名門で、康熙三六年、会元になり、中允に官した。温厚清廉の人柄で、康熙帝の親任も篤く、『全唐詩』の編纂にも携った。詩・古文に工で、尤も書法を善くした。書は初め顔真卿を学び、中年に趙孟頫を習い、再変して褚遂良を学んだ。晩年は篆・隸をも摹擬したという(梁燾『評書帖』)。時に姜宸英と並んで「姜・汪」と称せられ、或いは国朝第一の書法といわれ、当時、公卿の碑版は多く汪士鋐の書になった。が、大字に比して小字はさほどでない(錢泳『履園叢話』)とも評せられる。著に『全秦芸文志』、『三秦紀聞』、『長安宮殿考』、『元和郡県志補闕』、『近光集』、『秋泉居士集』ほかがある。伝は『碑伝集』卷四七、『国朝書畫家筆録』卷一、『国朝書人輯録』卷三、『書林紀事』卷二ほか。その『瘞鶴銘考』(康熙五三年序)は、瘞鶴銘に関わる歴代の著述を

集め、一々に自説を加えたものである。

(611) 予有弁説 『瘞鶴銘考補』をさす。『蘇齋叢書』本、端方・繆荃孫刻本の二種があり、字句に少しく異同がある。内容は現存字の図と現存字(汪鋐『補瘞鶴銘考』巻上に、再録している)、銘の書は陶宏景たること、瘞鶴銘は晩唐のものでないこと、銘序下三行は重刻ではないこと、原石残塊を寺壁に移置したこと、滄州移石後の搨本のこと、黃庭堅の「大字莫如瘞鶴銘」についての七篇である。なお戦前の上海石印本中、『匍齋藏瘞鶴銘兩種合冊』のうち「瘞鶴銘考補」の翁方綱筆写本が付されているらしいが、未見。ちなみに『復初齋文集』には、なぜか、瘞鶴銘に関する記述はない。

(612) 書此弁説之概寄勒於焦山寺壁 焦山内の寺とは定慧寺をいうが、寺内の壁間には翁方綱の書刻は見かけない。なお定慧寺境内の一角に「焦山碑林」があり、唐宋以来の碑版や摩崖が列置または嵌置されているが、ここにも翁方綱の書刻はなかったように思う(平成三年四月二六日現在)。後考に俟つ。

〔一〇〕山谷云。(613) 大字莫如瘞鶴銘。小字莫如癡凍蠅。樂毅論勝遺教經。此於大楷專推鶴銘。於小楷專推樂毅。信後學之所問津也。其於小楷。不言黃庭經東方贊者合之。蘇子美詩。山陰不見換鶯經。知二帖專摹失眞久矣。瘞鶴銘兼有篆法隸法。虞歐法皆具焉。蘇子美詩。(615) 山陰不見換鶯經。京口新傳瘞鶴銘。即使非必果出右軍書。而六朝以來正楷。惟此尚存。若以爲陶貞白書。(616) 則亦去右軍未遠爾。

山谷云う「大字は〈瘞鶴銘〉に如くはなく、小字は癡凍蠅に如くはなし。〈樂毅論〉は〈遺教經〉に勝る」と。これ大楷に於ては専ら〈鶴銘〉を推し、小楷に於ては専ら〈樂毅〉を推す。信に後学の問津するところのものなり。それ小楷に於て〈黃庭經〉〈東方贊〉を言わざるは、これを合すればなり。蘇子美の詩に「山陰は見ず換鶯經」とあり。二帖

は専ら摹するに真を失すること久しきを知る。〈瘞鶴銘〉は篆法・隸法を兼有す。欧・虞の法も皆に具う。蘇子美の詩の「山陰は見ず換驚経、京口新たに伝う瘞鶴銘」とあり。即使、必ずしも果して右軍の書に出ずるにあらざれば、而ち六朝以来の正楷は、惟だ此にのみ尚お存す。若しもって陶貞白の書と為すなれば、則ち亦た右軍を去ることいまだ遠からざるのみ。

(613) 山谷云 以下「大字遺教経」は、卷一四「六」では「山谷三語」といって引用する。註(431)前出。

(614) 問津 ここでは書の道を究める意で、具体的には王羲之の楷法をさす。註(520)前出。

(615) 蘇子美詩 以下の二句の出典は、『蘇東坡詩集』卷五〇「宝墨亭」。

(616) 陶貞白 貞白(先生)は、陶弘景(四五六一—五三八年)の諡。字は通明、江蘇省南京の人。齊に仕えたが、梁に入って句曲山に隠居し、自ら華陽隱居(または華陽陶隱)と称し、晩年には華陽真逸と自称した。幼にして秀れ、四、五歳のとき荻を筆とし、灰に書を学んだ。万巻の書を読み、琴棋を善くし、図画に精しく、書はことに行書にすぐれた。梁の武帝は出仕を請うたが仕えなかった。しかし武帝は国家の大事をも書問したので、時人は「山中宰相」と呼んだ。著に『陶隱居集』『凶象集要』があるが、その「与梁武帝論書啓」(『法書要録』卷二)は、鍾繇・王羲之ほかの書法の優劣を、梁武帝と交した討論で、書論書として重要なものである。その書の伝わる作はないが、袁昂『古今書評』に「吳興の小児の如し。形容未だ成長せざると雖も、而れども骨体は甚だ駿快なり」と評され、張懷瓘『書断』下は「鍾・王を師として其の気骨を采る。然して時に称す、蕭子雲・阮研等と各おの右軍の一体を得と。其の真書は勁利、欧・虞は、往々にして如かず」と称し、その楷・行書を「能品」に列している。伝は『梁書』卷五一、『南史』卷七六、『宣和書譜』卷八ほか。なお瘞鶴銘の書者を陶弘景に擬す説については、註(432)前出。

〔一一〕晋人正楷(617)既罕傳。則言正楷者。惟於唐人遙師晋意。此千古書法之要義也。綜論有唐一代之書。自必以虞永興得晋法之傳矣。然虞書惟廟堂一碑。其唐石真碑。又不傳世。惟憑王節度摹本(618)。浸矣失其真。惟有歐陽率更諸碑最真正。可信可師。由唐企晋。所問津者此爾。褚亦晋法之津梁(619)。而褚正書每帶逸勢致。開行押之體。即如楷書中間橫畫。每於末帶圓彎。以取姿致。在褚書初不傷格。而效之者。則漸啓流弊。所以寶泉述書賦。於褚書有澆漓後學之譏(620)。豫初見寶賦(621)。亦似覺此語太過。既而思之。是誠不得已而作也。若虞歐則寧有此耶。虞書世不見其真。則惟恃歐陽書矣。歐書化度寺碑(623)。唐之晉楷也。抑又湮失不可見。則惟醴泉銘士皆童而習之。而終身莫竟其緒。今石雖泐蝕。誠能覓良工。以細紙淡墨精拓。尚得十之三四。又虞恭公碑(625)下半。亦尚有可拓之字。而工人惜紙。僅拓其上半廿許字。及今日以水淨洗拓。其全文可辯者。尚二千餘字。世猶存此二碑。是即萬古書法規矩準繩矣。

晋人の正楷は既に伝うるもの罕なれば、則ち正楷と言わば、惟だ唐人に於て遙かに晋意を師とするのみ。これ千古書法の要義なり。有唐一代の書を綜論すれば、自ずから必ず虞永興をもって晋法の伝を得たりとす。然れども虞の書は惟だ廟堂の石碑のみ。その唐石の真碑は、又に世に伝わらず、惟だ王節度の摹本に憑るのみなれば、浸矣としてその真を失う。惟だ歐陽率更の諸碑の最も真正なるありて、信すべく師とすべく、唐より晋を企みて問津するところのものはこれのみ。褚も亦た晋法の津梁なれども、褚の正書は毎に逸勢の致を帯び、行押の体を開く。即ち楷

書の中間の横画のごときは、毎に末に於て円彎を帯び、もつて姿致を取る。褚書に在りては初めより格を傷つけざれども、これを效うものは則ち漸く流弊を啓く。所以に寶泉の『述書賦』は、褚の書に於て「後学を澆漓す」との譏あり。予初め寶の賦を見て、亦たこの語の太はだ過ぎたるを覚ゆるが似し。既にしてこれを思うに、是れ誠に已むを得ずして作るなり。虞・欧の若きは則ち寧んぞこれあらんや。虞の書世にその真を見ざれば、則ち惟だ欧陽の書を持みとするのみ。欧の書せる化度寺碑は、唐の晋楷なり。抑そも又湮失して見るべからざれば、則ち惟だ醴泉銘のみ士は皆に童にしてこれを習う。しかれども終身その緒を竟むこと莫し。今石は泐蝕すといえども、誠に能く良工を覓め、細紙淡墨の精拓をもつてすれば、尚お十の三四を得ん。又に虞恭公碑の下半も、亦た尚お拓すべきの字あれども、工人は紙を惜しみて、僅かにその上半の廿許りの字を拓すのみ。今日、水をもつて浄洗して拓するに及び、その全文の弁すべきもの尚お二千余字あり。世に猶おこの二碑を存するがごとき、是れ即ち万古書法の規矩準繩なり。

- (617) 正楷 正書ないし楷書と同義。註(185)前出。  
 (618) 王節度摹本 王節度は王彦超をさし、摹本とは〈孔子廟堂碑〉の陝西本をいう。註(138)・(456)前出。  
 (619) 津梁 ここでは、はしわたしをすること。例えば『顔氏家訓』帰心篇の「心を誦読に留め、以て来世の津梁と為れ」。  
 (620) 行押 行書というのに同じ。また行押とも書き、初見は、羊欣『古來能書人名』の鍾繇の三体の一にあげられたもの。註記は「一六」該当項にゆずる。

- (621) 澆漓後学之譏 褚遂良の書は、正しい王法の伝承において後輩を誤まらせたという認識。註(509)前出。  
 (622) 寶賦 寶泉『述書賦』の略。註(514)前出。  
 (623) 化度寺碑 註(451)前出。  
 (624) 醴泉銘 九成宮醴泉銘のこと。註(452)前出。  
 (625) 虞恭公碑 註(464)前出。  
 (626) 規矩準繩 規はコンパス、矩は物差し、準は水もり、繩は墨なわ。ともに転じて規範、標準の意で用いる。

〔一二〕宣和書譜<sup>(627)</sup>。於率更書獨推化度寺碑<sup>(628)</sup>。則可見此爲唐碑最上品也。趙子固在宋末。於唐楷專取化度廟堂九成三碑。足知書家定評。是爲古今書法正脉也。

『宣和書譜』は、率更の書に於て独り化度寺碑を推す。則ちこれ唐碑の最上品となすを見るべきなり。趙子固は宋末に在りて、唐楷に於ては専ら化度・廟堂・九成の三碑を取る。書家の定評を知るに足る。是れ古今書法の正脉となすなり。

- (627) 宣和書譜 北宋・徽宗の内府に所蔵する漢・宋にわたる書蹟の集録を第一の目的としたもので、二〇巻。『宣和画譜』以後の撰述らしいが、編者とも衆訟あって定まらぬ。二〇巻は八部門に分けられ、①巻一「歴代諸帝王書〈附皇后〉(一人)、②巻二「篆書」(七人)③「隸書」(八人)、④巻三「正書」(四六人)、⑤巻七「行書」(五八人)、⑥巻一三「草書〈附章草〉」(七一人)、⑦巻二〇「八分」(四人)と⑧「制詔誥命」を収める。「歴代諸帝王書」のほか②③④の初めにはそれぞれ「叙論」があり、「制詔誥命」以外には、一書人ごとに伝記と内府収蔵作品名を入れてある。②③④の伝記は、部門別に重複を避けほぼ時代順に配し、書人ごとの逸話やその

書の品評を加えているが、先人の書論を選択して引用し、ときに現行書論書に見かけない記録のあること、また目録に挙げられている法書などによって書の歴史と書論研究上、貴重な史料である。刊本の一般的なものとして『津逮秘書』本、『字津討原』本がある。また訳註には日原利国『宣和書譜』（『中国書論大系』巻五、六所収）がある。また同氏に「『宣和書譜』作者考」（『加賀博士退休記念中国文史哲学論集』所収）がある。

(628) 率更書独推化度寺碑 『宣和書譜』巻八「行書」に、「(前略)然れども詢、書を以て名を得るは、実に正書に在り。化度寺石刻の若きは、其の墨本、世の宝とする所と為る。学ぶ者、力を尽すと雖も、到ること能わざる也。云々」というのに拠る。

(629) 趙子固 子固は、南宋の趙孟堅の字。註(449)前出。

〔一三〕 褚書孟法師碑最難得。其重摹者。或謂似虞永興者。然實亦非用虞法也。三龕記帶隸體。房元齡碑聖教序記皆帶行體。至小字陰符度人經。雖極古雅。而皆出傳模耳。孟法師碑之重摹者。可與宋翻化度相匹也。

宋翻化度碑。即郁氏書畫記所錄。元朝盧嵩翁・趙松雪諸賢題跋。  
世稱唐搨者。亦見安岐書畫記。以宋拓真本校對。乃知是宋翻耳。

褚の書せる孟法師碑は最も得がたし。その重摹せるものをして、あるいは虞永興に似たりと謂う者あり。然れども実は亦た虞法を用うるにあらざるなり。三龕記は隸体を帯び、房玄齡碑・聖教序記は皆に行体を帯ぶ。小字の陰符・度人経に至りては、極めて古雅と雖ども、皆に伝模に出ずのみ。孟法師碑の重摹せるものは、宋翻の化度と相い匹すべきなり。

宋翻の化度碑は、即ち郁氏『書畫記』に録するところものなり。元朝の盧嵩翁・趙松雪諸賢の題跋の、世に唐搨と称せるものも、亦た安岐『書畫記』に見ゆ。宋拓の真本をもつて校對し、乃ち是れ宋翻なるを  
知る

(630) 孟法師碑 註(463)前出。なお下文の「重摹せる者、或は虞永興に似たりと謂う者あり」についても同註前出。

(631) 三龕記 註(318)前出。

(632) 房玄齡碑 昭陵に陪葬された房玄齡(本文中の房元齡の元は、玄の避諱)の頌徳碑であるが、いまこの碑石は、昭陵博物館の第二室に列置されている。三一六×一〇cm。陽刻の篆書四行で、「大唐故左僕射上柱国太尉梁文昭公碑」の題額があり、碑文は褚遂良の書で、三五行、満行八一字であるが、損壞部位が多く、いまは三〇〇字ほどしかみえない。宋の趙明誠『金石録』巻二四に、すでに「文字は摩滅し、断続考究す可からず」といつている。全字数は定かでないが、中田勇次郎氏は、有正書局刊宋拓本を基に『金石萃編』『昭陵碑録』『八瓊室金石補正』を勘案し、約一一九〇字(半字分を含む)と比定し、釈文を作られた(『書跡名品叢刊』褚遂良・房玄齡碑)。また立碑の年代についてもいろいろ議論があるが、『金石萃編』説に左袒し、永徽三年ごろとされている。

翁方綱はこの碑を、『蘇齋題跋』巻上「蘇齋選碑説」に唐碑三七種を挙げらうち、第二九位に置き、第三〇位の雁塔聖教序碑とともに、極めて評価を低くする。褚遂良書〈度人経〉を一〇位、〈陰符経〉一一位、〈倪寛賛〉を一五位に据えているところからみて、褚書に対するいわゆる「澆漓後学」の誹りは、「行体を帯び」た房玄齡・雁塔聖教序碑を意識しての認識であることがわかる。この碑は磨泐が多く筆意は窺いにくい、雁塔聖教序に迫る完成期の作で、例えば倪寛賛(台北・故宫博物院蔵・墨蹟本)などとは比較にならない行きとどいた書法である。

(633) 聖教序記 通称は雁塔聖教序。永徽四年(六五三)立碑、褚遂良の書。

この原石は、西安市内の慈恩寺内大雁塔の一階南面入口の東西に設けられた龕室内壁面にそれぞれ嵌置されている。二つの碑石は、同大同形制で、三天女を浮彫りした方跌に据え、一九五×八五(上部)一一〇(下部)cm。碑頭と碑身の間に釈迦眷属七尊、碑首は双螭、碑側は宝相華紋の見事な浮彫りをしてある。東碑は陰刻の八分書二行で「大唐聖教之序」、西碑は陰刻の篆書二行で「大唐三藏聖教序記」の題額がある。碑文は東碑が二二行、満行で四二字、西碑は二〇行、満行は四〇字であるが、こちらは題額とも右行し



ている。内容は玄奘法師が貞觀二二年（六四八）太宗と皇太子（のちの高宗）より賜った序と記を刻した記念碑である。

翁方綱は、前註にも触れたように、この碑の「行体」を帯びた書風をきらい、唐碑中でも評価を下しており、『復初齋文集』ほか、その著述に専論をどめていない。

(634) 陰符度人經 陰符經・度人經の二種。ともに褚遂良の書と伝える小楷で、宋の石邦哲集刻『博古堂帖』に入れられ、いまこの残本のいわゆる『越州石氏本』（註371）前出）中にみられるが、また越州石氏本からの翻刻とみられる『停雲館帖』（註390）前出）巻一にも刻入されている。翁方綱はこの両經を『停雲館帖』本によって知見している。即ち『蘇齋題跋』巻上「蘇齋選碑說」の〈河南度人經〉〈河南陰符經〉に註記して、「文氏停雲館に勒せる所に於て、皆に石氏本也。此れ従り黃庭・東方象賛を問津せよ。即ち山陰（王羲之）の矩 竝に在り矣」という。が、諸家の意見を引くまでもなく、偽刻であることは疑いのないところである。陰符經の刻帖はいわゆる蠅頭の楷で末に「大唐永徽五年歲次甲寅、正月初五日、奉旨造。尚書右僕射・監修國史・上柱國・河南郡・臣・遂良、奉旨寫一百廿卷」と刻入している。孫鉉『書畫跋々』巻二は、『停雲館帖』に跋して「（前略）真書の最も小為り。然れども却って猶お拙意を存す。細玩するに頗る古趣有り。豈に搦手一時の合作なる耶」というが、真偽については言及していない。

度人經は、全称を〈靈寶度人經〉という。現行の『越州石氏本』は〈太上老君常清靜經〉をはさんでその後にあるが、『停雲館帖』は陰符經のすぐ後に刻入してある。ちなみに、宋の陳思『宝刻叢編』巻一三「石氏所刻歷代名帖」（即ち『博古堂帖』）の標目によれば、〈小字陰符經〉〈草書陰符經〉（『停雲館帖』は前に置く）〈度人經〉の順に並べている。度人經の末には「予が家に旧藏せる唐の閣立本画〈靈寶度人經變〉は、褚遂良題字す。惜しむらくは其れ歳久しくして湮滅し、將に永伝を失わんとす。独り字画のみ僅かに模刻す可し。以て好事に貽るとしか云う。元祐戊辰仲冬、韓城の范正思記す」の款識がある。なお『八瓊室金石補正』巻一〇五に、明の王世懋旧藏の元祐初本と称するこの〈度人經變相題字〉（經文不録）を登載し、王世懋の万曆戊子（一五八八年）跋を記している。陸増祥の案語には、これは玉石本

と伝えられる帖であること、王麟州ほか明人の跋や觀題のあること、六四八字を存し、字徑二、三分で大小不同であることなどをいっている。

(635) 郁氏書画記 明末の郁逢慶『郁氏書画題跋記』一二巻をさし、ここはその巻二「唐揚化度寺禪師塔銘」をいう。ところで郁逢慶が「唐揚」と冠しているにも関わらず、翁方綱が下文に「宋翻」と断案するのは、当該の原帖を考核した結果のことである。いま『郁氏書画題跋記』には「四庫全書」本と台北、国立中央図書館蔵の手鈔本（『芸術賞鑒選珍』影印）がある。この後者の該題（影印本八一頁）に、原本に依つての校勘と書き入れがあり、署名や印記はないものの、翁方綱の筆跡とみて誤りがないものである。これには例えば「唐揚」に対して「不解何以称云唐揚（何をもって称して唐揚と云うかを解せず）」と頭註し、標題下に「宋裱、計廿一葉。是宋初翻本」と書き入れ、また郁氏が「碑刻尚存八百余字」というのに対して、「今日驗実存九百廿六字耳。而翻本已為人珍惜如此（今日驗するに九百廿六字を存する耳。而して翻本すでに人に珍惜せらるること此のごとし）」と註記している。

(636) 安岐書画記 清初の大収蔵家安岐（一五八三？〜？）字は儀周、号は麓村の『墨緣彙觀録』六巻をさし、ここはその巻二「唐歐陽詢化度寺塔銘冊」（略）此の冊は紙墨純古、的に是れ唐刻原本の宋揚たること疑い無し。前に李西涯の墨蹟の化度寺碑の四大字を篆し、李印東陽の朱文印を印し、後に元明諸名家、墨蹟もて題識す。元の大徳間の嵩翁盧摯、太原の劉致時中、醴陵の李心実仲仁、宣城の寓居の疏齋に観ると有り。又に趙孟頫・趙世延・周馳・劉致・歐陽元・謝端・康里巉々・揭傒斯・張起巖・許有壬・王理・王沂諸公題識す。明に入り宋金華・李西涯の二跋あり。曾て項墨林の収蔵を經」とある。

〔一四〕褚書東山帖。(637) 見於汝帖。(638) 未見其原本。此帖却是褚公純楷。無一筆帶隸行。與孟法師碑最相近。亦與張長史郎官石記頗相近。惜不知其真本在何處也。虞書大運帖。(639) 則是從廟堂碑集來者。大觀刻本。(640) 尚有一二處足正陝本之失。(641) 不能以宋人所摹忽視之。歐陽楷書在閣帖者。黃長睿亦謂

是從碑字集來。則莫考其是何碑矣。此未見淳化原刻。以今所摹傳法帖中之歐楷。則不逮歐書諸碑遠甚。李茶陵<sup>(646)</sup>又謂。汝帖中有化度碑數十字。今以宋拓汝帖核之。實未有也。又法帖中虞書齋會帖字數。與歐陽永叔所說智永千文後虞書七十餘字若相合者。未知是否。歐陽永叔所說智千文。味其語意。必非今陝西碑林大觀己丑薛氏所刻千文也。薛刻千文。字勢平熟。必非隋時人書。況天地<sup>(651)</sup>黃<sup>(652)</sup>上一字。及桓公匡合<sup>(653)</sup>匡字。皆闕末筆。必宋初人避宋諱之書耳。眞宗諱恆。恆字不闕<sup>(653)</sup>筆。是宋初人書無疑。蓋其人效智永眞草體爲之。薛氏不考。而勒諸石。從未有辯正者。又有一舊刻本<sup>(654)</sup>。於其末云。陳至德二年四月六日。於永欣寺畱意書之。時年七十。後有閱古審定印。韓侂胄印。永興軍節度使之印。據此印是韓侂胄閱古堂帖也。其千文一行眞一行草。行次位置。與薛刻摹勢悉同。惟字勢加肥耳。囊箱易輪至末。眞草合共廿一行。閱古堂帖卽羣玉堂帖<sup>(655)</sup>。曾宏父石刻鋪敘云。閱古堂帖十卷。其第二卷晉隋名賢帖。不言智永千文。此刻實是閱古帖否。未可爲信。其云於永欣寺畱意書之。亦類後人裝點語也。從來自書年月。未有年號上加某朝者。此於至德二年加陳。更見其是後人僞託耳。

褚の書せる〈東山帖〉は、『汝帖』に見ゆるも、いまだその原本を見ず。この帖は却つて是れ褚公の純楷にして、一筆として隸・行を帯ぶるなく、孟法師と最も相い近く、亦た張長史の〈郎官石記〉と頗る相い近し。惜しむらくはその眞本、何れの処に在るやを知らざるなり。虞の書せる〈大運帖〉は、則ち是れ〈廟堂碑〉より集め来るものなり。『大觀』の刻本は、尚お一二の処、陝本の失を正すに足る。宋人の摹するところ

をもつてこれを忽視するあたわず。歐陽の楷書の『閣帖』に在るものは、黃長睿も亦た是れ碑字より集め来り、則ちそれは何の碑なるかを考うる莫<sup>な</sup>しと謂う。ここに未だ『淳化』の原刻を見ざるも、今、摹して法帖中に伝うるところの欧の楷をもつてすれば、則ち欧の書せる諸碑に逮ばざること遠く甚し。李茶陵又「汝帖中に化度碑の数十字あり」と謂う。今、宋拓の『汝帖』をもつてこれを核<sup>しら</sup>ぶるも、実は未だ有らざるなり。又法帖中、虞の書せる〈齋會帖〉の字数は、歐陽永叔説くところの智永〈千文〉の後の虞の書せる七十餘字と相い合するもののごとき、いまだ是なるか否なるかを知らず。歐陽永叔説くところの智永〈千文〉、その語意を味うに、必ず今の陝西碑林に大觀己丑薛氏刻するところの〈千文〉にあらざるなり。薛刻の〈千文〉は、字勢平熟なれば、必ず隋時の人の書にあらず。況んや「天地 黃」の「黃」上一字、及び「桓公匡合」の「匡」の字、皆に末筆を闕くは、必ず宋初の人宋諱を避くの書のみ。眞宗の諱は恒なるに、恒の字は闕筆せず。是れ宋初の人の書なること疑いなし。蓋しその人智永の眞・草の体に效いてこれをなすも、薛氏は考せずして諸<sup>これ</sup>を石に勒せるならん。従<sup>よ</sup>りていまだ弁正する者あらず。又一旧刻本あり。その末に於て「陳の至德二年四月六日、永欣寺に於て意を留めてこれを書す。時に年七十」と云う。後に閱古審定印・韓侂胄印・永興軍節度使之印あり。この印に据れば是れ韓侂胄の『閱古堂帖』なり。その〈千文〉、一行は眞一行は草にして、行字の位置は、薛刻の摹勢と悉く同じきなり。惟だ字勢肥を加うるのみ。『囊箱易輪』より末に至り、眞・草合わせて共に廿一行なり。閱古堂帖

は即ち羣玉堂帖なり。曾宏父『石刻鋪叙』に、『閔古堂帖』十卷、その第二巻は晋・隋の名賢帖と云うも、智永へ千文を言わず。この刻実は是れ『閔古帖』なるや否や、いまだ信となすべからず。その「永欣寺に於いて意を留めてこれを書す」というも、亦た後人装点の語に類するなり。従来年月を自書するや、いまだ年号の上に某朝を加うるものあらず。ここ「至徳二年」に於て「陳」を加うるは、更にその是れ後人の偽託たるを見るのみ。

(637) 褚書東山帖 註(480)前出。

(638) 汝帖 註(18)前出。

(639) 張長史郎官石記 註(466)前出。

(640) 虞書大運帖 虞世南へ大運帖は『淳化閣帖』卷四に刻入。楷書、五行、全文四五字。なお下文の「是れ廟堂碑従り集め来れる者」については、後註(642)引用参照。

(641) 大観刻本『大観帖』一〇巻をさす。この集帖は、北宋の大観三年(一一〇九)、徽宗が『淳化閣帖』の原石が皴裂し、王著の編次や標目にも誤りが多いため、内府所蔵の真蹟を出し、龍大淵らに命じ、序次を更定し、重摹せしめたものである。各人の標題と巻末の「大観三年正月一日、奉聖旨摹勒上石」は、蔡京の行書である。行の高さが『閣帖』より二字分ほど高いため、帖によっては不自然な章法のものもあるが、摹刻の精良さは『閣帖』以上である。ただし、原石は靖康の乱で毀れたため、原石拓完本の伝わるものはなく、零本数種をみるだけである。翻刻本も数種あるが、容庚『叢帖目』第一冊は、明の陳鉅昌の翻刻本によって、各巻内の人名を列記している。

『大観帖』刻入のへ大運帖は、その巻四に刻入されているが、原刻本とみられる李宗瀚旧蔵本(有正書局刊、卷二・四・五の三冊本)は、頭の一二字分がなく、三行、全文三二字である。なお李宗瀚旧蔵本には、翁方綱の夥しい墨書跋があるが、へ大運帖には「虞の第一帖は廟堂碑の字を集むも、

王彦超本(陝西本)を用うるに非ざる也。大観の此の刻、是れ淳化上石の原蹟を以て重ねて摹入せる者なり。王彦超本は、建隆の末年に勒すなれば、淳化を去ること廿年耳。其の時、必ず尚お原石有り。唐拓本は油素に臨する者有り。即ち取りて以て上石し、尚お一、二の筆、陝刻を正すの処有り。今見る所の陝本を執りて之を議すること能わざる也。王籀林は未だ唐石本を見ず。又未だ大観の真本を見ざる耳」と跋している。

(642) 尚有一二処足正陝本之失 前註引用傍点部に相応する。さらに巻後の一跋には「永興の大運帖は、碑帖を集めて之を為すと雖も、然れども尔日石に摹入せるとき、実に集字を以て之を目せんと欲せず。所以に首尾の世の字は、碑中の楷体を用いざる也。永興の書せる廟堂碑は、実に唐楷の冠、晋法の嗣為り。宋の初めに当りては、必ず旧本の存する者有らん。何ぞ油素を用いて鈎搨し、而して運するに臨摹を以てせざらん乎。然れども鈎搨に非ずと雖も、而も今由り之を覩れば、実に尚お陝本の失を正すに足る者有り。一は則ち結体方穩なり。唐石の凝正の度と尚お近く、陝刻の毎字の右肩、皆に一(すべ)て円滑を例とせるに似ざる也。一は則ち毎画皆に映厚なり。陝刻の毎画の起処、多く之を尖纖に失するに似ざる也。又に城武本の多く之を枯瘦に失するに比せざる也。尔日見る所の旧本の神采豊映なるを知り、此れを借り得て、粗ぼ其の概を存するに足れり矣。云々」とあって、この下文には、さらにへ大運帖内の「承・厚・鴻・壽・自」五字を、陝西・城武の兩本と比較して、点画の異同をあげ「此の大観(帖)摹する所、最も中を得と為すに足り、陝なる者の五を正すに足る也。云々」という。

(643) 忽視 用例を見かけない語であるが、ここでは、ゆるがせにする、見のがすの意。

(644) 歐陽楷書在閣帖者 『淳化閣帖』卷四に、歐陽詢帖は六種刻入しているが、うち楷書はへ比年帖の一帖である。この帖は五行、全文で四〇字。『大観帖』巻四では四行に刻入している。

(645) 黄長睿 長睿は黄伯思の字。註(498)前出。なお下文の「亦た是れ碑字従り集め来る、と謂う」は、その『法帖刊誤』巻上「梁陳唐人書」に、「虞永興の大運帖、歐陽率更の比年帖は、皆に二公の碑中の字を集めて之を為る。按ずるに大運帖は、乃ち夫子廟堂碑を集むるも、比年帖は、則ち未だ集むる

所何の碑なるやを知らず」とある。さらに下文に、伝摹の法帖中の欧陽詢の楷書に対し「欧の書せる諸碑に逮はざることを遠く甚し」といつているが、『大観帖』巻四に加えた翁方綱の跋に「(前略)欧の比年帖に至りては、宋の時に在りて尚お率更の書せる碑、未だ見ざる所の者有らん。然れども亦た何ぞ採択に善ならずして、拙劣此の如きに至らん。必ず欧の書に非ず也」と断案している。

- (646) 李茶陵 明の李東陽(一四四七—一五二六)の敬称。字は賓之、号は西涯、諡は文正。湖南省茶陵(長沙)の人。出身地により李茶陵・李長沙と呼ばれりするが、幼年より北京に僑居した。天才児で、四歳のとき景帝の御前で大字を書き、六、八歳の二度、召されて『尚書』の御前講義をした。天順八年(一四六四)一八歳で進士となり、庶吉士に選ばれ編集を授けられ、侍講学士に累進し、東宮講官に充てられた。孝宗朝には、太子少保・礼部尚書兼文淵大学士に進み、機務を預った。孝宗が崩じ、顧命によって武宗を補翼し、少傅兼太子太傅を加えられた。ときに宦官の劉瑾派が政治を乱し、正義の士大夫が犠牲となったが、李東陽に救われた人も多かったという。正史の伝には、朝廷の著作は多くかれが執筆し、明が興って以来、宰臣でその文章によって士大夫の領袖となり得たのは、揚士奇のち、李東陽のみと称され、また多くの俊才を育て、その門下は茶陵派とよばれた。詩文集に『懷麓堂集』一〇〇巻、『懷麓堂詩話』一卷がある。書は各体を能くしたが、ことに篆書を得意とした。明の王世貞『弇州山人藁』に『涯翁は、篆古隸に勝り、古隸は真・行・草に勝る』というが、例えば米芾『苕溪詩卷』の篆題にその片鱗がうかがえる。伝は『明史』卷一八一、『明詩綜』卷二二、『明詩紀事』丙卷一、『四友齋叢說』卷八・二六ほか。

- (647) 謂汝帖中有化度碑数十字 なお検索しえない。後考に俟つ。

- (648) 齋会帖 未詳。
- (649) 欧陽永叔 永叔は欧陽脩の字。註(211)前出。なお下文の「説く所の智永の千文後虞の書せる七十余字」とは、その『集古録跋尾』卷五「千文後虞世南書」に「右、智永千文後の七十八字は、虞世南の書する所なり。言は文を成さず。乃ち筆に信せて偶然せる尔。其の字画は精妙にして、平生書する所の碑刻多きも、皆に及ば莫る也。豈に矜持と意を用いざるとは、便ち優劣有

らん邪。云々」とあるのに拠る。

- (650) 薛氏所刻千文 智永(千字文)の「関中本」(一名「陝西本」)をさす。原刻宋拓本の薛嗣昌の刻跋の末に「大観己丑二月十一日、楽安薛嗣昌記」とある。関中本についても註(476)前出。

- (651) 天地 黄 空格一字分は、もとより「玄」字で、聖祖の玄燁を避諱し、通常は終一点を闕くが、ここは人口に膾炙された句であるため全闕したもの。

- (652) 桓公匡合匡字 宋の太祖・趙匡胤の避諱をさす。
- (653) 恒字不闕筆 真宗・趙恒は、北宗第三代の皇帝で、九九七—一〇二二年在位。

- (654) 一旧刻本 以下にこの梗概をいう(千字文)廿一行断欠本は、他の著録に、触れるものを知らない。翁方綱『復初齋文集』卷二五「真卿千字文跋」の後段には、さらに詳しく次のごとくいう。「南宋末の羣玉堂帖第二卷の隋僧智永書せる真卿千字文残本は、僅かに囊箱易輜攸畏以下より末に至る凡そ真卿二十一行を存するのみ。其の行次・位置・字勢は、薛刻と悉く同じきなり。惟だ腴潤は薛刻より勝る。而も其の画中の遒勁は、亦た間ま薛刻に逮はざる者有り。其の行次位置字勢の悉く同じなるに就けば、則ち此れ一手の爲る所の者なり。前半を見ざれば、其の闕筆の二処 若何なるやを知る能わず矣。乃ち末行の後 数格を低くし、下に卿書もて云う、陳・至徳二年四月六日、於永欣寺、留意書之。時年七十と。此の款記の二行有半は、則ち薛刻に之れ無し。古人の書蹟、未だ年号の上に於て朝代を著す者有らず。即ち陸氏『經典積文』、癸卯歳と称するが如き、亦た後人をして考核して陳の至徳元年爲るを知ら使むる也。未だ至徳の上に於て陳を加う者有らず。此れ則ち後人偽りて智永の書と作す者にして、陳の年に仮りて以て其の真爲るを見す耳。此れ愈いよ以て其の偽作爲ること疑い無きを驗する也。又にて年七十と著し、又に意を留めて之を書すと云うは、此れ更に是れ後人 装点の偽なるを驗す。豈に智永一本を書し訖り、而して此の語を爲す者有らん乎。羣玉堂帖は、本と関古堂帖と名づく。向若水 韓侂胄の爲にせる摹刻なり。其の目は略ぼ曾宏父『石刻鋪叙』に見ゆ。其の二卷は、是れ晋隋の名賢帖なるも、未だ智永千文有るを聞かず。仮如(もし)、智永千文に自ら陳至徳二年と署す有らば、則ち帖目に必ず当に之を著すべし。是れ其れ関古堂帖と爲すこと、未

だ信するに足らざる耳。然らば則ち此の刻を見るに因り、而して益ます吾が前跋薛刻の偽なる、更に疑わざるを信する也」。

(655) 閔古堂帖 次註『群玉堂帖』の原名。

(656) 羣玉堂帖 一〇卷。南宋の宰相、韓侂胄が自蔵の墨跡によって刻石したも。摹勒は名手の向若水。韓は開禧（一二〇五―〇七年）の末に、罪に坐して籍没され、嘉定改元（一二〇八）に秘書省の群玉堂に置き、原帖名『閔古堂帖』を改名した。完本は伝わらず、零本数種が影印されているが、うち卷八にあたる〈群玉堂米帖〉（『書跡名品叢刊』）の残帖の宋拓原本が東博と宇野氏玄美庵に現蔵する。なお『叢帖目』第一冊に、一〇卷の細目が挙げられている。

(657) 石刻鋪叙 二卷。南宋の曾宏父（生卒不詳）の撰。集帖・單帖について源流や考釈を施したもの。曾宏父の字は幼卿、自ら鳳墅逸客と称した。「鳳墅帖」二〇卷『統帖』二〇卷の集帖を撰集したという（『石刻鋪叙』卷下）が伝わらない。

(658) 装点 みかけない語であるが、たぶん口語の「粧点」、上べを飾る、めかしこむのと同音同義であろう。

〔一五〕張長史郎官石記。世無二本。今所見惟戲鴻堂所摹。疑非真也。

又有吳門摹刻一本。即中吳紀聞所稱蘇州學舍本。予見宋牧仲所藏有王守

溪王弇州兄弟手跋者。其字勢實與董摹戲鴻堂帖無異。特董摹出於陳仲醇。

非出於原石本。微覺庭弱耳。及見宋拓原本。清勁古質。非吳門一本之比。

然亦實不能與化度廟堂差肩也。山谷所云無轍迹可尋者。合長史草聖言之。

人第知長史善草。而孰知其正楷古勁如此。所以謂其無轍迹可尋。非專贊

此郎官記。輒欲掩唐賢諸書家也。弇州跋謂化度廟堂九成皆退三舍。則誠

言之過當矣。

張長史の郎官石記は、世に二本なし。今見るところは惟だ戲鴻堂摹

するところなるも、疑うらくは真にあらざらん。又に吳門摹刻の一本

あり。即ち『中吳紀聞』に称するところの蘇州學舍本なり。余の見し宋

牧仲所蔵の王守溪・王弇州兄弟の手跋あるものは、その字勢實に董の

摹せる『戲鴻堂帖』と異なるなし。特だ董の陳仲醇に摹出せるもの、原

石本より出するにあらざれば、微や庭弱なるを覚ゆるのみ。宋拓の原本

を見るに及び、清勁古質は、吳門の一本の比にあらず。然れども亦た

實に化度・廟堂と差肩するあたわざるなり。山谷云うところの「轍迹

尋ぬべきなし」とは、「長史は草聖」に合わせてこれを言うなり。人は

第だ長史は草を善くするを知るのみにして、孰れかその正楷の古勁なる

此のごとくなるを知らん。その「轍迹尋ぬべきなし」と謂う所以は、

専らこの郎官記を賛むるにあらずして、輒ち唐賢の諸書家を掩わんと欲

すればなり。弇州の跋に「化度・廟堂・九成、皆に三舍を退く」と謂う

は、則ち誠に言の過當なるものなり。

(659) 戲鴻堂 『戲鴻堂帖』一六卷をさす。註(41)前出。なお「郎官石記」は、

この卷七に刻入する。董其昌の楷書跋には「長史（張旭）の郎官壁記は、世

に別本無し。唯だ王奉常・敬美（王世貞）のみ之れ有り。陳仲醇（陳繼儒）

摹して以って予に寄す。草を学ぶには必ず真自ら入るを知る也」とあり、下

文にもいのように、陳繼儒の摹本に依り翻刻したものである。

(660) 吳門摹刻一本即中吳紀聞所稱蘇州學舍 都穆は「郎官石記」の孤拓本を

入手し、その『金薤琳琅』卷九に跋した。ここはその記録による。即ち

「(前略) 宋の龔明之の『中吳紀聞』に云う、長史は蘇の人なり。承平の時、

碑は蘇學中堂の後に在り。已に漸く剝削し、兵火の後復た存せず矣。元

の商德符云う、石刻は旧と京兆に在るも、今は亡しと。明之及び商氏の説に

観れば、この刻、宋・元に在りて固に已に得難し。予の家の所蔵本、未だ知らず、其れ蘇学より出するや、或いは京兆に出するやを。皆に知る可からず。但だ年を歴ること久遠、而して紙墨完好、誠に希世の物也。ただし右にいう「蘇学本」を摹刻と断案するのは翁方綱で、その『蘇齋題跋』卷上「蘇齋選碑説」へ張長史郎官石記の註に「董刻『戲鴻堂』一本は、最も真を失なう。呉門の翻刻の一本も、亦た未だ到らず。此れ真本を見るに非れば不可なり」という。ちなみに孤拓本の成親王の跋に『王奉常集』を引いて「郎官壁記は、天下此の一本に止まる。呉中に尚お一偽本有り、亦た吾兄の所に在り云々」とある。

(661) 宋牧仲 牧中は宋肇(一六三四—一七一三)の字。号は漫堂・蘇津山人。晩号を西陂老人(別に西陂放鴨翁)という。河南省商丘の人。父宋権の蔭によつて官界に入り、江蘇巡撫に累進し、吏部尚書に至つた。博学で詩詞古文に秀れ、王士禎と名を齊しくした。書画を善くしたが、ことに蘭竹は超妙と称された。また收藏に富み、鑑識に精しかった。著に『西陂類稿』三九卷、『蘇津山人詩集』一八卷、『漫堂書画跋』一卷、『漫堂墨品』一卷ほかがある。伝は『清史稿』卷二八〇、『清史列伝』卷九、『碑伝集』卷六七、『国朝先正事略』卷九、『清代学者象伝』卷一、『国朝書画家筆録』卷一ほか。

宋肇が「郎官石記」を入手した経緯は定かでないが、いまこの孤拓本影印の全軌の跋に「康熙丙戌(四五年・一七〇六)清明の日、太乙、漫堂先生に私第に謁せしとき、張長史郎官庁壁記を出し之を觀しめ、太乙をして僧舎に持ち帰らしめ、以て余に示さしむ。此の本は、旧と都太僕(都穆)の家に藏し、後、王文恪公(王鏊)之を得、已に復た兪州兄弟(王世貞・王世懋)の所有と為る。今、商丘先生(宋肇)復た呉に購得し、而して宝藏せり焉。(下略)」とあり、王世貞のち宋肇に帰したことが知られる。

(661) 王守溪 守溪は王鏊(一四五〇—一五二四)の号。字は濟之、震沢先生と称された。諡は文恪。江蘇省蘇州の人。成化二年(一四七五)の進士。のち侍講学士などを歴任し、正徳(一五〇六—一五二一)の初め入閣し、戸部尚書・文淵閣大学士に累進し、少傅を加えられた。詩文に秀れ、書は晋唐の筆意を得て清勁な書風であると評される(雷礼『列卿記』)。著に『姑蘇志』六〇卷、『震沢文集』三六卷ほかがある。伝は『明史』卷二八一、『明詩綜』卷

二五、『明詩紀事』丙七ほか。

なお王鏊の手跋とは、孤拓本にある一跋をさす。

(662) 王兪州兄弟 王世貞、註(436)前出と王世懋をさす。

王世懋(一五三六—一五八九)字は敬美、号は麟州・損齋、また牆東生という。江蘇省太倉の人。嘉慶三八年(一五五九)の進士。官は南京太常少卿に至つたが、王世貞より三年前に卒した。詩文を善くし、兄に並ぐ名声を得た。書も能くし、『書史会要』に「世懋の書は俗筆無し。多く晋帖中従り流出す」と評している。著に『王奉常集』『芸圃擷餘』『名山游記』その他のあることが伝記中にみえるが、いずれも未見。伝は『明史』卷二八七、『明史稿』卷二六八、『明詩綜』卷四七、『明詩紀事』己七ほか。

ちなみに、王世貞・世懋の手跋は、孤拓本卷末に、前者が一、後者は三跋みえる。

(663) 陳仲醇 仲醇は陳繼儒(一五五八—一六三九)の字。号は眉公・眉道人・麋公・白石山樵、奇号は晚香堂・來儀堂・頑仙廬・宝顏堂という。江蘇省華亭の人。二一歳のとき諸生に補せられたが、二九歳で崑山に隠居し、のち東余山に定住して著述に専念した。在野の知識人として盛名が聞え、朝廷はしばしば徵召したが応じなかった。博識で經史諸子にいたるまで精討しいものはなく、また詩文に長じ、画山水、梅竹をも能くした。書は蘇軾・米芾に私淑したというが、むしろ同郷の先輩で早くから交遊の深い董其昌の影響が色濃い。ただ蘇軾の書は断簡残碑にいたるまで搜採し、自ら摹刻したのが『晚香堂帖』二八卷である。また名蹟を集刻した『燕喜堂帖』八卷がある。著述は極めて多い、『眉公全集』ほかがあるが、書に関するものには『妮古録』四卷、『書画史』一卷、『書画金蕩』一卷などがある。伝は『陳眉公先生集』卷首「自撰墓誌銘」、『明史』卷二九八、『明詩紀事』庚七、『列朝詩集小伝』丁、『無声詩史』卷四ほか。

なお陳繼儒が董其昌のために、王世貞所蔵の「郎官石記」を鈎摹しておくったことについては、『戲鴻堂帖』卷七の当該帖末の刻跋にみえる。註(659)前引。

(664) 厓弱 虚弱、ひ弱さをいう。『漢書』裴懷古伝に「素より厓弱にして騎する能わず」とあるが、ここでは筆力のないことをいう。

(665) 見宋拓原本 註(660)前引の『蘇齋選碑説』の註記の末に「真本は山左の人の家に在りと聞くも、未だ之を見るを得ず」との双註がある。「蘇齋選碑説」は、嘉慶庚申（五年・一八〇〇）に脱稿している。いま孤拓本には、翁方綱の九跋をみるが、それらの款記によれば、嘉慶の乙丑（一〇年・一八〇五）、丁卯（十二年・一八〇七）、丁丑（二十年・一八一七）の三度にわたって借観している。初見は『選碑説』後五年のことであった。ちなみに孤拓本の丁丑年の五跋中の一跋は『復初齋文集』卷二三「跋郎官石記四首」の一として入れている。

(666) 差肩 やや後にあることをいう。例えば『管子』軽重甲の「管子、差肩し、而して問うて曰く」の註に「肩、差や後に在る也」とある。

(667) 山谷所云 以下の「無轍迹可尋」は、いま『山谷題跋』等でない。孤拓本の王鏊の跋に「張長史、人はその草聖の神逸を知る也。孰れか楷法の嚴正なる此の如きを知るや。東坡謂う。古自ら正書を善くせずして草に工なる者有らずと。山谷謂う、郎官庁壁記、唐人の正書の能く其の右に出づる者無し。故より草聖、諸家を度越し、轍跡の尋ぬ可き無し」とあるのに拠るのであらう。

(668) 兪州跋 以下の「化度三舎」は、孤拓本の王世貞跋中の語。ただし(前略)九成・廟堂・化度・虞公諸楷帖、皆避三舎矣」につくる。ちなみに「三舎を避く」は『左伝』僖公二三年にみえる故事から転じて、相手に一目置くことの意。

〔二六〕唐初書家。盛於歐陽虞褚。歐陽率更。特起山陰之後。有唐一代無足擬似者。虞書則在唐初。有昭仁寺碑孔祭酒碑二碑。不知出於誰氏。

有稱爲虞書者。雖非虞書。亦畧近之。褚書則唐人學褚者輩出。就其最得神韻者。薛稷魏栖梧也。當時有買褚得薛語。以配王羊。而薛書世傳甚少。惟昇仙太子碑陰諸人銜名。其下列則鍾紹京書。其碑題年月及碑陰之上列人名。則皆薛書也。內有臣鍾紹京一行。亦是薛書。薛書眞石世所存者。惟此而已。(669) 魏栖梧書善才寺碑。世無二本。其裝冊時。取碑內褚遂良三字。

安置題目之次行。詭爲褚遂良書。冊有涿州馮文敏題。(670) 漫不詳考。竟以爲褚書。予据王若林考定語。(671) 改題爲魏栖梧。此二碑直作褚書妙品觀。

唐初の書家、歐陽・虞・褚に盛んなり。歐陽率更は、特に山陰の後に起り、有唐一代擬似するに足る者なし。虞の書は則ち唐初に在りては、〈昭仁寺碑〉・〈孔祭酒碑〉の二碑あるも、誰氏に出ずるかを知らず。

稱して虞の書となす者あり。虞の書にあらざると雖ども、亦た略ぼこれに近し。褚の書は則ち唐人褚を学ぶ者輩出す。就ちその最も神韻を得る者は、薛稷・魏栖梧なり。当時「褚を買いて薛を得」の語ありて、もつて王・羊に配す。しかれども薛の書の世に伝わるもの甚はだ少なく、惟だ〈昇仙太子碑〉陰の諸人の銜名のみ。その下列は則ち鍾紹京の書なるも、その碑題の年月及び碑陰の上列の人名は、則ち皆に薛の書なり。内に「臣鍾紹京」一行あるも、亦た是れ薛の書なり。薛書の眞石の世に存するところのものは、惟だこれのみ。魏栖梧の書せる善才寺碑は、世に二本なし。その冊に装せる時、碑内の「褚遂良」の三字を取り、妄りに題目の次行に置き、詭りて褚遂良の書となす。冊には涿州・馮文敏の題あり。漫りに詳考せずして、竟にもつて褚の書となす。予は王若林の考定の語に据り、題を改めて魏栖梧となす。この二碑は直ちに褚書の妙品觀を作す。

(669) 昭仁寺碑 唐・貞觀四年（六三〇）、陝西省長武県の昭仁寺内に立碑され、その地に現存する。碑石は額ともで一丈一尺八寸×四尺五寸（『金石萃編』卷四二）。碑額は双鉤刻の篆書三行で、「大唐幽州昭仁寺之碑」と題し、

碑文は四〇行、満行八四字、朱子奢の奉勅撰、書者の名は銘記していない。碑陰は上段に一五行、行一五字、下段は五行、行一一字を入れてある。碑文の内容は、太宗が、かつて薛挙軍と戦って歿した者の霊を弔うため、この地に昭仁寺を建立した事情をいう。

この書人について翁方綱は、下文に「虞書に非ずと雖ども略ぼこれに近し」というが、古来、衆訟あることを享けての言である。いまその一々については省略するが、『金石萃編』に碑陰（或は碑側）にあるとする宋・紹聖元年（一〇九四）の張重の題記には、「昭仁寺碑、世以て虞世南の書と為す。之を廟堂碑に校するに、淳淡は相い類すも、而れども骨格老成は逮ばざる也。豈に虞世南の少時書する所ならん乎」という。その後、都穆『金薤琳琅』卷一三に、宋の鄭樵『金石略』に拠り、虞世南の書というのをははじめ、趙岫『石墨鐫華』卷二、孫承沢『庚子銷夏記』卷六、林侗『来齋金石刻考略』卷下その他も虞世南の書とみる。また畢沅『閔中金石記』卷二は王知敬の書とし、盛時恭『蒼潤軒碑跋記』不分卷には、撰書とも朱子奢かという。しかし、張重がすでに「淳淡さは似るが骨格や熟練度は劣る」といったが、王澐『虚舟題跋』卷六に「此の書、永興（虞世南）に似ると雖も、然れども廟堂は豊逸、此れは則ち瘦勁なり。面目は似たりと雖ども、神骨は則ち殊る。云々」といい、また揚守敬『平碑記』卷三に「是の碑は、前人多く指して虞永興の書と為す。之を細玩するに、誠に一、二波法の相い似たる処有るも、其の格度、氣韻は、則ち逮ばざることを遠く甚し。蓋し此の用筆、勁しと雖ども、猶お隋人の方板の旧習に沿うがごとし。永興は則ち変化百出し、風神世に絶す。安んぞ同日にして語る可けん。且つ永興は内に剛柔を含むも、此れ尚お内含と云うを得ん邪。世人、永興の碑一も存する者無きを惜しみ、遂に此れを以て之に当てんと欲す。而れども未だ永興を尽すに足らざるを知らざる也。云々」と評するのが妥当な見解であろう。

(670) 孔祭酒碑 通称は（孔穎達碑）。貞観二年（六四八）立碑。昭陵陪家の一で、いま昭陵博物館の第一室に列置されている。碑石は額ともで一丈一尺二寸×四尺二寸四分（『金石萃編』卷四七）。陽文の篆書四行、行四字で「大唐故国子祭酒曲阜憲公孔公之碑銘」と額題し、碑文は三五行、満行七六字。ただし損泐が甚く、いまは二二〇〇字ほどしか見えない。于志寧の撰、

書者名を銘記していない。趙明誠『金石録』卷二三には、虞世南の書と伝えるが立碑の年には死亡しているからあり得ないといったあと「然れども其の筆法を驗するに、蓋し当時の善書者、世南の書を規摹し、而して之を為れる者也」といい、董道『東觀餘論』卷下はまた、虞の書というのを否定し「豈に当時、永興の法を学べる者に非らん乎。筆勢適美、亦た自ら珍とす可し矣」という。おそらく弘文館に学び、虞世南学士の楷法を会得した者の手に成るものだろう。なお孔穎達は、つとに太宗の秦王時代「十八学士」として仕え、のち国子司業などを歴任し、貞観二年（六三三）国子祭酒に至ったが、在任中『五経正義』の編纂に当るなど、唐初の儒学振興に大きく貢献した人で、伝は『旧唐書』卷七三、『新唐書』卷一九八にみえるが、その碑文によって正史の誤りを正すところもある。

ちなみに一九七四年、昭陵の陵園内の陪冢碑を昭陵博物館に移置する作業の際、孔穎達碑の碑身を跌からはずしたところ、跌の上面の槽の両側にあたる個所に、石工の試し刻りとおぼしい習刻が発見された。いまこの跌石は、『孔穎達碑』の本身とは別にして同室内に置かれている。習刻の計四〇字中、虞世南風に倣っているものももっとも多い（『文物』一九七九一一二、拙著『中国新出土の書』一六二頁参照）。

(671) 薛稷 註(339)前出。

(672) 魏栖梧 註(526)前出。

(673) 買褚得薛 褚遂良の書と買って購った作が薛稷の書であったが人はそれでも満足した、という意。朱景玄『唐朝名画録』不分卷に「薛稷は褚河南を師とす。時に称す、褚を買い薛を得るも、其の節を失なわず」とあるのに拠る。ちなみに『旧唐書』卷七三本伝に「(前略)稷の外祖の魏徴の家、凶籍に富み、多く虞・褚の旧跡有り。稷 鋭意模倣す。筆態 適麗、当時 之に及ぶ者無し。云々」とある。また『書断』卷下に「(前略)書は稷公に学ぶ。尤も綺麗を尚び、媚好 膚肉は、師の半ばを得。河南公(褚遂良)の高足と謂う可し」とある。

(674) 以配王羊 王は王献之、羊は羊欣をさす。ここは『書断』卷中の羊欣の項に「(前略)太令(王献之)に師資するもの、時に亦た衆し矣。雲塵の遠無きに非ず。親しく妙旨を承け、室に入るが若き者は、唯だ独り此の公のみ。



亦た猶お顔回と夫子と歩趨の近き有るがごとし。（中略）沈約云う。敬元（羊欣）尤も隸書を善くす。子敬（王献之）の後、以て独歩す可しと。時人云う、王を、買いて羊を得るも、望む所を失せずと。云々」とあるのに拠る。前註「買猪得醉」は、もとより「買王得羊」をもじったものである。

(675) 昇仙太子碑陰 唐の聖曆二年（六六九）、河南省偃師県の緱山にある仙君廟内に建碑したものが、現存の有無は確認できない。後考に俟つ。碑石は額ともで一丈七尺四寸×六尺五寸（『金石萃編』卷六三）、三三行、満行六六字。額は飛白体二行で「昇仙太子之碑」と題する。則天武后の撰書である。文の内容は、仙人視される周の靈王の太子・王子晋の廟を、昇仙太子廟と改称したことなどをいう記念碑である。ただし内実は、則天武后の嬖臣である張宗昌が、王子晋の後身だとする佞臣の言により、「武后 為に其の祠を葺し、親ら銘して其の碑に書す。君臣 宣淫して恥ずる無きの類、此の如し。万古の一笑を発す可し」（趙明誠『金石錄』卷二五）といわれる碑である。碑の書体は、行書とする著録もあるが、草書が基盤で、まま行書をまじえ書きし、またときに飛白体の点画を加え、いわゆる則天文字をも入れている。翁方綱は「唐の武氏、張宗昌の為に而て其の事を為す。論ず可き者無し」（『復初齋文集』卷二二）と意識的に無視する。楊守敬『學者邇言』卷三は「武后 任意の造字にして、体格も亦た自ら創む。究に是れ悪札なり」と非っている。が『偃師県志』には「（前略）今、其の草法を觀るに極めて工なり。烏糸方格有り。尚お草草及び皇象の書に似たり。云々」（『金石萃編』引）と称揚する。ただ草書碑の濫觴であるとともに、これだけの巨碑に、悠揚暢達した筆勢で独自の書風をそなえている点においては注目に値する。

碑陰は三段に分かれ、上段に武則天製・薛曜書の「遊仙篇」と諸臣の官銜列名、中段にも諸臣の銜名および神龍二年の題記、下段は宋人の題名である。ともに楷書。

(676) 鍾紹京 生卒年不詳。唐の則天武后―玄宗期に活躍した。字は可大、江西省贛州の人。鍾繇の一〇世の孫で、時に「小鍾」と称された。初め司農録事となり、開元（七一三―四一）の初め、書に工なることで直鳳閣に入り、中書令に累進し、のち越国公に封ぜられた。武后時代の宮殿・明堂の題署はみな鍾紹京が書いた。書画の收藏に富み、王羲之・献之、褚遂良の真蹟を数

十百卷所蔵したという。

米芾『書史』には「唐の越国公・鍾紹京の書せる（千文）は、筆勢円勁なり。云々」というが伝わらず。董其昌『画禪筆隨筆』巻一に、董自蔵の（靈飛經）を「筆法精妙にして、廻腕蔵鋒は、子敬（王献之）の神髓を得たり。趙文敏（孟頫）の正書は、寔に之を祖とす。云々」というが、この靈飛經は、王澐「虚舟題跋」巻八「唐玉真公主靈飛經」に、鍾紹京とみる説を退けている。王説に理があり、したがって、いま鍾書のみられるものは、この昇仙太子碑陰の銜名だけである。なお本文にいう「其の下列」とは、陰の中段をさし、初行に「承議郎行左春坊録事直鳳閣臣鍾紹京奉勅御書」とあるのをいう。ちなみに翁方綱『復初齋文集』卷二二「跋昇仙碑陰」には、唐宋以来の学者が薛稷のみを推賞して、鍾に言及しないのを遺憾とし、碑陰の銜名中、薛稷の字を黒く、鍾の書を紅く作った図式を作り、王澐が「鍾紹京は褚（遂良）の織媚を得、薛稷は褚を学びて尺寸を失わず」との評を駭し、「是れ鍾書は、意を揚勑に精にし、摹古に於て長為り。尤も僅かに織媚の謂いに非ず矣。幸に一碑の陰に、具に二家の楷法有るを得、而して武氏 立つ所の碑後に偏置し、君子の幽せざる所と為る。是を以て之を知る者、益ます少し。然れども書法を以てして論ずれば、則ち誠に唐本中の佳蹟なり。云々」と両書を同格に見なしている。

(677) 碑題年月及碑陰之上列人名則皆薛書 碑陰上段の終三行目に「題御製及建辰、并梁 三思已下名、巨薛稷書」と明記している。このうち「御製」とは、碑陽初行題下の「大周天冊金輪聖神皇帝御製御書」、「建辰」とは、碑陽終行の「聖曆二年歲次己亥、六月甲申朔十九日、王寅建」、また「梁三思已下名」とは「春宮尚書校內史監修國史上柱國梁 三思」以下の銜名をさす。ちなみに「梁」下「三」上の空格は「武」の避諱である。

(678) 内有臣鍾紹京一行 碑陰上段の末行に「題諸 等名左春坊録事直鳳閣臣鍾紹京書」とあるのをさすのだから、この一行は、前註引「薛稷書」一行の二行目あとに刻入しているから、「鍾紹京書」の一行を薛書とするのは誤りであらう。

(678) 薛書真石世所存者惟此而已 いま薛稷の（信行禪師碑）（神龍二年・七〇六、越王貞・撰文）の孤拓剪装本があつて大谷大学に蔵されている。つと

に北宋・歐陽棨『集古録目』に〈唐立隋信行禪師興教碑〉の目で載せているが、早い頃に亡佚した。この孤拓本は、清の道光に現れ、何紹基の所蔵となつた。これに跋する呉榮光は「薛少保の書、杏冥君碑と昇仙太子の年月書名自り外、僅かに余の得たる龍門涅槃經七十五字を見るのみ。この刻は乃ち一千九百余字有り。用筆の妙、青瑣瑤台、合意の作と雖も之に過ぎざる也。薛を買つて褚を得と云う可し。子貞太史、其れ之を宝とせよ。道光丙申（一八三六）九月十有八日。云々」とある。何紹基ののち蔣祖詒ほかを遁伝し、羅振玉が將來して大谷禿庵に歸した。さしもの翁方綱も未見のものである。

(680) 魏栖梧善才寺碑 註(526)前出。

(681) 馮文敏 文敏は馮銓の諡号。註(402)前出。

(682) 王若林考定語 若林は王澍の字。註(436)前出。〈善才寺碑〉を魏栖梧の書を論証した王澍の一文は『虚舟題跋』卷六〈唐魏栖梧善才寺碑〉をさす。註(526)参照。

〔一七〕論唐人書。當以其近古能存晉法爲要義。吾所企慕而未見者。薛純陀砥柱銘。<sup>(683)</sup>顏魯公離堆銘也。<sup>(684)</sup>若其近古而能存隸意。吾不欲推褚書三龕記。<sup>(687)</sup>而欲推李北海端州石室記。<sup>(688)</sup>抑其得晉法者。推張嘉貞北嶽廟碑歟。<sup>(691)</sup>柳公綽諸葛祠記歟。<sup>(693)</sup>

唐人の書を論ずるや、その近古能く晋法を存するをもつて要義となす。吾れ企慕すれどもいまだ見ざるところのものは、薛純陀の〈砥柱銘〉顏魯公の〈離堆銘〉なり。その近古にして能く隸意を存せるが若きには、吾れ褚書の〈三龕記〉を推さんと欲せずして、李北海の〈端州石室記〉を推さんと欲す。抑そもその晋法を得る者には、張嘉貞の〈北岳廟碑〉を推さん歟、柳公綽の〈諸葛祠記〉を推さん歟。

(683) 薛純陀 生卒年不詳。唐・太宗のとき秘書省正字に官した。その書は、張懷瓘『書斷』卷中に「亦た詢（歐陽詢）の草に效うも、肥鈍に傷あり。乃ち通（歐陽通）の亜也」といい、歐陽脩『六一題跋』卷五「唐弁法師碑」には「書に筆法有り。其の遒勁精悍なる、吾が家の蘭台（歐陽通）に減せず。意うに其の當時、必ず知名の士為らん」という。

(684) 砥柱銘 陳思『宝刻叢編』卷一〇「陝州」に〈唐砥柱山銘〉をあげ、『諸道石刻録』を引き「唐・魏徵撰、薛純陀書」とし、『寧字記』を引き「陝石県に在り。唐貞觀十二年、太宗東巡して此に臨幸す。今、魏徵製する所の碑銘有り」という。が『宝刻類編』卷二は、薛純陀に〈贈比干詔〉と〈宏福寺弁法師碑〉をあげ、薛純陀の作として〈砥柱銘魏徵撰、貞觀十二年、陝〉と〈令狐文軌造像銘〉を録している。この薛純陀（あるいは薛仁陀）については不詳。

〈砥柱銘〉について最も詳しいのは、董道『広川書跋』卷七である。その全文は「唐・砥柱銘。貞觀十二年、特進・魏徵撰、秘書正字・薛純書。其の字は山に因りて鑿鑿し、其の徑の平通に就きて字を置く。故に行字を成さず。宛転として嵌嵌の間に索して以て摹すの故に、石存すと雖ども、而れども頗る得難し。世、知りて之を貴ぶ。唐は書学を以て高しとするも、刻石の文、此れ其の最も大なる者也。筆力餘有り、点画尚お多く隸体を失なわず。氣象の奇偉なる、猶お古人の体法有るがごとし。其の後、柳公權書刻して招提す。今、己に譌欠して読む可からず。惟だ純の書する所のみは、濁河の間に在りて完きを得。蓋し摹撃の工至らず、洪濤怒浪、左右に射発し、而して風雨の摧剝日に至るも、尚お廃せざる也」。これによれば、董道も薛純の書とすること、銘は摩崖書で、山間の溪流のしぶきがかかる岩場にあること、唐代石刻中、最大の字粒であることが知られる。

(685) 顏魯公 顏真卿をいう。註(470)前出。

(686) 離堆記 〈鮮于氏離堆記〉に同じ。唐の宝應元年（七六二）、顏真卿の書、摩崖。もと四川省新政県の離堆山の崖壁に刻された。文は当時の名族である鮮于氏一族を顕彰する内容で、約一五〇〇字、一字の径六cm近い楷書で書かれたが、宋の元符三年（一〇九〇）には、すでに四〇〇余字であった。『八瓊室金石補正』卷五九所収、馬存の記参照。清の道光一〇年（一八三〇）郭尚先らが該地に訪得したときには、わずか五八字しか残っていなかつ

たという（前掲書引、吳栄光『筠清館金石記』参照）。全文は『顔魯公文集』卷一三に記録されているが、陸増祥の全掲書には、五紙の拓本の五九字を、全文に配して載せてある。なお王象之『輿地碑目記』（南宋・嘉定辛巳・一二二一序、『粵雅堂叢書』本）卷四「蓬州碑記」（顔魯公書碑刻）には、左のように註している。「顔魯公、蓬州長史と為り、蓬に在ること四年、新政界の鮮于氏の家に往来し、為に離堆記を書す。今、県西南の崖石の間に在り。又に（鮮于仲通里門記）を書す。復た小字を以て之を書し、又に摩崖に大書す。碑は広さ数丈たり。今、皆に崖石の間に在り。自ら崖石に書すの故に、書体尤も精妙為り」。ちなみに方若『校碑隨筆』には、存字・拓の新旧についていうが、この影印本を見かけない。

(687) 褚書三龕記 褚遂良（伊闕仏龕記）に同じ。註(318)前出。

(688) 李北海 北海は唐の李邕（六七八―七四七）の敬称。字は泰和、江蘇省揚州の人。のち北海郡太守に官したことで、また李北海とよばれる。『文選』に註した李善の子である。長安（七〇二―〇五年）のはじめ李嶠・張廷珪の推薦で左拾遺に任ぜられ、その後、戸部郎中、御史中丞、陳州刺史、括州刺史その他を歴任したが、天寶五載、二度目の汚職事件と宰相・李林甫に忌まわれていたことで処刑された。

その書は、もっとも行書に秀れた。初め王羲之を学んだが、のち旧習を脱し、一幟をたてた。若い頃から文章家の名があり、ことに碑頌文に長じたので、金帛をもってその文と書とを請う者が多く、李邕の書碑は八〇〇種を下らないといわれている。『宣和書譜』卷八の李邕伝は、その書と文についてもっとも詳しいが、李陽冰は「書中の仙手」、裴休は「北海の書を觀れば、其の風采を想見す」と称え、ついで「大抵、人の才術は多く兼ね称されず。王羲之は書を以て其の文を掩われ、李淳風は術を以て其の学を映ず。文章書翰、俱に時に重きは、惟だ邕のみ之を得。当時、金帛を奉じて邕の書を求む。前後受くる所は鉅万余。古自り未だ此の如きの盛なる者有らざる也。邕の墨蹟を見るに、其の源流は、実に羲之より出ず。議する者、以て骨氣洞達、突々として神力有るが如しと謂う。此れ亦た名実より浮かざる也。杜甫歌を作り之を美めて曰く、声華健筆に当り、灑落清製に富むと。世の仰ぎ慕う所と為ること、率ね皆に是の如し」と、最大の讚辞をおくっている。米芾

『海岳名言』は「子敬（王献之）を擺脫せるも、体、穢濃に乏し」といい、元の趙孟頫『論書』には「（前略）須らく徐会稽（徐浩）の濁を戒め、李北海の狂を戒むべし。濁は跛偃に在り、狂は欹斜に在り。（中略）且つ世に云う、会稽の法は蘭亭自り出ずと。蘭亭は即ち偃筆無き也。又云う、北海は深く太令を悟ると、太令は是の若きの跛跛あらざる也。云々」といい、米・趙ともさほど評価していない。しかし明人は総じて高く評価し、董其昌『画禅室隨筆』のごときは「余、嘗て謂う、右軍は龍の如く北海は象の如しと。世、必ず余が言に肯ずる者有らん」とまで称揚する。著名な碑に李思君碑、麓山寺碑、少林寺戒壇銘、李秀残碑などがある。伝は『旧唐書』卷一九〇、『新唐書』卷二〇二、『書史会要』卷五、中田勇次郎『中国書人伝』、深谷周道『唐代書人伝』ほかがある。

(689) 端州石室記 唐・開元一五年（七二七）、広東省肇慶市七星巖の崖壁に刻された摩崖。現在の状態は不明である。李邕の撰書。四尺四寸五分×三尺二寸、一八行、行二三字（『金石萃編』卷七七）。楷書（李邕の楷書はこの一刻のみ）である。書者について異見がある。欧陽脩『集古録跋尾』卷六は、書者の人名は銘記されていず、筆蹟からみて、張庭珪（注331前出）かと疑っている。が『金石萃編』に引く葉盛『泉竹堂稿』には「（前略）欧陽公、嘗て定めて以て張庭珪の書と為す。然れども廷珪の孔林の隸碑を攷するに、字頗や類せず。云々」といい、その後、顧炎武『金石文字記』卷六、王昶の前掲書ほかほとんど李邕の書という。ただ葉盛は右の文に続き「蓋し此の刻、夏潦一たび至るに遇えば、輒ち滄浸磨盪する所と為る。且つ宋時の重刻を経、当に已に真を失なうべし矣」といつている。

(690) 張嘉貞 六六六―七二九年、名は不詳、嘉定は字。山西省臨猗の人。則天武后の長安年間（七〇一―〇五）に監察御史、玄宗の時代に中書侍郎・同中書門下平章事となり、中書令に遷った。のち工部尚書に拜せられ、定州刺史となり、河東侯に封ぜられた。『法書要録』の編者、張彦遠の高祖で、その序文に「彦遠の家、法書名画を伝うるは、高祖の河東公の収蔵珍秘自りす。河東公は書迹、俊異にして、尤も大書を能くす。本伝に云う、師法に因らず。而して天姿、雄勁たりと。」  
定州北嶽碑、好事の伝うる所と為る云々という。伝は『旧唐書』卷九

(691) 北岳廟碑 『旧唐書』卷九九に「開元中、嘉貞(張嘉定)定州刺史と為る。州に至るや、恒嶽廟中に於て頌を立つ。自ら文を為りて石に書す。素質にして黒文、甚だ奇麗為り。師法に因らず、而して天姿雄勁たり。云々」とある。金石書としては、趙明誠『金石錄』卷六に「北嶽碑上」として「張嘉貞撰、并びに行書。開元十五年八月」とあるのが初見で、陳思『宝刻叢編』卷六に『金石錄』を引き(ただ八月を四月とする)、『宝刻類編』は「北岳碑」として載せ、張嘉定の「撰并びに書、開元十五年八月 真定 存」というのみで、この後の金石書に「北嶽廟碑」(北岳恒山碑)として載せるものは張嘉定の撰書ではない。後考に俟つ。

(692) 柳公綽 七六三—八〇三年、字は寛(別に子寛とも)、諡は元。陝西省耀県の人。柳公権の兄で、官は吏部郎中、湖南觀察使、給事中、京兆尹、檢校左僕射などを歴任し、太和(八二七—八三五)の初年、河東節度使に至った。書法を善くした。米芾『海岳名言』は「公綽は乃ち兄(公権)より俗ならず」と評し、明の王世貞『弇州山人稿』には「柳は書に於て名を称するを得ず。独り米元章のみは、其れ誠懸(柳公権)に勝ると謂う。今、其の行筆を観るに、飄灑にして雄逸、拘迫寒儉の態無し。真に填腕に足る。第だ結構は小しく疎にして、鉄腕もて擦磔の間に運する能わざる耳」と評している。伝は『旧唐書』卷一六五、『新唐書』卷一六三。

(693) 諸葛祠記 種々の称があるが、〈諸葛武侯祠堂碑〉で通りがよい。唐・元和四年(八〇九)四川省成都の武侯祠に立碑されたが、いま所在は不明である。碑は一丈一尺六寸×五尺七尺、二四行、行五〇字。楷書(『金石萃編』卷二〇五)。裴度の撰、柳公綽の書。碑文は『文苑英華』『唐文粹』両書に採られている。『金石萃編』に引く明の弘治一〇年(一四九七)の榮華の跋に「(前略)筆法遒勁、正人端士の如し。敬す可し。誠に二絶也。云々」と称しているが、楊賓『大瓢偶筆』卷三は「柳子厚(公綽)の書せる(武侯碑)は、晋人の風度有りとも雖も、然れども力量は浅薄にして、誠懸(柳公権)に及ばざること遠く甚し。云々」という。ちなみに「八瓊室金石補正」卷六八には、この碑の陰と側にある〈碑陰記〉と題名の全文を載せている。

〔二八〕以山谷言大字莫如瘞鶴銘之意推之。則中宗榮陽手勅乎。抑猶未

也。元宗紀太山銘年月一行。或庶幾歟。

山谷の言う「大字は瘞鶴銘に如くはなし」の意をもってこれを推せば、則ち中宗の〈榮陽手勅〉か、抑そも猶お未だし也。玄宗の〈紀太山銘〉の年月の一行、あるいは庶幾き歟。

(694) 大字莫如瘞鶴銘 註(431)前出。

(695) 中宗 中宗は唐第四代皇帝、姓は李、名は顕の廟号、六五六—七一〇年、在位は六八三—八四年である。高宗と則天武后との七男。六八〇年、章懷太子・李賢が廃されて太子に代り、高宗の歿後に即位したが、則天武后に実権を握られており、皇后韋氏への警戒で、わずか二か月で廃され、湖北省房県に流された。武后の政治の失墜で、聖曆元年(六九八)復たび太子となり、ついで武周政権の転覆をはかる韋氏一派にかつがれて皇帝位に即位したが、実権は韋后にあり、ついに后と娘の安楽公主によって毒殺された。史書ほか、その書人としての記事をみかけないが、張彦遠『歴代名画記』卷九に「書画を善くす」という。〈高宗述聖記〉〈賜盧正道勅〉は、その書として伝える。伝は『旧唐書』卷七、『新唐書』卷四。

(696) 榮陽手勅 榮陽は地名で、今の河南省鄭州。手勅は自ら書く詔勅をいう。〈賜盧正道勅〉また〈盧正道勅〉をさし、通常〈榮陽手勅〉とはよばない。唐・景龍元年(七〇七)、河南省榮陽に建てられたが、いまの所在は確認できない。碑石は九尺一寸×四尺八寸(『金石萃編』卷六八)。碑文は六行、満行一字。全文で六三字、字径約一五cmの大字で、榮陽県令・盧正道の治政を嘉した詔勅を、中宗自らが手書したものである。なおこの碑陰には〈識法師頌盧公清徳文〉(隸書、三四行、行六一字)が刻されている。

この楷書の書風について、伏見冲敬氏は、飛白体の筆法をまじえたもので、太宗以来の歴代皇帝の飛白好みの系譜にあると論証されている(『書品』一二七号)。

(697) 元宗 「元」は「玄」の避諱。玄宗は唐第六代皇帝、名は隆基の廟号、

六八五〜七六二、在位は七二二〜五六年。睿宗の三男。受禪によって二八歳で即位後、開元と改元し、行政改革、ことに綱紀の肅正および農産業の振興により、開元の治とよばれる盛世を生んだ。が、李林甫・楊国忠を重用してからは政治を怠り、天宝四載（七四五）楊貴妃を納れて、日夜遊宴にふけた。こうしたことで政治が乱れ、天宝一四載（七五五）には、安禄山が反乱し、玄宗は蜀にのがれ、一時は唐朝を危うくした。翌年、肅宗に譲位し、戦乱が下火になって長安に帰ったが、太上至道聖皇帝の尊号を奉られたものの、その五年後、悶々のうちに世を去った。玄宗は、騎射を善くし、音律・曆象の学にも通じたが、一方、書に工で、ことに八分を善くした。その書は米芾『海岳名言』に「字体肥俗」といわれ、また「徐浩有り、時君（玄宗）の好む所に合す。経生の字も亦た此れ自り肥ゆ」というように、肥厚体の風尚を生んだ。その書に〈石台孝經〉〈涼国長公主碑〉〈紀太山銘〉〈鶴鶴頌〉ほかがある。伝は『旧唐書』巻八、『新唐書』巻五、『宣和書譜』巻一ほか。

(698) 紀太山銘 註(310)前出。なお下文にいう「年月一行」とは、末行の「大唐開元十四年歲在景寅、九月乙亥朔十二日景戌建」をさす。

〔一九〕褚與顏皆大令之傳也。褚顏二家。豈惟唐一代書家宗之。并開宋後諸家也。褚書正楷。亦多微帶行體之意。惟孟法師碑。世又罕傳。顏則多正書矣。以忠義之氣。演大令之脈。又能其中鋒。不偏側以取姿媚。其正楷之雄乎。然而楷勢既不能如晉人參差蕭散。究以分行布白見格意焉。而顏楷過於字字比密。肩背相抗不畱餘地。若宋廣平碑碑側尤妙。殷君夫人碑茅山李元靖碑元次山碑。尚庶幾可想大令遺意耶。

褚と顔とは皆に大令の伝なり。褚・顔の二家、豈に惟だ唐一代の書家のみこれを宗とせん。并びに宋の後の諸家を開けるなり。褚の書せる正楷も、亦た多く微や行体の意を帯ぶ。惟だ孟法師碑は、世に又に伝うる

もの罕れなり。顔は則ち多く正書たり。忠義の氣をもって、大令の脈を演べ、又にその中鋒を能くし、偏側せずしてもって姿媚を取る。それ正楷の雄なる乎。然れども楷勢はすでに晋人參差蕭散のごとくなるあたわらず。究に分行布白をもって格意を見る。しこうして顔の楷は字々密に比ぶに過ぎ、肩背相抗して余地を留めず。宋広平碑碑側尤も妙・殷君夫人碑・茅山李元靖碑・元次山碑の若きは、尚お庶幾ど大令の遺意を想うべき耶。

(699) 大令 王献之をいう。註(404)前出。

(700) 中鋒 用筆法上の術語。いくつかの説があるが、翁方綱は下文に「偏側せず」といつていることから、筆の穂先が点画の中心を通る運筆をさしている。例えば、南宋・姜夔『続書譜』草書用筆に「(前略)常に筆鋒画中に在らんことを欲すれば、則ち左右皆に病無し」という。

(701) 姿媚 形態ひいては表現面の美しさをいう。韓愈「石鼓歌」中に有名な「羲之俗書、姿媚を追う」の用例がある。

(702) 參差蕭散 參差は不揃いをいう語であるが、ここでは規格にはまらないことをいう。蕭散はさっぱりしてわだかまりのないこと。

(703) 分行布白 分間布白と同義で書画における構成面の術語。紙幅における構成や配置、一字においては点画による余白の分割をいう。例えば、伝歐陽詢『八法』(『佩文齋書畫譜』卷三所収)に「分間布白、偏側せ令むる勿れ」。

(704) 格意 用例をみない語であるが、格調というほどの意か。

(705) 宋広平碑 広平は宋璟が広平郡公に封ぜられたことによる敬称で、通称〈宋璟碑〉。また〈宋文貞碑〉ともいう。唐・大曆七年(七七二)河北省河県に建てられ、宋以後に一時亡佚した。明代中期に出土したが断裂していた。いま所在は不明である。原石は一丈一尺七寸×六尺、側の厚さ一尺二寸五分(『金石萃編』卷九七)。額に陰刻の篆書で「大唐故尚書右丞相贈太尉文貞公宋公神道之碑」と題し、碑文は三面刻で、両面ともに二七行、行五二字、側は七行、行五〇字。別の一例は、六年後の大曆一三年に追刻した〈唐故太尉広平文貞公宋公神道側記〉で、一〇行、行七〇字を入れている。ともに顔真

卿の撰書。〈碑側記〉の内容は、正史の本伝に見えない宋璟の逸事を記したものである。

この書に対して孫承沢『庚子銷夏記』巻六に「書法は方整中虚和を帯有す。他書に視べ稍や異なる。尤も宝とす可きと為す。云々」といい、王澐『虚舟題跋』巻一〇は「顔書は多く沈雄痛快を以て工と為す。独だ広平碑のみは紆餘佚蕩、韻度を以て勝る。東坡・元章（蘇軾・米芾）皆に顔は楮自り出すと謂う。此の碑、尤も全体呈露するを覚ゆ。碑側記は工を求むに意無く、而して規矩の外、別に勝趣を具う。尤も是れ顔書の第一の合作なり。蓋し前碑は直ちに神品に入り、而して碑側は更に逸品に居る矣。云々」という。翁方綱『復初齋文集』巻二四は「顔の楷は宋広平碑を以て最善と為す。而して其の碑側の小楷書の古朴澹遠は、尤も顔楷の罕に見る所なり。以て褚河南・張長史を追尋し、晋法の楷を問津す可し。云々」とあり、ことに碑側記は、下文にも「尤も妙」と註記し、またその『蘇齋選碑説』には、顔真卿の楷書に七種を選んだうち、第一位に据え、「是れ顔書の最高の作」と評している。ただこの〈碑側記〉は、結構が緩く点画も重厚でない。いわゆる「顔法」の特質はみられず、顔真卿の書に相違ないとすれば、一碑一面貌といわれる顔書中でも、もっとも異質の楷書である。

(706) 殷君夫人碑 『八瓊室金石補正』巻六四は〈錢塘丞殷履直妻顔氏碑〉と標題する。開元二六年（七三八）河南省洛陽県の玉虚観に建てられたが、いまの所在は不明である。碑文は七尺七寸五分×二尺二寸三分、四面刻で、碑陽碑陰とも各九行、碑側各四行、ともに行二九字（『金石萃編』巻一〇一）。額は碑の陽と陰にわたって、各六字で「唐錢唐丞殷君夫人顔君之□□」と篆題しているという（瞿中溶『古泉山館金石文編殘稿』巻二）。王昶の按語には、横題の碑額は珍らしいこと、碑文に磨泐が多く碑主の名を明らかにしたいが、顔真卿の父の姉か妹であること、宋以後に埋没し近時に出土したことなどをいう。瞿中溶は、嘉慶丁丑（一八一七）年に張夔手拓の贈寄に拠って詳考しているが、陸増祥はまた別の拓本に依って、諸家の説を正した碑文を載せている。なお翁方綱『蘇齋選碑説』では、顔書の第四位に置いているが、この碑の書法にわたる著述は見かけない。拓本未見。

(706) 茅山李元靖碑 茅山は地名。「元」字は「玄」の避諱。〈李玄靖碑〉〈元

靖先生碑〉〈李含光碑〉などという。が、同じ地の張從申書〈李玄靖碑〉（大曆七年・七七二）と區別して〈顔書李玄靖碑〉（張廷濟『清儀閣題識』巻二）とも呼ばれる。唐・大曆十二年（七七七）江蘇省句容県茅山の玉晨観に建てられたが、その後の災厄で亡佚した。碑石は断裂の状態で一丈余×三尺二寸五分（『金石萃編』巻一〇〇）。碑文は四面刻で、陰陽とも一九行、兩側各四行、ともに三九字。顔真卿の撰書。内容は、梁・陶弘景の五世の孫で、神仙視された李含光を頌えたものである。

この碑の末に「紹興丁巳五月十有四日、大風折顔碑。靈溪沈作舟、扶起之」と刻されていることで、南宋の紹興七年（一一三七）に断裂したものでらしい。また明の嘉靖三年（一五二四）には、落雷により原形をとどめないほど破砕し、乾隆五七年（一七三六）は、二三個の残石しかなくなっていたため、姚東樵が欠字を摹勒し、玉晨観内に石台を設け、残碑と補石とを排置し、石亭を建てて保護したという（張廷濟『清儀閣題跋』「唐顔魯公書元静先生碑・宋拓足本」および、『金石萃編』引・汪志伊の記）。その後、太平天国の乱で玉晨観が焼き払われ、原石の残塊は一五片となり、のちさらに一石を失ない、またいつしか全部が亡佚した。ところで、李宗翰は宋拓未断の剪装本を入手した。通伝の事情は不明であるが、中華民國の初年に文明書局から印行された（未見）。比田井南谷氏は、この玻璃版をもとに、その一四頁分の欠失部分を、三井聴冰閣旧蔵明初拓（カルフォルニア大学東亞図書館現蔵）の写真と後拓本を用い、可能なかぎりの復元をはかり、先年、公刊された（『玄美名品選』第四期第九輯。「顔真卿李玄靖碑」臨川李氏旧蔵宋拓 書学院修訂復原本）昭和五八年、玄美社刊）。なおこの復原本には、聴冰閣旧蔵本による縮尺約四分の一の復原整本が付されている。ちなみに臨川李氏旧蔵本には、明の朱之赤の跋のあとに、嘉慶三年（一七九八）の翁方綱の観跋および七言古詩二首、また

「此の碑は今唯だ残石存する耳。今日、葦中の所拓殘本五十四紙を以て校対す。春湖宗丞（李宗翰）、此れを廠肆に購う。重題を為さんことを属す。前題を去ること十七年なり矣。方綱時に年八十有二」の跋を入れている。

明の盛時泰『蒼潤軒碑跋』不分巻には「結体は家廟碑と一同」といい、王澐『虚舟題跋』巻九に、覆刻本を「筆画細瘦にして、全て魯公雄健の氣に乏し。且つ字の訛せる者、七十余所。云々」といったあと、原石拓について

は、「昔人、此の碑の筆法は家廟碑に同じきなりと称す。余、魯公晩年の書する所の碑を按ずるに、跌宕は宋広平に如くは莫く、肅括は家廟に如くは莫し。此の碑の風格、正に広平・家廟の間に在り。是れ魯公の極筆なり」と激賞している。また何紹基『東州草堂文鈔』《題跋》類《跋張從申書李元靖先生碑拓本二則》の後則には「顔の書せる元靖先生碑は、勁偉中に緩綽を出し、心儀楊許の風、覚えずして堅下に流露せる也」と評し、梁嘯『承晋齋積聞錄』不分卷は「顔魯公の李文靖碑は書の変格也」といい、張廷濟『清儀閣題跋』不分卷《又旧拓本》は「二十年前、句容の裴氏售り来る。直、銀十餅。（中略）筆力堅蒼、撲華より多く、拙巧より多し。云々」と評しているなど、総じて顔書の上乗の作とみている。翁方綱『蘇齋選碑說』は、第二位におき「此れ皆に魯公正書の上品」と註している。

(708) 元次山碑 次山は元結の字。《元結墓碑》ほかの称がある。唐・大曆七年（七七二）、河南省魯山県北郊の俗に青条嶺の墓前にあるという（畢沅『中州金石記』卷三参照）が、現状は不明である。碑石は八尺×三尺九寸、厚さ一尺一寸五分（『金石萃編』卷九八）。四面刻で、陰陽ともに一七行、両側各四行、行三三〜三五字。顔真卿の撰書。元結の頌徳碑で、文は『顔魯公文集』巻四に収めている。

この書に関しては、つとに北宋の朱長文『続書断』巻上に「（前略）碑刻多しと雖ども、而れども体製は未だ嘗て一ならざる也。蓋し其の感ずる所の事、会する所の興に随うならん。善書者、以て観て之を知る可し。故に中興頌を觀れば、則ち閔偉発揚、其の功徳の盛なるを状し、家廟碑を觀れば、則ち莊重篤実、其の承学の謹を見し、仙壇記を觀れば、則ち秀穎超挙、其の志氣の妙を像り、元次山銘を觀れば、則ち淳涵深厚、其の業履の純なるを見ず。云々」と評している。なお『宣和書譜』巻三の顔真卿の項には「論者謂」とし、右の朱文を要約して引いている（但し《元次山銘》を《元魯山銘》に誤る）。翁方綱『蘇齋選碑說』は第五位に据え、これまた「正書の上品」と品等している。

〔二〇〕自唐太宗晉祠銘<sup>(709)</sup>。以行書入石。唐初若陸柬之<sup>(711)</sup>。若高正臣<sup>(712)</sup>。皆不

見有正楷石刻。歐虞褚薛竝稱者。薛稷<sup>(713)</sup>非曜也。薛稷書昇仙碑陰外不多見。薛曜石淙諸刻<sup>(714)</sup>。尚在王知敬殷令名下矣。李邕<sup>(717)</sup>正書。惟有端州石室記<sup>(718)</sup>。其餘皆行書也。徐嶠<sup>(719)</sup>之書。惟姚懿碑存耳。阿育王寺碑徐書。已不可見。今存者是范的重書。亦行書也。徐浩<sup>(722)</sup>正書。雖有存者。特蘇靈芝類耳。所以名家遂推顏柳也。

唐・太宗の晋祠銘より、行書をもって石に入る。唐初の陸柬之の若き、高世臣の若き、皆に正楷の石刻あるを見ず。欧・虞・褚・薛の並称せらるる者の、薛は是れ稷にして曜にあらざるなり。薛稷の書は《昇仙碑》陰の外、多くは見ず。薛曜の石淙の諸刻は、尚お王知敬・殷令名の下に在り。李邕の正書は、惟だ《端州石室記》あるのみ。その餘は皆に行書なり。徐嶠之の書は、惟だ《姚懿碑》存せるのみ。《阿育王寺碑》は徐の書なるも、すでに見るべからず。今存するものは是れ范的の重書にして、亦た行書なり。徐浩の正書は、存するものありと雖ども、特だ蘇靈之の類のみ。所以に名家には遂に顔・柳を推すなり。

(709) 太宗 唐第二代皇帝。姓は李、諱は世民。高祖（李淵）と母の太穆順聖皇后竇氏の次子。五九八―六四九年、在位六二六―六四九年。唐三〇〇年の基礎を固め、また後世「貞観の治」と頌えられるその行政については、諸書に詳しいので略につくが、書の面についていえば、唐朝草昧の際にあって、書マニアといふべき帝王は、唐代の歴史上例をみない。貞観六年における御府所蔵の鍾繇・王羲之らの書蹟は、一五一〇巻に達した（『法書要録』巻四「唐朝叙書録」）が、ことに王羲之の書に心酔し、史臣に撰述せしめた『晋書』

の陸機・王羲之の伝のみは、その論贊を自ら草したといわれる。また王書へ蘭亭序・喪乱帖・孔侍中帖・寒切帖・遠宦帖その他の名蹟は、馮承素らの搨書手に精巧な搨本を作らせたが、ことに殉葬せしめた蘭亭序真蹟入手にまつわる話は「賺蘭亭」の小説仕立てとなり語りつがれるように、王羲之を書聖の座に押し上げたのは、太宗その人である。

一方、虞世南・歐陽詢・褚遂良という書の名人を側近とし、宮中に設けた弘文館では虞世南・歐陽詢を学士に任じ、貞観元年(六二七)には、五品以上の文武官の子弟で、書の素質がある者二四人を選び、楷法を教授せしめ(『大唐六典』卷八二)、その後十数年のうちには書を善くする者が弘文館にあいついで入ったという(『唐朝叙書録』)。一方、科挙における吏部試ではとくに「身・言・書・判」が銓選の規準とされた。この「書」における楷法の重視は、初唐期における楷書の普及と名手を輩出した大きな要素で、これまた太宗の施策によるものである。

太宗自身も学書に努めたようで、臨書についても、「吾、古人の書を臨するに、殊に其の形勢を学ばず。唯だ骨力を求むに在るのみ。其の骨力を得るに及び、而して形勢自ら生ずる耳。然れども吾の為す所、皆に先ず意を作す。是を以て果して能く成る也」(『唐朝叙書録』)というように、いわゆる意臨により、原蹟の骨力を撰ることを重視している。その典範を王羲之においたことは『晋書』卷八〇王羲之の論贊によって窺えるが、また許敬宗の証言もある。即ち太宗が龍朔二年(六六二)、遼東の諸將に与えようとした書を見せられた許敬宗は「魏晋以後、唯だ二王を称するのみ。然れども逸少は多力にして妍少なく、子敬は多妍にして力少なし。今、聖跡を観るに二王を兼絶す。鳳翥り、鸞廻るがごとく、実に古今の書聖也」といい、王法に私淑したことを示唆している。刻帖には『戲鴻堂帖』卷二の『屏風書』・『晚来腫勢帖』、『淳化閣帖』卷一の『兩度帖』・『三五日帖』等一八帖があるが、いずれも真面目はうかがえない。しかしその『晋祠銘』・『温泉銘』の石刻によつて、書法の根底に王法が見てとれるが、また「骨力を得れば形勢自ら生ず」という気宇悠大な太宗の境涯を示している。伝は『旧唐書』卷二・三、『新唐書』卷二、『宣和書譜』卷一、中田勇次郎『中国書人伝』ほか。

(710) 晋祠銘 太宗の撰書。貞観二年(六四七)刻。いまも山西省太原市の

晋祠内「貞観宝観亭」内にある。額下の碑身は一九四×一二一・五cm。方跌螭首。額は陰文の飛白体三行で「貞観廿年正月廿六日」と題し、碑文は、行書で二八行、滿行五〇字、全文一二〇三字である。なお碑陰には臣僚七人の官銜名を刻している。碑文の内容は、太原で父李淵と兵を起した際に、ここ唐叔虞の神廟に戦勝を祈願したが、唐の建国が成つてこの地を訪れ、神恩に謝し、并せて唐朝の繁栄を祈った歌頌である。現状は改刻のため、字跡の点画は崩されている。なお左傍に清の乾隆三十七年(一七七二)楊增重刻の一石(碑身二〇五×一二九・五cm)が並立しているが、螭首および題額部の形制は原石と異なる(『中国の書・史跡と博物館ガイド』一一五頁参照)。

この書風について、楊守敬は「太宗の書法は、直ちに山陰の堂奥に入る。而れども此の碑は殊に佳ならず。蓋し石質の悪劣なるに因り、鋒芒全て殺げ、已に真面目を失へるならん。本より宜しく録すべからざるも、此の碑、世に盛行せるに因りての故に、之を弁ず。云々」(『平碑記』卷三)というのは、剣過の甚しい後拓本に拠つての評で、いま手近にみられる『書跡名品叢刊』の明拓本をみれば、楊守敬が「絶えて筆力を以て主と為し、分間布白は何事を為すかを知らざれども、而も雄厚渾成、自ら一筆として度を失なう無し」という評が首肯される。

なおこの碑は行書碑の濫觴であるが、額字の飛白もいまみることで最も古い遺例である。楊守敬は前文につづけて「飛白の法、伝わらざれば、此の額は宝とするに足る也」と指摘している。太宗の飛白については、『唐朝叙書録』に「(貞観)十八年二月十七日。三品已上を召し、上、宴を玄武門に賜る。太宗、筆を操りて飛白書を作る。衆臣、酒に乘じ、太宗の手中に就きて競い取る。散騎常侍・劉洎、御牀によつて手に引き、然る後之を得。其の得ざる者は威な称す、洎御床に登れるは、罪死に当る、請う以て法に付せんと。太宗笑つて曰く、昔聞く、婕妤は輦を辞すと。今は常侍の登牀を見る」とあるが、飛白書はこの後に一種の權威の象徴とも見なしたか、中宗の『大唐紀功頌』題額、武則天の『昇仙太子碑』題額も、さらに裝飾化した飛白書で題しているし、中宗の『賜盧正道勅』、武則天の『昇仙太子碑』碑文、睿宗の『景龍觀鐘銘』等に飛白体の書法がまみ用いられている。ちなみに臣僚の飛白体例としては、一九七二年、陝西省礼泉県の昭陵陪冢出土の『尉



遅敬德墓誌（六五九年）の蓋題が知られるのみである（『文物』一九七八年—5、『中国新出土の書』一六四頁参照）。

(711) 陸柬之 註(477)前出。

(712) 高正臣 註(478)前出。

(712) 薛稷非曜 薛稷・薛曜とも註(339)前出。

(714) 薛曜石淙諸刻 直接には〈夏日游石淙詩〉をさす。河南省登封県告城鎮の東約3kmの石淙河の北岸に刻されている摩崖書である。現存するらしいが近年の報告をみない。『金石萃編』巻六四によれば「高さ一丈九寸、広さ九尺七寸、三九行、毎行四十二字、分ちて三截と為す。正書。云々」という。久視元年（七〇〇）、武則天が太子と臣僚を従え、この地に宴遊したおり、唱和した七言詩一七首と序を摩崖刻したもので、末に「大周久視元年、歲次庚子、律中蕤賓、十九日丁卯。左奉宸大夫・汾陰県開国公男・臣薛曜。奉勅書」とある。翁方綱の『復初齋文集』巻二二に一文があるが、書法にわたる格別のことはいっていない。

この書風について、盧文弨は「(前略)曜の書、瘦藤の如く、其の頓折の処は腫節の如し。書家に在って、又別に一体なり。其の字は率ね武後の造る所に依る。云々」といひ（『金石萃編』引『抱經堂文集』）、楊守敬は〈秋日宴石淙序〉を評して「(前略)書法瘦勁にして奇偉、郭蘭石、宋・徽宗の瘦金の祖為りと謂う。良に是也。曜の筆力精勁なること乃ち尔り。唐人は多く嗣通（薛稷）を称し、而して曜に及ばず。豈に亦た幸有り不幸有る耶。然れども当時の諸臣、工書の人に乏しからざるに、独り曜をして筆を執ら令むなれば、則ち固より重く之を推せり矣。千載の後、此の碑巍然たり。而れども嗣通の作る所は、一も存する者無し。又幸有り不幸有り矣」と評している。この書法のもとづくところは、褚遂良であろうが、この骨力峻峭で腫節の誇張は、前後に類例がなく、独創の書風であって、楊守敬の指摘するよう、徽宗のいわゆる「瘦金体」の淵源であろう。ちなみに盧文弨がいう「依武后所造」の字とは、則天文字をさし、その一九字（『宣和書譜』巻一参照）中、一二字が使われている。

なお「石淙諸刻」というのは、薛曜の書と見なされている大足元年（七〇一）の〈秋日宴石淙序〉を頭においてのことである。この摩崖は、石淙の南

崖に「高さ一丈八寸、広さ六尺三寸。二十五行、四十一字。正書」されたものをさす。ただ漫漶が早くからすすんでおり、書者の名は欠損しているため、翁方綱は、〈秋日〉と明言しなかったのであろう。畢沅は〈夏日游石淙詩序〉と似た書風だから薛曜だろうという（『中州金石記』巻二）。

(715) 王知敬 生歿年不詳。河南省河内（一説に洛陽）の人。太宗の貞観中に校書郎、武則天のとき麟台少監となった。また太子家令に官したこともあるため、王家令と称される。書はことに題署を善くしたことで殷仲容とは「双絶」といわれ（『述書賦』註）たが、武則天は殷仲容に資聖寺の額、王知敬に清禅寺の額をそれぞれ題署せしめ、ともに独絶と称された（『述書賦』巻下寶篆註）。『書断』巻下・能品にその書を評して「草及び行に工にして、尤も章草を善くし、能に入る。膚骨兼有し、戈戟以て自ら衛るに足り、毛翮以て飛翔するに足る。大略宏図を冀み、霄を摩し寇を殄すは、則ち未だ奇とせざるが若き也」と讚美している。また鑑識にも長じたのか、貞観一三年（六三九）、内府に購求した王羲之の書蹟を褚遂良とともに鑑定したという（『法書要録』巻四、張懷瓘『二王等書録』）。

その書〈李靖碑〉（また〈衛景武公碑〉という）は、頭慶三年（六五八）立碑の昭陵陪家碑の一で、いま昭陵博物館の第二室に置かれている。明の趙頡『石墨鐫華』巻二は「知敬の書は、当時に在りて固より自ら知名なり。評者謂う。房玄齡・殷仲容と伯仲すと。余、此の碑の逾美を觀るに、真に是れ歐陽率更・虞永興の匹敵也」と評し、清の孫承沢『庚子鎖夏記』巻七は「其の書の逾美 愛す可く、精妙絶倫は虞・褚に遜らず」というなど、歐陽詢、虞世南、また褚遂良の影響をほめかす説が多い。がむしろ、隋代で昇華した南北融合の書流に位置する書風であろう。伝は『旧唐書』巻一九二王友貞伝附、『新唐書』一九六。『書史会要』巻五ほか。

(716) 殷令名 生歿年不詳。河南省淮陽の人。高宗、武則天のとき、ことに書人として名があった。殷氏と顔氏は姻戚関係を結び、殷令名の女は顔勤礼に嫁し、顔真卿の祖父である昭甫をもうけている。

書は唐の李嗣真『書後品』に、王知敬より一等下される『下上品』中に「殷氏は声を題署に擅にす。代々其の人有り」と特に題署を称揚している。宋の趙明誠『金石錄』巻二三（裴鏡民碑）に「殷」令名と其の子の仲容と

は、皆に能書を以て名を一時に擅にす。而れども令名の遺蹟の存する者は、唯だ裴鏡民碑のみ。筆法精妙にして、欧・虞に減ぜざるも、惜しむらくは多見せず」といひ、裴鏡民碑を特記するが、この碑については、翁方綱『復初齋文集』卷二三に「貞觀十一年（六三七）李百葉文を製し、殷令名書す。是の碑、宋人『宝刻類編』に見え、筆法精妙にして欧・虞に減ぜずと云う。予、初め此の語を見て窃かに意う、唐初の書脈は、宜しく此れを借りて以て源を尋ぬべき也」と。碑は山西の聞喜に在り。因りて人に託して之を拓せしむ。其の書は誠に能く永興（虞世南）率更（歐陽詢）の秀色を具う。然而ども唐人虞・欧を学ぶ者尚お多し。豈に能く遽に方駕を希わん耶。云々」とあつて、欧・虞とはまた別格をそなえらるとみている。これまた南北書法を融合した隋風の一派流を襲ぐ書風である。

ちなみに、著録において、王知敬と並称するのは殷令名より、註(715)にみるとおり子の殷仲容である。翁方綱はもとよりこのことは承知で、ここに殷令名と並称するのは、〈李靖碑〉と〈裴鏡民碑〉を頭においてのことである。

(717) 李邕 註(688)前出。

(718) 端州石室記 註(689)前出。

(919) 徐嶠之 生歿年不詳。字は惟嶽、浙江省紹興の人。師道の子、徐浩の父である。官は将作少監、趙州刺史となつた。『宝刻類編』卷三には、徐嶠之の碑九種を挙げてゐるが、すべて開元年間の作であるから玄宗期に活躍した人であろう。宋の朱長文『続書断』卷上《妙品》に「正書は妙に入り、行書は能に入る。適美にして楷法有り。姚母之墓・湖州孝義寺碑は、皆に合作なる者也。嘗て書六体を進むに、手詔もて答えて曰く、進書を得、甚だ観覽す可し。廻鸞顧鵠、墜露凝雲のごとく、古人臨池懸帳の妙と雖ども、何ぞ以て此れに過ぎんと」とある。

(720) 姚懿碑 開元三年（七一五）の刻。碑は河南省陝州にあるというが、現存の有無は確認されない。『八瓊室金石補正』卷五〇によれば「高さ五尺八寸、広さ三尺九寸。廿九行、行五十八字、字径八分。正書。額拓を失す」といふ。胡皓の撰、徐嶠之の書である。前註にも触れたように、徐嶠之の書碑は、宋代一一種をみたが、いまはこの碑のほかに〈姚彝碑〉（開元五年、

正書）を遺すのみである。姚彝碑を畢沅『中州金石記』卷二に「疏秀方整にして、初唐の虞・褚の遺意有り」といふが、この碑の書風と全く同じ姚懿碑を清末の葉昌熾『語石』が「嫵媚と雖ども俗韻有り」と評している。翁方綱『復初齋文集』卷二三「跋徐嶠之書姚文獻碑」に「姚氏の祖と孫の二碑は、皆に徐嶠之の書なり。而して姚文獻（懿）の此の碑は、又にも其の孫の二碑の上在り。其の行筆は莒公碑と相い近し。蓋し皆に褚（遂良）より出ずる也。然れども此の碑は、又にも体虞・欧に近きの処有り。蘇（軾）の詩に、徐家父子（嶠之・浩）亦た秀絶、字外に力を出し中に稜を蔵す、と。唐初の字体は、欧・虞其の先を開く。褚公の後、自ら必ず薛（稷）を以て正脈と為す。而して徐氏父子の名の特に著わるる者は、正に其の欧・虞の骨格を参用せるを以て也。徐嶠之の書せる阿育王碑は既に亡び、惟だ此の姚氏二碑のみ。而して文獻碑は更に高秀為り。唐楷を精研せる者、必ず是に於て津を問え矣」と高く評価している。が過褒の気味で、葉昌熾の見解が妥当であろう。

(721) 阿育王寺碑徐書已不可見。今存者は范的重書 宋の陳思『宝刻叢編』卷一三「唐阿育王常住田記」に、『復齋碑録』を引き「唐の万斎融の撰、范的行書。大和七年十二月、刺史・于季友重立す。元の碑は乃ち徐嶠之の書なり」とあるのがそれ。拓未見。范的の重書の〈阿育王寺常住田碑〉は『金石萃編』卷一〇八に「碑は高さ一丈三寸、広さ五尺二寸、後記及び詩二首を連ね、共に三十七行、行六十八字。行書。郵県に在り」とあり、碑文の前に「旧碑、是前□趙州刺史・徐嶠之書／前秘書□正字郎・万斎融撰／順陽范的書并篆額□韓持鐫」の款識がある。この范的の重書碑を、翁方綱『復初齋文集』卷二三に「碑尾の小字に云う、石有圯者日□柳音と。其の義を詳するに、当に是れ旧碑に脱去する所の字なるべし。而して今考う可からず矣。徐趙州（嶠之）大和（八二七）三八年）を去る、時に甫めて百年。而して旧碑の壞は、尚お大和の前に在り。蓋し原文甚しくは闕泐無し。而れども僧の惠印は其の旧文を録すなれば、則ち徐の書を摹拓せるに非ざらん矣。范的は鄭樵の『通史』及び、宋人の『宝刻類編』に据れば、皆に書する所の諸碑を載す。蓋し時に書名有る者ならん。其の書格を觀るに、略ぼ懷仁の〈集聖教〉に仿い、而して天骨勁逸は、故より当に前良に忝ずる無かるべき也。云々」といつている。

范的の為人については、〈阿育王寺常住田碑〉の于季友の「後記」に「会  
たま刻・越の間に陰逸の士有り、范的と曰う。業文功書せるも、未だ時に遇  
わず。常に雲水の問を萍泊す。云々」とあるほかには記録を見ない。『宝刻  
類編』巻五に六碑を掲げているが、この碑のほかは亡佚した。

(722) 徐浩 七〇三〜七八一年、字は季海、諡は定、浙江省結興の人。徐嶠之  
の子で、少くして明經に拔擢され、肅宗が即位して中書舍人に拝され、詔令  
詰冊は多く浩の手になり、華麗な修辭にあわせ見事な筆跡であったので、帝  
の恩寵を得た。代宗のとき吏部侍郎となり、会稽郡公に封ぜられた。徐会稽  
とも称されるゆえんである。徳宗のときに歿したが、その間、何度か失脚し  
たこともある。

書は祖の師道、父の嶠之の家学を承け、とりわけ楷・行・草書にすぐれ一  
家を成した。『新唐書』本伝に「嘗つて四十二幅屏を書すや、八体皆に備わ  
るも、艸隸尤も工なり。世其の法を状して曰く、怒れる豹の石を抉り、渴  
ける驥の泉に奔るがごとし」といっている。また宋の朱長文『続書断』巻  
上は「鋭を内に識し、華を外に振う。君子の器有り焉」と評し《妙品》に列  
している。が米芾『海嶽名言』は「(前略)開元以来、明皇(玄宗)縁り字  
体肥俗なり。始めて徐浩有り、以て時君の好む所に合う。経生の字も亦た此  
れ自り肥ゆ。開元已前の古氣、復た有る無し矣」といい、また「唐人、徐浩  
を以て(王)僧虔に比すは、甚だ当を失す。浩は大小一倫にして、猶お吏の  
楷のごとき也。僧虔・蕭子雲は鍾(繇)の法を伝え、子敬(王献之)と異なる  
無く、大小各おの分有りて、一倫あらず。云々」といい、さらに「欧・虞・  
柳・顔は、皆に一筆書也。安排工を費やし、豈に能く世に垂れんや。李邕  
は子敬の体を脱すも纖濃に乏し。徐浩は晩年力過ぎ、更に骨氣無し。云々」  
と手きびしいのは、王法に抛り平淡天真を旨とする米芾の書理念に根ざした  
批判で、少しく偏っている。が、現代からみれば、当時に名のあつたほどで  
はない。その書に〈朱巨川告身〉〈不空和尚碑〉〈謁禹廟詩帖〉〈宝林寺詩帖〉  
(以上楷書)、〈崇陽觀聖德感応頌〉〈張庭珪墓誌〉(以上隸書)がある。また  
書論に『古跡記』『論書』ほかがある。伝は『旧唐書』卷一三七、『新唐書』  
卷一六〇、『宣和書譜』卷三ほか。

(723) 蘇靈芝 生歿年不詳。陝西省武功の人。玄宗朝から肅宗の至徳年間に、

承奉郎、守経略軍曹参軍に官している。書はことに行書にすぐれた。『宣  
和書譜』卷一〇に「(前略)行書は二王の法有りて、頓放を成就し、当に徐  
浩と雁行すべし。戈脚は復た(虞)世南の体に類し、亦た臨倣に善き者なり  
唐人の翰墨中に在りて、固より得易からず。蓋し是れ衆善を集め、而して一  
家を成す者也」という。『石墨鐫華』卷三に蘇靈芝の〈田仁琬德政碑〉を挙  
げて「大都、源は(集王)聖教」に出ず。而れども肥媚多為りて、尚お王  
縉の書せる〈王清源公碑〉に及ばず。而して宣和書譜には、之を季海(徐浩)  
伯施(虞世南)に擬す。季海は論するに足らざれども、但だ恐らくは伯施の  
み地下に於て人を笑う」という。また清の梁同書『頻羅庵論書』は「唐碑中、  
蘇靈芝の一派は最俗なり」と貶している。その書に〈夢真容碑〉〈易州鉄像  
頌〉ほかがある。

(724) 顔柳 顔真卿と柳公権。顔は註(470)、柳は註(348)前出。

〔二一〕於唐楷求晉法。虞歐褚三家而已。虞書高秀凝正。初無用圓之說。  
其謂虞書純用圓者。特狃於五代重刻廟堂碑之誤。不得謂虞書是圓體。固  
已歐亦非純用方體。化度淳古淡遠。醴泉淵渾圓勁。不待言矣。至皇甫碑。  
全用險勁。自是本色如此。特學者由此先立閒架可耳。惟是虞永興用筆。  
每前輕虛。而後漸著力。歐陽率更。則前著力而後漸輕虛。此其天性如此。  
亦非其有兩詣也。惟褚書實有二種格意。<sup>(725)</sup>大約其中年之作。方矩凝正。而  
晚年漸多帶行押。此其大較也。<sup>(726)</sup>近日王若林乃謂。孟法師碑中年之作。不  
及其晚年書聖教序記之神妙。此說最足貽誤後學。且即使其晚年超妙入神。  
而爲學者計究。<sup>(727)</sup>以效其平正之矩。爲適道之大路。王若林之論。正與寶象  
述書賦之說相反。吾豈敢舉寶賦之說。以咎褚公。顧此後人不善言褚書。  
爲褚公之累耳。褚書關係上下古今風會。<sup>(731)</sup>不但開有唐一代之書。抑且開導  
宋賢以後。所以論褚書。不揣其本而齊其末。最爲藝林之大患也。

唐楷に於て晋法を求むれば、虞・欧・褚の三家のみ。虞の書は高秀  
 凝正、初め円を用うるの説なし。それ虞の書純ら円を用うと謂う者は、  
 特だ五代の〈重刻廟堂碑〉に狂むの誤りのみ。虞の書は是れ円体と謂う  
 を得ず。固よりすでに欧も亦た純ら方体を用うるにあらず。〈化度〉は  
 淳古淡遠、〈醴泉〉は淵渾円勁なること言うを待たず。〈皇甫碑〉に至  
 りては、全て險勁を用う。自らはれ本色此のごとし。特だ学ぶ者はこれ  
 によつて先に間架を立てば可なるのみ。惟だ是れ虞永興の用筆は、毎に  
 前に軽虚にして、後に漸く力を著く。欧陽率更は、則ち前に力を著け後  
 に漸く軽虚なり。これその天性此のごとし。亦たそれ両つながら詣る  
 ことあるにあらざるなり。惟だ褚の書のみは実に二種の格意あり。大  
 約その中年の作は、方矩凝正なれども、晩年は漸く多く行押を帶ぶ。  
 これその大較なり。近日、王若林乃ち謂う、「孟法師碑は中年の作にし  
 て、その晩年書せる聖教序記の神妙に及ばず」と。この説最も後学に  
 誤ちを貽すに足る。かつ即使その晩年の超妙入神にして、学ぶ者計究  
 せるがために、もつてその平正の矩を效い、道の大路に適うとなさば、  
 王若林の論は、正に寶泉の『述書賦』の説と相い反す。吾れ豈に敢て寶  
 賦の説を挙げて、もつて褚公を咎めん。願うにこれ後人善く褚の書を  
 言わざるは、褚公の累いなるのみ。褚の書は上下古今の風会に關係す。  
 但に有唐一代の書を開くのみならず、抑そも且に宋賢以後を開き導かん  
 とす。所以に褚の書を論ずるに、その本を揣らずして、その末を斉うる  
 は、最も芸林の大患なり。

(725) 高秀凝正 ここで。内面的な高さと居住いの正しさをいうのだから、  
 書評としての用例をみない。

(726) 格意 註(704)前出。

(727) 大較 大概というほどの意であろうが、これまた用例をみかけない。

(728) 王若林乃謂 王若林は王澍をさす。註(436)前出。以下の「孟法師……神  
 妙」の二一字、出典未詳。後考に俟つ。

(729) 計究 見かけない語である。あるいは対策につぎる意の「計窮」に同じ  
 か。

(730) 述書賦之説 註(509)前出の「澆璃後字」をさす。

(731) 風会 見かけない語である。風気の意か。

「(二二) 唐碑得褚法者。魏栖梧善才寺碑最妙。世無二本。惟涿州馮文敏  
 所藏宋拓舊本。文已不全。不知。何時裝者。翦取其文内之字。移裝於題  
 下。曰河南褚遂良書。後有馮文敏手跋。竟指爲褚書矣。此帖王若林有跋。  
 辨河南是褚之封爵。非河南人。又摘其内元開二字。翦裝乃開元二字倒置。  
 以明其是魏書。若林此跋最明白。乃又有人惡其言非褚。廢去此跋。而存  
 馮跋。予特爲辨正之。此帖今在臨川李都諫宗瀚處。外人亦莫得見也。狄  
 知慈碑。得褚法最正。其碑殘闕。不知書人姓名。雖石尙存。而拓者亦罕。  
 就今所習見者。惟敬客書塼塔銘。有褚之秀韻。然使學者日於此求褚法。  
 將與董文敏誤執經生書靈飛經。目爲鍾紹京者。何以異乎。若林又謂。同  
 州聖教序記。似孟法師碑。不知褚書聖教。自以雁塔本在同州之上。何得  
 謂孟法師碑似之。近日江南有人。重刻孟法師碑翻本。直似鬱岡齋所刻兒  
 寬贊。若必謂聖教取同州本。則孟法師碑。宜取近日江南翻本矣。若必謂  
 靈飛經是鍾書。其弊必至於快雪堂之樂毅論爲褚書矣。褚書之眞既不可見。

又彼此等調説。起而傳合之。一褚書之不明辯。而其害於書學。害於學術人心。莫可底止。吾安能以勿辨。

唐碑に褚法を得るもの、魏栖梧の〈善才寺碑〉最も妙なるも、世に二本なし。惟だ涿州の馮文敏所蔵の宋拓旧本も、文すでに全からず。知らず、何れの時にか装せる者、その文内の字を翦取して題下に移装し、「河南褚遂良書」と曰えるかを。後に馮文敏の手跋ありて、竟に指して褚の書となす。この帖王若林の跋ありて、河南は是れ褚の封爵にして、河南の人にあらざること、又はその内の元・開の二字を摘り、翦装には乃ち開元二字に倒置するを弁す。もつてその是れ魏の書なるを明らかにせるは、若林のこの跋に最も明白なり。乃ち又人にありてその褚にあらざると言うを惡み、この跋を廢去して馮の跋を存す。予、特にためにこれを弁じ正す。この帖は今臨川の李都諫宗翰の処に在り。外人は亦た見るを得ざるなり。〈狄知懸碑〉は、褚法を得ること最も正しきも、その碑は殘闕し、書人の姓名を知らず。石は尚お存すと雖ども、拓すること亦た罕なり。今習見するところのものに就きては、惟だ敬客の書せる〈塼塔銘〉のみ褚の秀韻あり。然れども学ぶ者をして日にここに於て褚法を求めしむれば、將に董文敏誤つて經生の書せる靈飛經を執り、目して鍾紹京となせるものと何をもつてか異ならんや。若林又「同州聖教序記は孟法師碑に似たり」と謂う。褚の書せる聖教は、自ら〈雁塔〉本をもつて〈同州〉の上に在るを知らず。何ぞ〈孟法師碑〉をしてこれに似ると謂うを得んや。近日、江南に人あり、〈孟法師碑〉の翻本

を重刻し、直ちに鬱岡齋刻するところの〈倪寬贊〉に似たりとす。若し必ず聖教には〈同州〉本を取ると謂わば、則ち〈孟法師碑〉は、宜しく近日の江南翻本を取るべし。若し必ず靈飛經は是れ鍾の書と謂わば、その弊必ず『快雪堂』の〈樂毅論〉に於ても褚の書となすに至らん。褚の書の真はすで見ざるべからず。又此れ等の調説を被り、起してこれに伝合すれば、一て褚の書の明弁ならずして、その書學に害あり、學術人心に害あること底止すべきなし。吾れ安くんぞよくもつて弁ずる勿らんや。

(732) 魏栖梧善才寺碑 註(526)前出。また「(一六)参照。

(733) 馮文敏 文敏は馮銓の諱。一五九五—一六七二年。字は伯衡、号は鹿庵、河北省涿州(涿県)の人。明の万曆四一年(一六一三)の進士で、戸部尚書に至り、清に仕えて礼部尚書となり太保兼太子太師を加えられた。書名はなほが書画の收藏家として名がある。ことに王羲之の〈快雪時晴帖〉を入手したこと、斎号を快雪堂とし、また『快雪堂法書』五巻の集帖を撰集した。なおこの集帖については、宇野雪村『法帖』、容庚『叢帖目』一に詳しい。伝は『清史稿』巻二四五、『清史列伝』巻七九。

(734) 馮文敏手跋 三井聴冰閣現蔵で、近著『善才寺碑——聴冰閣墨宝・原色法帖選』の巻後にみえる。行草書三行で「唐の褚中令(褚遂良)は、書を以て世に名あり。禊帖(いわゆる褚摹蘭亭序)等は、皆に之を耳目の間に表わすも、独り此の善才寺碑のみは、一二の見あらず。況んや此の本の精彩奕々なるを乎。其れ之を保護せよ」とある。

(735) 此帖王若林有跋 王若林は王澍をさす。註(41)前出。馮銓から李宗翰に渡り、いま聴冰閣に帰す〈善才寺碑〉孤拓本には、註(526)にも触れたように、巻首に翁方綱の長跋と、巻後に前註の馮跋につづいて阮元の二跋および李宗翰の跋をみるだけで、王澍の跋はない。翁跋の首に「王籟林跋云」と明記しているところから、割去されたものか。ただし王澍『虚舟題跋』巻六「唐魏

栖梧善才寺碑」には、下文の意を述べている。

(736) 李都諫宗翰 李宗翰については註(583)前出。

(737) 狄知遜碑 河南省洛陽にあるというが、いまの所在は確認されない。著

録の初見は、趙明誠『金石錄』巻四で、「書撰人の姓名は残欠す。載初元年正月」という。『金石萃編』巻七九は「碑は僅かに上載を存するのみ。連額高さ六尺七寸、広さ四尺七寸。三十一行、字数考うる無し。正書。篆額」とあって、按語に「右邛州刺史狄公碑、諸家未だ発明あらず。文中に嫡子故中書令尚書右僕射贈司空梁国文惠と有り、知る、仁傑の父為ること疑い無きを。(中略)此の碑、立石の年月無し。伝に称す、(狄)仁傑は、中宗 正に返りて司空を追贈され、睿宗 梁国公を追封すと。碑に已に嫡子の司空・梁国公の語有るなれば、是れ当に睿宗の時に立つ。銘序の末を玩するに、惟れ孝將に父の志を成さんとす、云々と有り。是れ梁公の卒後、其の子 梁公の志を体して此の碑を追立せる也。梁公の子は三人なれば、碑称する所の惟れ孝なる者は、是れ何人なるやを知らず矣」といい、『金石錄』の載初元年(六八九)立碑説を否定し、睿宗のとき(七一〇—一二二年)とする。敵可均『鉄橋金石跋』巻二は、王昶の説を襲ぎ、追立者は、碑文に「孝孫の鴻臚卿・光嗣」とある狄仁傑の子、光嗣とする。

(738) 敬容書埵塔銘 唐の敬客の(王居士埵塔銘)をいう。敬容の経歴は全く不詳で、この一作により名を伝える。王居士埵塔銘は、顕慶三年(六五八)の刻で上官靈芝の撰である。顧炎武『金石文字記』巻三には「近ごろ終南山の梗梓谷の土中より出ず」とあり、明末の出土と思われる。その後の金石著録を総合するところ、初出土の時は一角を欠くのみであったが、ほどなく三塊に断裂し、さらに四断石から七断石となり、道光年間(一八二一—五〇)に、うち二塊が佚したという。朱楓の『雍州金石記』巻三は「此の碑、世に盛行し、摹臨翻刻せる者、十余処に下らず。云々」というが、原石拓は極めて少ない。『金石萃編』巻五二に「埵の大きい二尺許。縦横各おの十七字。正書」とあるのは翻刻本よっての記録である。即ち同書の按語に「此の銘の翻刻二本有り。一は長州の鄭廷暘嶠谷の臨為り。一は呉県の錢湘思賛の書為り。皆に臨摹の善本にして、鄭は媚秀、錢は瘦勁たり。原刻は破裂すなれば、則ち此の二本、皆に宝とす可き也。余は二君と善し。故に其れ此の銘を

詳しくするを得。原刻は高広若干幾行 行幾字なるかを知らず。槌碎の拓本を以て之を較ぶるに、周に辺匡有りて、大花葉 幾寸許。首行の末は穎邁の二字にして、此を以て之を準とせば、当に是れ毎行十七字、字径は八分。上下に二分を占むるなれば、則ち是れ高さ約二尺也。前の一行は是れ標題及び撰書人の姓名なり。銘序は二百十一字、銘詞は四十八字。之を推せば、当に序は十三行、銘は三行為るべし。之を総計して十七行、行十七字を得たり。其の埵為る、蓋し方二尺ならん。云々」とある。

この書評としては、王澐『虚舟題跋』巻一〇に「(前略)敬客の名は時に頭われず。然れども其の書法は、特に瘦勁為りて、大いに褚公(遂良)に類す。則ち知る、唐世の能書の人、多く巨公の為に掩わるるを免かれざる耳。云々」といい、翁方綱『復初齋文集』巻二四に「(前略)書法は全て褚の意を得、唐楷の最も精緻なる者なり。褚書の妙は、乃ち上に在りては隸古に通じ、欧・虞に証合す。後に作者有るも、未だ其の冲和の度を失なうを免がれず。此の碑は、婉潤秀整にして、已に後人の法門を開くと雖ども、而れども尚お未だ河南(褚遂良)の規矩を失なわず。旧搨は纒かに一、二字を泐すのみ。斯れ宝と為すべき耳」といい、錢泳『履園叢話』は「(前略)片紙隻字を得て、猶お之を珍蔵して置かざる者は、其の秀勁法有りて、欧・褚の間に在るに因るの故に、学ぶ者は紛々として遂に名碑と為す。見る可し、古人の用筆の一挑一擡、皆に法度の尋ぬ可き有る也」というなど、貶詞をみない。

(739) 董文敏 文敏は董其昌の諡。註(381)前出。

(740) 靈飛經 『渤海藏真帖』巻一また『滋惠堂墨宝』巻三に刻入され、一六六行、毎行一七字。末に細楷で「大唐開元廿六年、大歲戊寅二月己亥朔一日、大洞三景弟子玉真長公主、奉勅檢校写」の款記があるが、書者の姓名をみない。

『滋惠堂墨宝』(青木香流藏影印)本の巻後には、泰定四年(一三二七)の趙孟頫の跋(又題)とあるが、この一跋のみ)と董其昌の跋(後半欠失)があり、『渤海藏真帖』本の巻後には、董其昌の万曆二十一年(一五九三)の一跋と庚戌(三八年・一六一〇)の二跋がある。董其昌の庚戌の前跋には、万曆三五年に靈飛經の原蹟を呉廷より入手したことをいうが、この書がまた、

唐の鍾紹京の書であることをいう。庚戌の後跋にはさらに、この書を鍾紹京と定めたのは、袁清容（元の袁桷であろう）であるといっている。

しかし唐の経生の書とする説がある。王澐『竹雲題跋』卷三「靈飛経は宋元自り来（このかた）著れず。有明の万曆中に至り、始めて時に名有り。董思白（其昌）は深く此の書を愛し、目して鍾可大（紹京）と為す。法華経を写さんと欲する毎に、必ず凝視し時を計りて後、之を書す。余按ずるに後款に大洞三景弟子玉真長公主と称すも、可大の生平、未だ斯の号有らざれば、則ち可大の書に非ざるを知る可し。余、唐の経生の書せる三弥部論を淮陰に得たり。此の経の字形筆法と、毫髪も異なる無きも、其れ鍾可大に非ざること疑い無し。云々」というのがそれである——但し『虚舟題跋』卷八には、

靈飛経を「女郎の書」といい、この〈三弥部論〉を鍾紹京の書という——翁方綱は『竹雲題跋』の説を承けているのであろう。近人の張伯英は『渤海藏真帖』を評したなかで「靈飛六甲経の滋惠堂の刻は頗る著名なり。而れども姿媚に過ぎ、悉く松雪（趙孟頫）の法に成る。此の本の勁健は、唐人の矩度を失せず」という（『叢帖目録』一引）が、姿媚秀潤という点では、『渤海藏真帖』本もさほど変りはない。

ちなみに、渤海藏真帖の底本と思われる墨蹟残本に、アメリカの翁方戈氏の蔵する四三行本があつて『中国美術全集』書法篆刻編3に部分が掲出されている。解説によれば、かつて翁同龢が蔵したものであるという。この本と同一か否かは不明ながら『式古堂書画彙考』卷八に『敵氏書画記』を引き「鍾紹京の小楷〈靈飛六甲経〉、褚氏、真蹟。〈準提経呪〉と董玄宰（其昌）の家在り」と載せている。

(71) 鍾紹京 註(67)前出。

(72) 若林又謂 若林は王澐の号。註(43)前出。「又謂」下の「一字は、『竹雲題跋』『虚舟題跋』ともに記載はない。後考に俟つ。

(73) 重刻孟法師碑翻本 註(46)前出

(74) 兒寬賛 兒は倪に通じる。また〈倪寬伝賛〉という。『爵岡斎墨妙』所収の〈倪寬賛〉は第九に刻入するが、この底本は、いま台北・故宮博物院に蔵されている。紙本の卷子装で二四、六×一七〇、一cm。烏糸欄の方格を引き、五〇行、毎行七字で入れている。末に「臣褚遂良書」とあり、元の趙孟堅の

二跋、柳貫、鄧文原、明の楊士奇、錢溥の跋がある。この帖については、清の張丑『清河書画舫』が宋人の臨本として以来、種々の意見があるが、徐邦達氏の『古書画偽訛考弁』卷上は、衆訟を整理し、『石渠宝笈』初編に詹景鳳が「其の筆、燥にして潤ならず、天趣に乏し。筆、清勁に似たるも実は単弱なり」と評するのに左袒し、南宋人の仿書であるというのに理がある。

(75) 快雪堂之棗毅論 『快雪堂帖』卷二所収の〈棗毅論〉をいう。『快雪堂帖』については、註(40)前出。〈棗毅論〉は註(44)前出。

「二三」所以欲求虞歐褚者。求晋法而已。至宋人不甚精詣於正楷。宋人亦何嘗不由唐以溯晋。然吾嘗見宋人所著寶刻類編。極推殷令名書裴鏡民碑。云筆法精妙不減歐虞。及觀其碑。實得虞歐秀韻。而神理不逮遠矣。

此尙是唐初名家最著者。而止於如此。可見。趙子固獨推化度廟堂九成三碑。能存晋法。此千古定論也。宋人寶刻類編。不著年月名氏。即其於褚書。取草書陰符經。此越州石氏所刻。而其褚銜已不免墮入。快雪樂毅褚銜之謬誤。則此編又在越州石氏帖之後也。其殆南宋坊賈所爲乎。

虞・欧・褚に求めんと欲する所以のものは、晋法を求むるのみ。宋人に至りては甚しくは正楷に精詣ならず。宋人も亦た何ぞ嘗つて唐よりもって晋に溯らざらん。然れども吾れかつて宋人著すところの『宝刻類編』を見るに、極めて殷令名の書せる〈裴鏡民碑〉を推し、「筆法精妙、欧・虞に減らず」と云う。その碑を観るに及び、実に虞・欧の秀韻を得るも、神理は逮ばざること遠し。これ尙お是れ唐初の名家の最著なるものにして、此のごとくに止まる。見るべし、趙子固独り〈化度〉、〈廟堂〉・〈九成〉の三碑を推し、よく晋法を存せりとせるを。これ千古の定

論なり。宋人の『宝刻類編』は、年月・名氏を著わさず。即ちそれ楮の書に於ては、草書の〈陰符経〉を取る。これ『越州石氏』の刻すところにして、その楮の銜はすでに墮入を免かれず。『快雪』の〈樂毅〉の楮銜も謬誤す。則ちこの編 又に『越州石氏帖』の後に在るなり。それ殆んど南宋の坊賈のなすところなるか。

(746) 漈 漈の錯字で、また漈、遡に同じ。

(747) 宝刻類編 金石の目録で八巻。『四庫全書總目提要』巻八六、史部四二、目錄類二に要を得ている。撰人の氏名を闕き、刊記もないが、南宋・理宗朝の梓とみられる。周から五代にいたる石刻を、帝王・太子諸王・国主・名臣・釈氏・道士・婦人・姓名殘闕の八類として、各類は人名別とする。さらに時代順に碑名を列記し、その下に撰・書名・立碑年月・所在地・書体・存亡を註記している。『四庫提要』は「(前略)金石の目録は、歐陽修・趙明誠・洪适の三家以外、惟だ陳思の宝刻叢編のみ頗る該洽為り。而れども又にも多く殘佚して完からず。独り此の書のみは、蒐採は瞻博、叙述は詳明なり。鄭樵の金石略、王象之の輿地碑目に較べ、増広 殆んど数倍に至る。前代 金石著録の富なる、未だ此れに過ぐる者有らず。深く考掘審定の資と為すに足る。固より嗜古者の証を取る所也。云々」と称揚している。翁方綱『復初齋文集』巻一六・跋宝刻類編に「(前略)今、其の書を按ずるに、実に陳思『宝刻叢編』を小変して、以て檢閲に便にす。既に名臣の編卷を以てし、又に毎に書家の筆法評語に及ぶ。是れ蓋し南宋末の書坊賈人の為る所ならん。攷証の学は、南宋に至りて益ます審細を加うるの故に、其の時の坊客も亦た、多く勤め求め博く採り、学人の用を資く。云々」とみている。手近かには『石刻史料新編』正編卷二四所収の『典雅堂叢書』本がある。

(748) 殷令名 註(716)前出。

(749) 裴鏡民碑 唐の貞觀二年(六三三)、山西省聞喜県礼元鎮の裴氏祠内に建立され、いまもその地にある。碑石を陸增祥『八瓊室金石補正』卷三〇に「高さ五尺七寸、広さ二尺九寸、廿七行、行五十一字、字径八分。方格有

り。額は未だ見ず。云々」という。いま手近で見られる碑の影印『書跡名品叢刊』本の全場では、額は陽文の篆書三行で「益州總管司馬裴君碑」と題している。碑文は隋の武將であった裴鏡民の頌徳で、李百薬の撰、殷令名の書である。

この書を趙明誠『金石録』卷二三に「令名の遺跡の存する者、惟だ此の碑尔。筆法精妙、欧・虞に減ぜず」と評しているが、清代の金石学者も多くは初唐の名碑として称揚する。例えば揚守敬『平碑記』卷三は「(前略)凝遠の処は虞に似、峭健の処は欧に似、二家の勝を兼有すと謂う可し。廟堂・醴泉自りして、皆に磨泐翻刻の餘なるも、此の本は当に初唐の第一碑と為すべし。世、知る者有らば、当に余を以て偽言と為さざるべし」とまで賞讃する。ただし、新出史料によって、南北朝また隋代の書相の多様性が知られる現在では、この書風が、南朝風を基盤とする隋代の一書風の脈流を襲ぐものとみるべきで、歐陽詢・虞世南の書風に影響をうけたものとみるのは、当を得ていない。

(750) 趙子固 註(449)前出。

(751) 草書陰符経 『宝刻類編』巻二の楮遂良の目として「枯樹賦 三龕碑 孟法師碑 五言帝京篇 湖州刺史独孤延寿碑 晋州刺史裴芸碑 贈太尉房元齡碑 三藏聖教序記 草書陰符経 房元齡神道碑 小字陰符経 題度人経变相」を掲げるが、〈草書陰符経〉以下には紀年が記されていない。なお『越州石氏』本の〈陰符経〉について註(634)前出。

(752) 墮入 〈陰符経〉の末に刻入の紀年および楮遂良の官銜名の偽刻であることをいう語であるが、この語の用例を見かけない。

(753) 快雪樂毅楮銜之 「快雪樂毅之楮銜」の錯字とみて、訓下し文とする。

「二四」書必以楷爲正矩。(754) 宋後竟無楷法可追晉唐者。宋人正楷。多習顏法。第存其鄂郭耳。(755) 東坡乳母任氏墓志最佳。登州海米詩亦佳。然近今所拓。皆其重刻一石也。予於其後室竈下。別得眞石。(756) 其陰有坡書吳道子畫跋。亦妙。重刻之石。則其陰無此畫跋。不難辨也。米老竟無正楷勒於石



者。焦山有仲宣法芝米芾同觀山樵書大楷題字。其書亦仿鶴銘<sup>(761)</sup>。然相去天淵矣。他處亦有米題。非泐損則重摹也<sup>(763)</sup>。最有書名者。無過趙子昂<sup>(764)</sup>。子昂仕元。人多議之<sup>(765)</sup>。實則宜諒之不必議之也。惟楷書則全取側媚<sup>(766)</sup>。所以董思白亦目短之<sup>(767)</sup>。然董楷雖有逼古之境。而明朝楷書。自宋仲溫<sup>(768)</sup>以逮祝枝山<sup>(769)</sup>文衡山<sup>(770)</sup>孫雷居<sup>(771)</sup>婁子柔<sup>(772)</sup>。各取所長。又未知誰爲優耳。書以楷爲正。蘇米而後。逮於元明士大夫。多務行書。不甚留意正楷。是以愚於行草未嘗深論。約而論之。行書蘭亭聖教爲正。草書十七帖<sup>(773)</sup>孫過庭<sup>(774)</sup>書譜爲正。可得其大凡矣。趙文敏<sup>(775)</sup>行書。却有正鋒深厚。得蘭亭聖教神韻者。在其正楷之上。其側鋒取媚者。非趙書上乘也。

書は必ず楷をもって正矩となす。宋の後、竟に楷法の晋・唐を追うべきものなし。宋人の正楷は、多く顔法を習うも、第だその郭郭を存せるのみ。東坡の〈乳母任氏墓誌〉は最も佳なり。〈登州海米詩〉も亦た佳なり。然れども近今、拓すところは、皆にその重刻の一石なり。予その後室の竈下に於て、真石を剔得す。その陰に坡の書せる呉道士の画跋あり。亦た妙なり。重刻の石は、則ちその陰にこの画跋なく、弁じがたからざるなり。米老竟に正楷は石に勒するものなし。焦山に「仲宣・法芝・米芾同觀、山樵書す」なる大楷の題字あり。その書も亦た〈鶴銘〉に仿う。然れども相い去ること天淵たり。他処にも亦た米の題あるも、泐損にあらざれば則ち重摹なり。最も書名ある者、趙子昂に過ぐるはなし。子昂は元に仕え、人多くこれを議す、実は則ち宜しくこれを諒し必ずしもこれを議せざるべきなり。惟だ楷書は則ち全て側媚を取るの

み。所以に董思白も亦たこれを短る。然れども董の楷、古に逼るの境ありと雖ども、明朝の楷書は、宋仲溫よりもって祝枝山・文衡山・孫雷居・婁子柔に逮ぶまで、各おの長ずるところを取る。又にいまだ誰を優るとなすかを知らざるのみ。書は楷をもって正となす。蘇・米よりして後、元・明の士大夫に逮ぶまで、多くは行書に務め、甚しきは意を正楷に留めず。是をもつて愚、行・草に於ては、いまだかつて深くは論ぜず。約してこれを論ずれば、行書は〈蘭亭〉・〈聖教〉を正となし、草書は〈十七帖〉・孫過庭〈書譜〉を正となさば、その大凡を得べし。趙文敏の行書は、却つて正鋒、深厚あり。〈蘭亭〉・〈聖教〉の神韻を得る者に於て、その正楷の上に在り。その側鋒もて媚を取るものは、趙の書の上乗にあらざるなり。

(754) 正矩 用例を見かけない語であるが、ここでは、公用としての典型の意であろう。

(755) 郭郭 註(482)前出。

(756) 東坡乳母任氏墓誌 王世貞『弇州山人統稿』卷一六九にこの墓誌を掲げ「蘇軾の乳母銘の此の刻は黃州に在り。近ごろ人有り、土中に於て之を得たり。蓋し子瞻（蘇軾）の親しく石に書せし者なり。故を以て之を他書に比ぶれば、尤も淳古、遒勁たり。其の用墨の過豊は、則ち顔平原（顔真卿）の遺軌也」という。明中期に湖北省黃岡県で出土したらしいが、いまの所在は不明である。汪鋐『十二硯齋金石過眼録』卷一六には「碑は高さ二尺八寸、広さ二尺。正書、十一行、行十四字。額は乳母任氏墓誌銘の七字を横書す」とあって全文を載せている。拓本未見。

(757) 登州海市詩 登州はいまの山東省蓬萊県をさす。蘇軾の海市詩は、元豊八年十月、蓬萊県城の北一里にある丹崖（徐福が舟出したと伝える処）の蓬萊閣に至り、海市（昏気楼）を眺て詠じた七言古詩である。この蓬萊閣内に

建てられた〈海市詩刻〉の現状については不明である。阮元『山左金石志』巻一七は「正書。石は高さ二尺八寸、広さ六尺。蓬萊島の蓬萊閣に在り」といい、海市詩の全文を載せ、按語に「右刻、凡て二十五行、字径は二寸。末行に翁潭溪閣字（翁方綱）の題せる八分の小字有り。云う、此れ皇統間（一一四一—一四九）の重勒、原迹は凡て二行なりと。云々」という。翁方綱『復初齋文集』巻二五には「（前略）蘇詩の石に入るもの、予の見る所の広州浴日亭の若きは是れ偽刻なり。扶風の天和寺、広州の小金山は、則ち刻手皆に工ならず。此の刻は筆法淳古たり。渤甚しと雖も、而も神理は具さに存す。宝とす可き也」と称揚している。翁は下文にいうように真石を得ての評であるが、重刻本とも未見。

(758) 剔得真石 翁方綱が発見したという、裏面に蘇軾が唐の吳道玄の画跋を書いてある〈海市詩刻〉の真石については、管見におよばない。後考に俟つ。

(759) 米老 米芾をさす。註(115)前出。

(760) 仲宣法芝米芾同觀山樵書 米芾の元祐六年（一一〇九一）の題名。いま江蘇省鎮江市の東北で、長江中の島、焦山の「碑林」内一室の壁に嵌置されている。実見したものの、尺寸を取り忘れたが『八瓊室金石補正』巻一〇七に「高さ一尺七寸四分、広さ二尺。四行、行四字、字径三寸許り。正書、左行す」とあり、「仲宣・法芝・米芾、元祐辛未夏觀。山樵書」が全文である。

(761) 鶴銘 同じく焦山碑林にある瘞鶴銘をさす。註(432)前出。

(462) 天淵 天と地をいい、ここでは懸隔の甚しいことの形容。

(763) 他処亦有米題、非泐損則重摹 『復初齋文集』巻二五・跋伏波巖米題字に「米公の少き年、号して集字と為す。蓋し其の結法は、皆に六朝・唐人従り出する也。今、米書の翻刻せる者は、多く贋して老境横放の作に為る。而して豈に其の少年の筆の蒼秀、性生より出する者なるを知らん哉。予は嘗て涪溪の題字を見るに、清挺にして唐人の矩度有り。今、此の伏波巖の字を見るに、正に与に相い埒し。而して深粹は之に過ぐ。以て外間彙刻の米帖に視ぶれば、侷乎として速し矣。若し力有る者、孔廟の檜簷及び焦山・東林・岳麓・萊州の米公の諸題を彙刻して、一帙を成すを得ば、豈に韻の勝るに非らん哉」ともいっている。

(764) 趙子昂 註(499)前出。

(765) 議 ここでは、せめる、あげつらう意。

(766) 側媚 ここでは下文に「側鋒取媚」とあるように、用筆に側筆を多用することから表面的な妍媚さが出ることをいう意で用いる。

(767) 董思白亦目短之 思白は董其昌の号。註(380)前出。董其昌が趙子昂を諷り皮肉る言は、枚挙に遑ない。なおその『画禅室随筆』巻一に「筆は画中須らく直なるべし。輕易偏軟するを得ず」とあって、いわゆる直筆中鋒を唱導するが、趙の側筆の病を指摘する文を検索しえない。しばらく後にゆずる。

(768) 宋仲温 仲温は宋克の字、註(500)前出。

(769) 祝枝山 明の祝允明（一四六〇—一五二六）の号。字は希哲、枝山の号は、生れつき指一本が多かったのにちなむが、別号を枝指山ともいう。江蘇省蘇州の人。弘治五年（一四九二）の举人、正徳九年（一五一四）に広東省興寧県令となり、ついで応天府通判に遷ったが、ほどなくして致仕し、その後は蘇州に在って文墨生活で一生を終えた。すでに五歳で大字を能くし、九歳で奇気をもなえた詩文を作り、読書はいわゆる数行とも下る天才児であった。長じてのち、詩の徐禎卿、書画の文徵明、画の唐寅と「吳中四才子」と並称された。ことに文徵明とは明代中期の書苑を代表するが、文徵明の温原篤実の紳士に対し、放蕩無頼の粹人として逸話に富む。

その書は、母の父徐有貞の狂草、妻の父李応禎の楷書の影響を受けたといわれ、ことに懷素風の狂草と鍾繇風の楷書で一家をなしている。が一生、臨書に励み魏晉より趙孟頫まで、広く臨学したという。王世貞『弇州山人四部稿』巻一五四・芸苑卮言に「国朝の書法は、当に祝希哲を以て上と為すべし。文徵仲・王履吉・宋仲温・宋仲珩之に次ぎ、陸子淵・豊道生・沈華亭・徐元玉・李貞伯・吳原博 又之に之に次ぎ、餘は未だ品に入らざるが似し」と推重するほか、明人には、ことにその狂草で声誉を得ている。著名な作に、小楷では〈前後出師表〉、草書に〈前後赤壁賦〉（ともに東京博物館蔵）。狂草に〈前後赤壁賦〉（上海博物館蔵）などがある。伝は『明史』巻二八六徐禎卿伝附、『雅宜山人集』巻一〇・行状、『陸子餘集』巻三・墓誌銘、『明詩綜』巻二七、『明詩紀事』丁一一二、「特集・祝允明」『書論』一六）ほか。

(770) 文衡山 衡山は文徵明の号。註(442)前出。

- (771) 孫雷居 雷居は雪居の錯字で、孫克弘の号。註(501)前出。
- (772) 婁子柔 子柔は婁堅の字。註(502)。
- (773) 蘇米 蘇軾・米芾をさす。註(492)と(115)前出。
- (774) 蘭亭聖教 王羲之の〈蘭亭序〉註(489)前出と〈集王聖教序記〉(または集字聖教序ともいう)をさす。〈集字聖教序〉は、いま『西安碑林』の第二室に列置してある。碑石は、唐・高宗の咸亨三年(六七二)、長安の弘福寺に建立された。三五〇×一一三cm。碑の上端に七仏を彫っているところから〈七仏聖教序〉と呼ばれたりもする。碑文は三〇行、行内の字数は八五―八六字である。「聖教序」とは、玄奘三蔵法師がインドより将来した仏典―すなち聖教を、新たに漢訳し、唐・太宗に奉じてこの序文を請い、貞観二二年(六四八)に至って序を下賜され、併せて高宗にも記を賜ったものをさす。太宗の「大唐三蔵序」は七八一字、つづく六三字は玄奘の謝表に対する太宗の報書。高宗の「在春宮述三蔵聖教記」は五七九字、つづく五〇字は玄奘の謝啓に対する高宗の答書である。なおこの碑より前に建てられた褚遂良の〈雁塔聖教序〉(永徽四年・六五三)は、太宗の報書、高宗の答書を省略しているが、この碑はさらに、玄奘の新訳にかかる般若波羅蜜心経、および于志寧ら四人の潤色者の官爵名、また勒石・鐫刻者とその官名ほかを合わせ、四三一字を統刻している。
- 「集王」ないし「集字」とは、弘福寺の僧・懷仁が、碑文の合計一九〇四字を、すべて王羲之の行書を集めてつくった、そのことを示し、のちの〈興福寺断碑〉(七二一年)をはじめ、その後の集王碑の濫觴である。集字者の懷仁の伝記は不明であるが、この集字に関する初見は、彦悛『大慈恩寺三蔵法師伝』で、「時に弘福寺の寺主円定及び京城の僧等、序記の文を金石に鐫り、これを寺宇に蔵せんことを請う。帝、之を可す。のち寺僧の懷仁等、乃ち晋の大將軍王羲之の書を鳩集して碑石に勒す。云々」とあり、唐の内府収蔵の王羲之真蹟に依って集字したことを窺わせる。懷仁らが集字に要した時日については衆説があるが、大約すれば、(一)集字は貞観年間に完了したが、勒石は咸亨三年(郭宗昌『金石史』)、(二)「湊合展縮」のため、二五年を要した(王昶『金石萃編』卷四九)、(三)集字は般若心経を潤色した顯慶五年(五六)に開始した(日比野丈夫「集王聖教序の碑について」平凡社『書道全

集』(8)で、日比野説に説得力があるが、それでも一九年間を要したことになる。なお勒石に際しては、不自然さを少なくするために部分的な修正が行なわれている痕跡があり、また「湊合展縮」(『金石史』の語)を行ったとみられるから、完成までに長年月を要したのである。ちなみに「展縮(展大と縮小)」の数は多いと考えられるが、「湊合(偏旁などの組み合わせ)」は意外に少ないと思う。この点については、拙稿「集字聖教序」(二)文社刊『中国書法ガイド』16)を参照されたい。

建碑後、この書を学ぶ者は多く、ことに翰林学士・呉通微(七八〇―八四在任)がこの書風を能くした影響で、翰林院の胥吏が呉通微の風に倣って大流行し、「院体」とよばれたという。が、次第に俗書に傾いたため、宋代には、院体の出自であるとするこの碑まで顧みなくなったという(黄伯思『東觀余論』卷下「題集逸少書聖教序後」)。この書が再評価されるのは、王澐『虚舟題跋』卷六「唐僧懷仁集王羲之書聖教序」によれば、明の弘治・正徳間(一四八八―一五二二)以後というが、清代以降には、王法の行書の典範としてのこの書の座は、ときに〈蘭亭序〉以上に置かれるほど重んぜられた。ちなみに、原碑は明の万曆四三年(一六一五)に、斜めに断裂した。拓本はもとより未断本が尊ばれ、宋拓と称される十数種の影印がみられるが、手近では『中国法書選』(6)が最良の佳本である。

(775) 十七帖 王羲之の書翰二九通を集刻した単帖で、一帖が楷書のほかは草書である。多くは蜀(四川省成都)に在任の周撫に宛てたものとみられる。冒頭の一通が「十七日先書、云々」で始まるので、この「十七」を二九帖全体の標題としている。が、二九通それぞれにも帖名がつけられている。〈十七帖〉の著録における初見は、唐の張彦遠『右軍書記』(『法書要録』卷一〇)で、題詞と〈十七帖〉二三帖の全文が記されている。題詞には、長さ一丈二尺、一〇七行、全文で九四二字であること、玄宗の「開元」の印記があり、跋尾に当時の大官の官銜名を列記している、ことなどを指摘している。いま〈十七帖〉の完本である「三井本」は、唐尺で一丈四尺一寸、全二九帖あり、六帖分が多い。このことから「右軍書記」は唐・太宗の貞観期の内府墨跡本の原形を記録するものであらうと考えられる。〈十七帖〉の現行刻帖についての初見は、宋の黄伯思『東觀余論』で、石刻本に二種あることをい

っている。二種とは、帖の末尾に「勅」字押署と楷書跋のあるいわゆる「館本」（または勅字本）と、賀知章（六五九—七四四）の臨本を、南唐・李煜が上石したと伝えるいわゆる「賀監本」をさすと思われる。「三井本」ほかの現行（十七帖）のほとんどは「館本」であるから、六行分がいつ付加されたかについては、衆説がある。また「館本」の宋拓と称するものが七種あるが、どれが祖本の原形をとどめているかは不明である。これらの諸点については、多岐にわたるため、拙稿「十七帖」（東京美術刊『王羲之書蹟大系』解題篇所収）にゆずるが、現行本の原形は、玄宗期以後から徳宗期にいたる八世紀中葉から九世紀初頭ころの刻帖ではないかと思われる。

わが国に伝来の「十七帖」中、「三井本」と「上野本」は名帖の誉が高い。「三井本」は一字の欠損もなく、類似の刻がない。即ち鈎摹・刻法とも特異で、一字内の点画を敢て二筆にした、そのいわゆる断筆は、王羲之の骨勢を強調し、遒勁さにおいては、他帖を圧している。戦前まで三井家聴冰閣に秘蔵されていたが、現在その所在は不明である。「上野本」は、上野有竹斎の所蔵によってこの名があるが、いま京都国立博物館の蔵品である。中間に一行分が欠失し、入墨の個所があり、また胡粉で書きおこした点画も少なくないが、無理のない章法とゆつたりとした運筆による自然な風趣に特色がある。このほか、従来から注目されているものに、「欠十七行本」があり、近年見直されているものに、「吳寛本」（上海博物館蔵）、「馮銓本」（開封市博物館蔵）がある。なお名家の臨本も数多いが、古いものでは、わが国に伝来の「瞻近・漢時帖」、また近年、敦煌の莫高窟第一七洞（藏経洞）発見の「瞻近・龍保帖」（大英図書館蔵）と「旃罽帖」（パリ・国立図書館蔵）があり、いずれも晩唐期の臨本とみられる。

「十七帖」の評価は、南宋以後、加速度的に高まり、黄伯思は「書中の龍」と称し（前掲書参照）、董道『広川書跋』巻六・逸少十七帖は、「卓犖天成」と評して以来、明代以後には夥しい数の翻刻が行なわれたが、いまに草書の典範として尊尚されている。

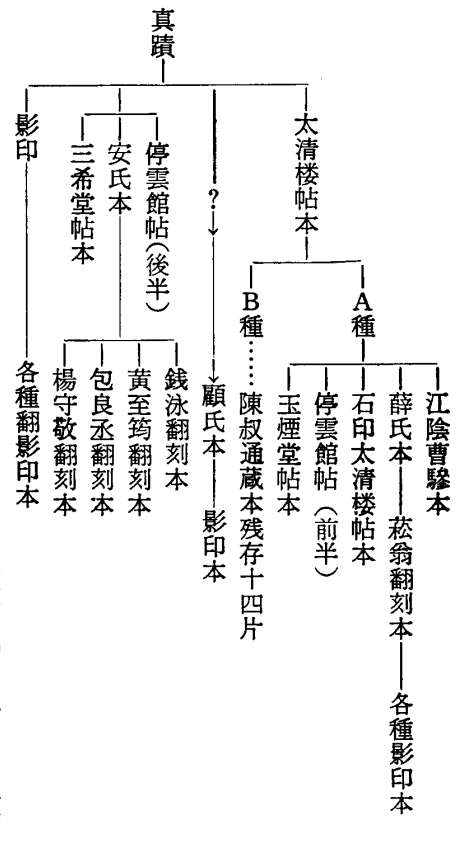
(776) 孫過庭 六四八?—七〇三年以前。字は虔礼、江蘇省蘇州の人というのが通説であるが、古く唐代の文献でも、生歿・名字・籍貫・官職に諸説があって定説をみない。例えば、名は虔礼、字は過庭（陳子昂「率府録事孫君墓

誌銘」とするのをはじめ、河南省陳留の人（『書断』巻下）とも、浙江省富陽の人で官は右衛曹參軍（『述書賦』註）ともいう。陳子昂の墓誌銘によれば、寒門出身のため、仕官も中年頃に辞め、しかも讒言によって官途を阻まれ、洛陽の客舎で病死したという。なお「嗣子孤藐」の語がみえ、『佩文齋書畫譜』巻二六・書家伝には、『姑蘇志』を引き、「孫翔は過庭の子也。亦た書を能くす」とあるが、事歴はわからない。

孫過庭の書として伝わる作に「書譜」（次註参照）、「草書千字本第五本」（遼寧省博物館蔵）、「景福殿賦」（北京・故宮博物館蔵）、「孝経」（台北・故宮博物院蔵）の墨跡本があり、刻本に「草書千字本」（『餘清齋帖』巻四）、「臨晋帖」（『壯陶閣帖』元第六冊）があるが、「書譜」以外は、すべて疑問がある。また歴代の著録には、「摹洛神賦」「獅子賦」「蜀都賦」をあげているが、伝来しない。

孫過庭の書については、唐の寶泉『述書賦』、張懷瓘『書断』以来、二王を祖述した名手として品評するが、前者は、千篇一律で変化に乏しいと誹り、後者は俊抜剛断で天性の才を発揚しているが運筆が急速に過ぎて雄厚の氣に乏しいとする。『宣和書譜』巻一八には、前代の衆評を要約し「（前略）草書を作るや、咄々として義・猷に逼り、尤も用筆に妙なり。俊抜剛断は天材に出で、功用積習の至る所に非ず。臨摹を善くし、往々にして真贋弁ずること能わず。文皇（太宗）嘗て謂う、過庭の小字書は二王を乱ると。蓋し其の真に似たること知る可き也。運筆論を作り、字数千を逾え、作字の旨に妙有り。学ぶ者は宗として以て法と為す。然れども落筆は急速を喜び、議する者は之を病とす。要（かならず）是れ其の自得の趣也。云々」という。

(777) 書譜 一名「運筆論」（『書断』巻下）ともいう。唐・則天武后の垂拱三年（六八七）、孫過庭自筆の草稿紙本が、台北・故宮博物院に現存する。本幅は二六・五×九〇・八cm、卷子装。題字と款記を合わせ三五行、本文は行内の字数八—一二字。全文で三七二七字である。原巻は一紙四三cm内外を二三紙継いでいるが、数次の改装で、中ごろ一二紙目以下の「一六六字」と一五紙目に三〇字を欠失している。その欠失部は、次頁に掲出の「薛氏本」などによって補ないう。



右の系統図にみる〈書譜〉刻本は、すべてこの真蹟に拠るが、もと二巻に分装されていたものを、明代中期に一卷に合装されたらしい。ただ現存本で完本か否かについては、いまなお議論があるが、真蹟本の通伝、刻本の個々などについても、ここでは述べきれないので、拙著『書譜』（明德出版社刊『中国古典新書』の一）の解説を参照されたい。

書の歴史上、〈書譜〉の重要性は、王羲之書法を忠実に継承する数少ない草書の名品であることと、内容が書芸術論の古典的名著だという点にある。書法面に關しては、北宋以来〈十七帖〉に次いで草書の典範として学ばれ、容易に人の書を認めない米芾でさえ『書史』に「(前略)孫過庭の草書書譜は、甚だ右軍の法有るも、作字の落脚、差や前に近く、而して直なるは、此れ乃ち過庭の法なり。凡そ世に右軍の書と稱して此れ等の字有るは、皆に孫の筆也。凡そ唐の草の二王の法を得たるは、其の右に出ずる無し。云々」というほか、称揚する人が多い。また貶詞にわたるものも、註(776)に引く『宣和書譜』にみるように、王羲之に比べ、変化が少なくやや縦逸に過ぎることを指摘するが、それでも王法を会得する門徑であると評価する。わが国にも伝空海筆の〈書譜〉断簡二種があつて、早くに伝来したものがあつた模様であるが、降つて江戸晩期の市河米庵は、その『米庵墨談』卷一・十七帖に「(前略)余、曾テ云、十七帖ヲ学ニハ、マツ孫過庭ノ書譜ヲ熟学スベシ(中略)余、貞觀館本ヲ以テ書譜トソノ趣ヲ比較スルニ、字体ハ殊ナレドモ、状欲

断、而還連、蹟似、奇而反、正ナルモノ、右軍草書の法脈ヲ存セルハ、過庭ニ過グル者ナシ。云々」(原文のまま)というように、わが唐様の書人にも広く学ばれた。また書芸術論としてのその内容は、〈書譜〉の末段に「今、撰して六篇と成す」というが、各篇を通ずる論述の骨子は、王羲之を典型として漢魏から齊梁にいたる名家の書を品第し、書の功用を論じ、先行書論を品評し、書法理念の在り方を啓蒙するもので、楷・草書という実用書体を基準とし、書体や書法の伝流を包括して、敷衍し評論しており、また書体に益する名言が散見している。

(778) 趙文敏 文敏は趙孟頫の諡。註(499)前出。